静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

〈平成 30 年度修士論文（静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科）〉

日本のホームスクールの現状と課題

―家庭を拠点に学ぶという選択―

Homeschooling in Japan
-Processes of Choosing Home over School as a Place of Learning-

鈴木七海　Nanami SUZUKI
（論文指導：静岡文化芸術大学教授　森俊太）

目次

要旨 ····· 1
1.　はじめに ····· 3
2.　アメリカのホームスクール ····· 8
3.　日本のホームスクール ····· 17
4.　日本のホームスクールの特徴 ····· 35
5.　結論と考察 ····· 41
引用文献 ····· 45
図表 ····· 48
資料 ····· 56

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

目次

要旨 ····· 1
1. はじめに ····· 3
1.1 ホームスクールとは ····· 3
1.2 先行研究 ····· 4
1.3 研究目的・研究課題・研究方法 ····· 5
1.4 研究仮説 ····· 6
2. アメリカのホームスクール ····· 8
2.1 アメリカのホームスクールの概要 ····· 8
2.2 アメリカのホームスクール運動 ····· 9
2.3 アメリカにおけるホームスクールの選択理由 ····· 11
2.4 アメリカのホームスクール経験者の声 ····· 11
2.5 アメリカのホームスクールの社会的及び制度的特徴 ····· 16
3. 日本のホームスクール ····· 17
3.1 日本のホームスクールの動き ····· 17
3.2 質問紙調査の概要と結果 ····· 18
3.3 質問紙調査の結果と考察 ····· 20
3.4 インタビュー調査の概要 ····· 23
3.5 インタビュー調査の結果と考察 ····· 23
4. 日本のホームスクールの特徴 ····· 35
4.1 日米のホームスクールの比較 ····· 35
4.2 日本のホームスクールとフリースクール・オルタナティヴスクールの比較 ····· 37
4.3 研究仮説の検証 ····· 39
5. 結論と考察 ····· 41
5.1 結論―日本におけるホームスクールの現状と課題 ····· 41
5.2 考察 ····· 41
5.3 今後の研究課題 ····· 43
引用文献 ····· 45
図表 ····· 48
資料 ····· 56

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

要旨

本論文は、ホームスクール実践者への質問紙調査とインタビュー調査を通して、日本のホームスクールの全体像を把握し、その現状と課題を明らかにすることを目的としている。「学校信仰」が日本社会に深く浸透している現状を踏まえた上で、「ホームスクールの実践の意義」を解明する。

ホームスクールは、アメリカやイギリスなど世界の多くの国で、法律で認められている教育形態のひとつである。一般的に親が子どもの主たる教育を学校に任せる代わりに、主に家庭で教育することをホームスクールというが、その方法は家庭によってさまざまである。日本において、その知名度はまだ低く、またその実態に関する学問的研究はほとんど存在しない。

日本のホームスクールは不登校と関係が深く、本調査においても子どもの不登校をきっかけにホームスクールを選択した人びとが多いことが明らかになった。しかし、「不登校の受け皿」や「休養の場」としてホームスクールを選択した人は少数であった。多くの人びとは、ホームスクールの実践を続ける中で、ホームスクールを「学校と同等の、またはより優れた教育の選択肢のひとつ」として肯定的に捉え、積極的な実践姿勢へと変化していく様子が見られた。

日本のホームスクール実践者の多くは、イヴァン・イリッチの教育の「学校化」理論に賛意をしめしている。また、実践者の多くはジョン・ホルトの教育哲学である「アンスクーリング」の理念を参考にしながら、ホームスクールを行っていることが明らかになった。

キーワード：ホームスクール、教育の選択肢、イヴァン・イリッチ、アンスクーリング、不登校

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

Abstract:

The purpose of this paper is to grasp the overview of the current conditions and issues of homeschooling in Japan by using questionnaire surveys and interviews. Provided that the most Japanese share the value of going to schools as obvious, my research attempts in particular to clarify “the significance of practicing homeschooling”.

Homeschooling is one of the educational methods that is permitted by law in many countries, for example the United States, England, etc. Homeschooling is an educational method which parents educate their children at home instead of sending them to schools. Styles of homeschooling depend on households. Homeschooling has a low recognition and few academic papers exist on it in Japan.

Homeschooling is related to school non-attendance in Japan. My research revealed that there are many parents who chose to homeschool because their children do not want to or cannot attend schools. However, few who practice homeschooling think that their home is a shelter to escape from schools. Most of them positively recognize homeschooling as "one of educational options equivalent to or better than schools" and their attitude toward homeschooling is becoming positive in the process of homeschooling their children.

Many Japanese parents who practice homeschooling express their agreement with Ivan Illich’s theory of “schooling” of education. Moreover, they use Holt's educational philosophy of "unschooling" as a reference in their homeschooling practice.

Key words: Homeschool/ Homeschooling, Choices of schooling methods, Ivan Illich, Unschooling, School Non-attendance

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

1.　はじめに

1.1　ホームスクールとは

ホームスクールとは、アメリカやイギリスなど世界の多くの国において、法律で認められている教育形態のひとつである。一般的には、親が子どもの主たる教育を、学校に任せる代わりに自ら家庭で行うことをホームスクールというが、その方法はさまざまである。イギリスではホームエデュケーション、日本では在宅教育という用語が使われることもあるが、本論文では一貫してホームスクールと言う用語を使用する[1]。日本のホームスクールの定義としては、吉井(2000、p.55)の「ホームスクールとは、親や地域の大人が、家庭や地域を拠点に、学校教育を含む様々な教育資源を活用して、子どもの自己選択を尊重しながら、子どもの教育に積極的にかかわる」を採用する。また、ホームスクールで子どもを育てている親を「ホームスクール実践者」、子どもたちを「ホームスクーラー」と呼ぶこととする[2]。

日本では、ホームスクールという用語を聞いたことがない人も多い。しかし、近年ホームスクールを行う家庭が世界中で増加しており、日本もその例外ではない。Ray(2018)の“*Research Facts on Homeschooling*[3]”には、「世界中の多くの国々でホームベースドエデュケーションが広まっている」と書かれており、その中に日本も挙げられている。また、2016 年 12 月に日本の国会で成立した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律(以下通称：普通教育機会確保法)[4]」は、学校外の教育の役割を認めている。その学校外とは、主にフリースクールをはじめとする「オルタナティヴスクール」(以下参照)を意味するが、ホームスクールも含まれるとする意見もある(フリースクール全国ネットワーク・多様な学び保障法を実現する会編 2017、pp.173-174)。総じてみると、日本においてもホームスクールが徐々に広がりを見せつつあることは確かである。しかしながら、現時点において、日本におけるホームスクールの実態についての学問的研究はほとんど存在していない。

なお、多くの国々で使用されているオルタナティヴスクールという用語は、一般的（または主流）な学校とは違う学校全てを指し、設置形態に関わらず公立、私立、無認可校を含む。しかし、日本でこの用語が使用される場合は、学校教育法に定められている正規の学校(一条校[5])

---

[1] 家庭を基盤として学び・成長する子どもと、その家族のための専門支援機関であるホームシューレは、学校（スクール）と切り離して考えるためにも「ホームエデュケーション」という呼び名を推奨している（NPO 法人東京シューレ編 2006、pp.10-11)。また、家庭の意識によっては、アンスクーリングやホームスクーリングなどと呼ぶこともある。(ホームスクーリングセンター木陰 HP　https://homeschool905.wixsite.com/kokage/study 最終閲覧日 2018 年 12 月 23 日)

[2] アメリカでも日本でも、ホームスクーラーが親や教師のことを指す場合もあれば、子どもを指す場合もあり、その定義は定まっていないが、本論文では一貫してホームスクールで学ぶ子どもを指す用語として扱う。

[3] Brian D.Ray は“*Research Facts on Homeschooling*”にホームスクールの概要、選択理由や選択者の社会的地位などについて記述している。このリサーチ結果は、同じタイトルで毎年、または数年ごとに更新されており、新たな情報が加筆されている。確認している限りでは、2006 年時点では、世界各地でホームスクールが広がっていることは書かれていたが、具体的な国名は挙げられていなかった。2013 年には、日本を含む国の名前が挙げられるようになっている。

[4] 平成 28 年法律第 105 号。

[5] 学校教育法 1 条に定める学校。具体的には、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学、高等専門学校の 8 種がある。(今野ほか編 2014、p.22)

は含まれない。フリースクールとはオルタナティヴスクールのひとつであり、海外、少なくとも英米では、デモクラティックスクールとも呼ばれ、「独立と民主」を教育理念として運営される学校を指す(鈴木 2015、p.38)。しかし、日本のフリースクールの実態は、不登校児童生徒を受け入れる居場所としての役割が大きい。フリースクールに通っている子どものほとんどが不登校経験者で占められており、少なくとも英米のフリースクールの事例とは性質が異なっている(吉井 1999、p.87)。

1.2　先行研究

ホームスクールに関する研究や書物の多くは、アメリカにおける実践例を基にしたものが多い。メイベリー他(1995)の“*Home Schooling: Parents as Educators*”は、アメリカのホームスクール実践者はどのような考えを持っているか、ホームスクール運動がどのように発展していったのか、さらに実践者の声など、ホームスクールについて幅広く研究しまとめている。Gaither(2008)の“*Homeschool An American History*”は、メイベリー他(1995)の研究より、さらにアメリカの歴史を遡り、ホームスクールの歴史を解き明かしている。

日本の論文、図書・雑誌や博士論文などの学術情報が検索できるデータベース・サービスの「CiNii(NII 学術情報ナビゲータ)」で調べてみると、ホームスクールに関する先行研究の半数以上が、アメリカにおけるホームスクールを取り上げている。佐々木(2009)は、アメリカのホームスクール実践者を対象とした数年にわたる調査を通し、単に教育の場が家庭であると言う意味だけに収まりきらないホームスクールの多面性を明らかにしている。秦(2000)は、アメリカにおいてホームスクールと通常の学校制度が相互に与えている影響とその変化について考察し、日本におけるホームスクールの可能性を示唆している。Bozek(2015)は、日本に在住しながらアメリカ的なホームスクールを実践した実体験を踏まえて、ホームスクールの基本的な実例を示している。

日本におけるホームスクールの先行研究としては、吉井(2000)がホームスクール実践者とその家族が住む学区の小学校教員にインタビュー調査を実施し、家庭と学校の双方の考えを浮き彫りにした。既に記したが、吉井は「ホームスクールとは、親や地域の大人が、家庭や地域を拠点に、学校教育を含む様々な教育資源を活用して、子どもの自己選択を尊重しながら、子どもの教育に積極的にかかわる(吉井 2000、p.55)」という定義をしている。また、ホームスクールにおいて大事なことは「どこに通うかではなくて、ホームスクールの思想が示唆するように、『自己を基点とした生き方の追求』(吉井 2000、p.72)」であるとしている。ただし、吉井が事例として取り上げている家庭は 1 家庭のみであり、日本におけるホームスクールの在り方について一般化はできない。ホームスクールは実践している家庭の数だけ、その数に応じた教育方針や実践スタイルが存在するともいえるからである。西川(2003)はホームスクール実践者へのアンケート調査を実施し、日本では子どもの不登校をきっかけにホームスクールを始めた家庭が多いことを明らかにしている。さらに、アメリカのホームスクールとの比較を通し、当時の

日本のホームスクールの特徴を浮き彫りにしている。

直接ではないが、ホームスクールに関連する先行研究として、吉井(1999)、山田(2000)、菊池(2009)を参考にする。吉井(1999)は日本のフリースクールが不登校児童生徒を受け入れる民間施設という特徴を持つとして、「日本版フリースクール」の意義と役割を明らかにしている。山田(2000)は、子どもが不登校になるという「事件」が家庭を揺るがした後、親にどのような心の変化があり、子どもを受容するようになったか、そしてその過程の中にあるアンビヴァレンス[6]な感情を明らかにした。菊池(2009)は、山田(2000)を踏まえ、「“学校に行くこと”を当然とみなす考え方を“既存の価値観”、その対極にある“学校に行かないこと”を認めるように変化した場合を“新しい価値観”(菊池 2009、p. 194)[7]」として、母親の持つアンビヴァレンスな感情の内実を彼女たちの語りから解き明かしている。

日本のホームスクールに関する先行研究の特徴としては、それらの多くが 1995 年からの 10 年間に書かれていることである。詳しくは後述するが、ホームスクールという言葉が日本のメディアに登場し始めた時期が、1995 年前後であったことと関係があると考えられる。それ以降もホームスクールに関する研究は進んでいるが、主として欧米圏におけるホームスクールについて書かれており、「現在の日本の」ホームスクールについての研究は見当たらない。

1.3　研究目的・研究課題・研究方法

本研究では、現在の日本におけるホームスクールの全体像の把握とともに、ホームスクールの実践の現状と実践者が抱える課題、そしてホームスクール実践者の語りを参考にしつつ、ホームスクールの実践の意義を明らかにすることを目的とする。言い換えると、実践者に焦点を当てた調査を行うために、実践者を対象とした質問紙調査とインタビュー調査を行い、その結果を踏まえて、ホームスクールの全体像を明らかにしていく。この目的を果たすための研究課題を以下の 3 点に設定する。

課題 1　学校に行かず、家庭で教育をすると決断するまでに、どのような経緯があったのか

日本のホームスクール実践者およびホームスクーラーの多くは不登校を経験しているため、「子どもの受苦・家族の苦悩→価値観の変化/子どもの受容→子どもや家族の回復(山田 2000、p. 51)」という大筋の経緯と同様の過程を経ていると考えられる。しかしホームスクール実践者たちは、この大筋の経緯より一歩進み、さらに「家庭で子どもを育てる決断」をしている。また、ホームスクール実践者たちは、菊池(2009)の提示した 「新しい価値観」を認めるだけではなく、その価値観を選択した(下線部筆者強調)ことになる。つまり、ホームスクールをすることは、親自身の教育者としての責任の重みが増し、かつ、その責任の質も変化することを意味している。したがって、ホームスクール実践者の親が、このような大きな決断をするに至った

[6] 一つの対象に対して、愛と憎しみのような相反する感情を抱くこと。両面価値的であること。(広辞苑 第七版)
[7] 菊池 (2009) の本文中には“学校に行くこと”、“既存の価値観”、“学校に行かないこと”、“新しい価値観”とクォーテーションマークが使われているが、以降、本論文ではクォーテーションマークは使用しない。

経緯に着目して研究を進めていく。

課題２　なぜ「学校」ではなくホームスクールを選択したのか

子どもが不登校になった後の選択肢は、公教育の学校以外にもフリースクールなどの「学校」が存在するが、なぜ「学校」ではなくホームスクールを選択したのか。

課題３　ホームスクールならではの教育観はあるのか

「学校信仰[8]」から解放されたホームスクール実践者たちは、特有の教育観をもっているのか。また、その教育観に合った教育の場が「家」でなくてはならなかった理由は何だろうか。

ホームスクールの実践の意義を明らかにするには、ホームスクールの実践を続ける理由や価値観を明らかにする必要があると考えたため、上記の課題を選択した。また、これらの研究課題からもわかる通り、調査の対象の中心となっているのはホームスクーラー自身ではなく、実践者である親である。

これらの研究課題を明らかにするための研究方法として、文献調査、質問紙調査、インタビュー調査を選択した。ホームスクールについての全体像を明らかにするために、日本とアメリカのホームスクール、日本のフリースクールなどのオルタナティヴ教育に関する文献を調査した。質問紙調査とインタビュー調査の詳細については後述する。

1.4　研究仮説

西川(2003)の研究は、日本では不登校をきっかけにホームスクールを始めた人が多いことを明らかにしている。そのようなタイプを、不登校後には「ホームスクールしか選択肢が残されていなかった」として「消極的選択」モデルとする。これに対して、不登校とは特に関係なく「ホームスクールを実践したい」と主体的に考えた選択を「積極的選択」モデルとする。なお、この選択は二極化しているのではなく、間には両者が混合したタイプの存在、つまりグラデーションがあると考えられる。また、日本におけるホームスクールの選択のきっかけは不登校が多く「消極的選択」モデルが主であったが、選択後のホームスクール実践の姿勢は、必ずしも選択のきっかけと同様に消極的であるわけではない。ホームスクールの選択と実践双方の姿勢における積極性の度合いにより、ホームスクール実践の意義は異なる。

ホームスクールの選択と実践の姿勢における積極性と、実践の意義の仮説を、図１に示した。横軸はホームスクールの選択の積極性、縦軸はホームスクールの実践の姿勢の積極性を表している。第一象限は、「積極的選択」モデルであり、実践の姿勢も積極的である者が該当し、ホームスクールを学校と同等、またはより優れた教育の選択肢のひとつとして考えている(グループ A)。第二象限は、「消極的選択」モデルで、実践の姿勢では積極的な者が該当し、ホームスクールが学校と同等、またはより優れた教育の選択肢のひとつに変化している(グループ B)。第三

[8] 学校信仰とは、菊池（2009）の言うような、「学校に行くこと」を当然とみなす考え方を持つことを指す。

象限は「消極的選択」モデルであり、実践の姿勢も消極的である者が該当し、ホームスクールを不登校の受け皿や休養の場として捉える傾向にある(グループ C)。第四象限は、「積極的選択」モデルで、実践の姿勢では消極的な者が該当し、ホームスクールが合わない、ホームスクールでは費用や親の仕事で生活が成り立たないなどの理由でホームスクールをやめることも検討している(グループ D)。以上のように、ホームスクールの選択と実践の姿勢に関する積極性の度合いを基準にして、4 つの実践の意義を設定した。この仮説をもとに議論を展開し、本論の最後に仮説の検証を行う。

2. アメリカのホームスクール

第 2 章では、世界的に見てもホームスクールが盛んに行われており、ホームスクールの研究でしばしば参考として取り上げられているアメリカのホームスクールについて述べる。日本のホームスクールの特徴を明らかにするために、まずはアメリカのホームスクールを理解することが重要である。

2.1　アメリカのホームスクールの概要

今日のアメリカでは、ホームスクールとは親が子どもを学校に行かせる代わりに、主に家庭で教育することであると理解されている。ホームスクールは、義務教育期間の教育の選択肢のひとつとなっており、教育方法として社会で広く知られている。公立の学校やチャータースクール[9]と協力したり、図書館や教会といった家庭外の場所でホームスクーラーの仲間とともに学んだりすることもあり、その方法は家庭ごとに多様である。近年ではホームスクールのためのオンライン講座が開かれるなど、IT の進化がホームスクールの展開を後押ししているといえる。全米教育統計センター(National Center for Education Statistics、以下 NCES)によると、アメリカでは 2016 年の時点で、169 万人以上(学齢期児童生徒の約 3.3%)がホームスクールで教育を受けていることが明らかになった。2003 年の時点では、109 万人程度(学齢期児童生徒の約 2.2%)であったことを考えると、ホームスクーラーが 13 年間に 60 万人、学齢期児童生徒の人口比で見ても約 1%増加したことがわかる[10][11]。

アメリカでは、幼稚園年長にあたる年を K(Kindergarten)と呼び、小学 1 年生から高校 3 年生にあたる年をグレード 1 から 12 と呼ぶ(図 2 参照)。義務教育期間は州によって異なるが、一般的には K からグレード 12 までの間に設定されている[12]。そして、ホームスクールはその期間内で実施することが一般的である。

アメリカには、ホームスクールに関する法律「ホームスクール法(Homeschool Laws)」が州ごとに定められている。各州の法律では、「①就学義務の例外として認める場合、②私立学校と同様の地位を認める場合、③特例法によって認める場合(秦 1999、p.87)」の 3 つ方法でホームス

---

[9] チャータースクールは、各州の教育法（チャータースクール法）に基づき設置される公立学校であり、公費によって運営される。一般の公立学校が、州の下に置かれた初等中等教育行政専門の地方政府である学区によって設置されるのに対して、チャータースクールは、父母や企業、教員グループなどが、それぞれの教育理念を実現するために設置主体となって、教育法に定められたチャーターの認可機関（主に州や学区の教育委員会）との契約（cherter）に基づき設置運営するものである。原則として通常の公立学校を対象とする州や学区の規定が適用されなくなるため、自由な学校運営、独自の教育課程の提供、通学地域を超えた児童・生徒の受け入れが可能であるが、教育成果（在学者のテスト得点等）や学校の財務状況に関する定期的な監査が行われ、契約で交わされた成果を上げることができない場合は契約が取り消され、閉校となる場合もある。(文部科学省 2009、p.45)

[10] Table 206.10.　Number and percentage of homeschooled students ages 5 through 17 with a grade equivalent of kindergarten through 12th grade, by selected child, parent, and household characteristics: Selected years, 1999 through 2016 (NCES　https://nces.ed.gov/programs/digest/d17/tables/dt17_206.10.asp　最終閲覧日 2018 年 12 月 23 日)

[11] Ray(2018)は、2016 年春の時点でアメリカには 230 万人のホームスクーラーがいると報告している。調査機関によっては調査結果に大きく違いが見られているが、ホームスクーラー人口が着実に増加していることはいえる。

[12] 義務教育の年数は多様であり、9～13 年まである。また、アメリカの学制は州というよりは学区によって学制が異なっている。(8-4 制、6-6 制、5-3-4 制など)（原ほか 2016、p.135）

クールを認めている[13]。ホームスクール実践者は、各州の法律に従ってホームスクールを実施することになる。Home School Legal Defense Association(ホームスクール法律擁護協会 以下、HSLDA)は、アメリカの州ごとのホームスクール法を規制の程度により、high regulation(強い規制)、moderate regulation(中程度の規制)、low regulation (弱い規制)、requiring no notice(規制なし)の段階に分類しており、それぞれの例は表 1 のとおりである。

2.2　アメリカのホームスクール運動

アメリカでは、1970～80 年代にホームスクール運動が盛んになった[14]。ホームスクール運動の発展の背景には、第一に公教育を官僚主義的で画一的とする批判からオルタナティヴな教育を求めた人びとの教育運動の広がり、そして第二に伝統的なキリスト教の価値観をかかげた新保守主義の社会運動の台頭が挙げられる(長嶺 2003、p.114)。

第一の教育運動を理論的に支えていたのは、ホームスクール運動の父と呼ばれるジョン・ホルトや、「脱学校論」提唱者のイヴァン・イリッチである。教師としての経験を持つホルト(1982)は、すべての子どもたちは生まれながら聡明(intelligent)であるが、学校教育を受けることで、子どもたちは教師の承認を得ることや、自分で考えることよりも正しい答えを求めることのみに集中してしまうため、その本来持っている聡明さを失ってしまうと説いた。イリッチ(1971)は、教育を学校だけが行うことができるとする考え方や制度を批判した。教育が「受け取って当然のサービス」となると、子どもたちは、教授されることのみが学習することと考えてしまうようになり、教育の「学校化」が起こると論じた。その結果として、子どもたちの自立性や想像力が失われていくと説き、「脱学校論」を提唱した。なお、ホルトは 1971 年にイリッチとの交流をきっかけに大きな影響を受け、「脱学校」の具体的な解決策としてホームスクールによる学びの仕組みを導き出した。そして、ホルトとイリッチの共通した「学校」への批判的な姿勢に共感したアメリカの人びとは、ホームスクールなどのオルタナティヴスクールを広めていったのである。

第二の宗教的な社会運動を支えていたのは、ホルトの友人である心理学者のレイモンド・ムーアである。ムーアはキリスト教の一派であるセブンスデー・アドベンチスト[15]の一員であり、

---

[13] ホームスクールが学校と同様の地位を認められていない場合、大学に進学する際に General Educational Development(GED)という、後期中等教育の課程を修了したことを証明するテストを受ける必要がある場合もある。(A2Z Home’s Cool https://a2zhomeschooling.com/teens/ged_homeschool/ 最終閲覧日 2018 年 12 月 23 日)

[14] それ以前にもホームスクールを実践している人びとはいた。例えば、ホームスクールのパイオニアと言われているマリオン・スチッケルは 1950 年代にホームスクールを行っていた。スチッケル家は広い農地を持っており、子どもたちによる農作業の手伝いが必要であり、ホームスクールを選択した。地域の学校長もスチッケル家の子どもたちが十分な教育を受けていることを確信していたため、この時点では非合法であったホームスクールを認めてもらうことができた。なお、スチッケル家の 13 人の子どもたちは全員大学へ行き、そのうち 5 人は、大学院まで進学している。(Gaither2008、pp.83-84)

[15] 聖書を絶対の規範とし、三位一体や処女降誕、十字架の贖罪を認めることや再臨信仰など、多くの福音派教会と同じ信仰に立つ。土曜日を安息日として聖日礼拝を固守するという特徴がある。また、収入の一割を教会に捧げる什一献金を、信徒に厳しく指導している。旧約レビ記に準じた食物規定を重視し、菜食主義をとるメンバーも多い。(八木谷 2012、pp.211-215)

子どもを教育する権利は親にあるという聖書の教えに従ってホームスクールを推進した[16]。ムーアに影響されたキリスト教保守派の人びとは、ホームスクール運動を推進する中核となっていった。

アメリカのホームスクールは、キリスト教との関係が深い。多民族国家であるアメリカでは、学校にさまざまなマイノリティ集団の子どもたちが在籍する。それは、キリスト教保守派の考え方とは異なる宗教観が、主に公立の学校で教えられることを意味する。マイノリティ集団の子どもたちが学校に入ることで、キリスト教保守派の人びとは自分たちの神が学校から追い出されてしまうと感じることとなった[17]。その追い出された神を求めて、キリスト教保守派の人びとは公立の学校を去っていった。しかし、彼らは学校を去ってすぐにホームスクールを始めたわけではなく、キリスト教の学校を作ることから始めた。American Association of Christian Schools(米国キリスト教学校協会)などのキリスト教の学校が、主に 1970～1980 年代の間に建てられているのには、このような背景があった。しかし、少数のキリスト教保守派の親はこの代替策を受け入れられなかった。その理由には、「私立学校の授業料を払う余裕がない」、「聖書は親が子どもを直接教育することを指示している」、「とくに母親は単純に子どもと多くの時間を過ごしたいと考えている」といったものがある。こうして、一部のキリスト教保守派の人びとはホームスクールに挑戦し始めたのだった(Gaither2008、pp.107-110)。

以上のことから明らかであるように、ホームスクール運動を支えていた人びとは 2 つの目的別グループに分類できる。1 つめは、ホルトの系譜をひく「オルタナティヴな教育」を求める人びと、2 つめは、ムーアの系譜をひく「宗教的理由」からホームスクールを行う人びとである。また、ホームスクール実践者は主に 2 つの団体を組織し、次にそれらの団体は個々のホームスクール実践者を支援したため、結果的にホームスクール運動が大きく飛躍したのである。ホルトの系譜をひく団体である全米ホームスクール協会(National Home School Association)と、ムーアの系譜をひくホームスクールを支援する団体である HSLDA の 2 つの団体である。HSLDA は全米で最大のホームスクール団体であり、ホームスクールに関する法律問題を解決することが主な役割である。HSLDA は、ホームスクールの調査や情報収集・発信を行っている機関である National Home Education Research Institute(以下、NHERI)などの組織と連携を図り、保守派キリスト教徒のホームスクールの発展に寄与している。ホームスクールが全ての州で、法律で認められるようになるまでには、これらの団体のサポートが不可欠だったといえる(長嶺 2003)。

---

[16] 全国クリスチャンホームスクール支援センター（アージック、AHSIC＝Association of Homeschoolers in Christ）の代表の吉井春人氏によると、「私と、私の家は主に仕える」というヨシュアの言葉に代表されるように、子どもの養育について家庭に対して示された役割は明確であることから「子どもは家庭をベースに育つ」ということは聖書で示されているという。(Christian Today「聖書に基づいた家庭教育を　クリスチャンホームスクーリングの活動に迫る」https://www.christiantoday.co.jp/articles/626/20070326/news.htm　最終閲覧日 2018 年 12 月 23 日)また、セブンスデー・アドベンチストの創始者である Ellen G. White はいつも「ホームスクーリングとうまく調和する家族の神学(Gaither2008、p.128)」を主張していたという。

[17] “put the Negroes in the schools－Now they put God out of the schools” （原文のまま）(Gaither2008, p.107)

2.3　アメリカにおけるホームスクールの選択理由

上記のように、アメリカのホームスクール運動は2つの異なる志向を持つグループによって進められていたが、Ray(2018)の調査によると、ホームスクールを選ぶ理由は実際には多岐にわたる。例えば、子どものレベルや目標に合わせてカリキュラムやスケジュールが組めること、親の宗教や信条にあった教育ができること、いじめや薬、暴力といった学校で起こりうる脅威から子どもを守れることなどが挙げられている。子どもが学校制度や環境に馴染むことができないため、といった理由は少数である。多くの親が、ホームスクールは子どもの気持ちを汲み取って選択していると主張するが、上記の選択理由からは親による選択であることが伺える。

アメリカのホームスクール運動の歴史をたどると、宗教が大きな背景にあることは既に示したが、家庭を対象とした教育に関する全米調査プログラム(National Household Education Surveys)によると、2012 年度のホームスクール選択理由の第一位は、「既存の学校の環境への心配」であり、「宗教的理由」は第四位まで下がっている(Redford ほか 2016、pp.11-12)。「既存の学校の環境への心配」には、安全面や薬物、同調圧力などを含むが、それ以外にも、アメリカの公教育には格差などのさまざまな問題がある。

「自由と平等の国」と称されるアメリカであるが、平等に対する価値観は日本のそれとは大きくかけ離れており、公教育の機会均等は実現されておらず、学校によって施設やカリキュラムにまで格差が生まれてしまっている[18]。「アメリカの極めて断層化された学校システムは、確かに『無限の可能性』を売りにするものの、それは『低い確率』という条件付きであり、教育の機会均等からはほど遠い(鈴木 2016、pp.53-54)」という。つまり、選択肢を多く設けることで教育の機会均等を可能にしていると考えられているが、実際にはその機会を有効に活用できるのは、限られた一部の富裕層であり、貧困層の子どもたちに選択肢はない。また近年、公教育に営利企業が参入する事例が多くみられ、公教育の格差の問題をさらに助長させる結果が増えている。例えば、本来は公教育であるチャータースクールの中には、企業から多額の援助金を受け取り、営利団体へと変貌している例も見られる[19](鈴木 2016)。このように、アメリカの公教育には、いじめや薬、暴力といった教育上悪影響な学校環境だけでなく、貧富の格差や公教育の市場化といったさまざまな問題を抱えており、ホームスクールが広がりつつある理由になっている。

2.4　アメリカのホームスクール経験者の声

この節では、アメリカに住むホームスクール経験者のエマとオリビア、ソフィアに対するア

---

[18] アメリカの多くの州では、固定資産税が教育予算の主要な財源となっているため、地価の格差がそのまま公教育の予算の不平等へとつながる。トイレットペーパーといった基本的な設備さえもままならず、各家庭が学校に資源を持って行かなくてはならないというケースもある。また、2001 年に連邦教育法の No Child Left Behind Act が教育格差の是正を目的に制定されて以降、学校存続がかかっているためにテスト科目が重視され、体育や音楽といった授業が開講されない学校もある（鈴木 2016、pp.47-57)。

[19] 例として、「ロケットシップ・エデュケーション」という急成長中のチャータースクールが挙げられる。このチャータースクールで、子どもたちは毎日 2 時間コンピュータに向かい、個別指導を受ける。そこでは、「ティーチ・フォー・アメリカ」という 5 週間の訓練を受けた無免許インストラクターが指導にあたることもある（鈴木 2016、pp.25-27)。

ンケート調査の回答をまとめ、考察する[20]。現在彼女たちは、全員大学へ通っている。調査対象は3人と少ないが、一人ひとりの育った環境や価値観は異なっており、ホームスクールの多様性を明らかにすることができた。質問は表2のとおりであり、アンケートの回収後には、必要に応じてさらに追加で個別に質問をした。

回答者1：エマ(資料1参照)

エマは12歳から14歳の間、ホームスクールで育った。彼女はキリスト教徒である。しかし、質問 2[ホームスクール選択理由]に対する理由として宗教的理由は記しておらず、親が学校の決め事に納得できないことがあったことと、自分が学校を楽しめていなかったことを挙げた。確認したところ、宗教的理由でホームスクールを始めたわけではない、ということだった。質問 3[ホームスクールを勧めた人は誰か]に対しては、誰かに勧められたわけではなく、ホームスクールをしている友人が何人かいたため、ホームスクールはもとから選択肢のひとつであったと答えた。

数学は母親に教えてもらい、ほとんどの教科は、教育学の学位を持っている父親に教えてもらったという。両親から与えられた学習計画は、数学とスペリングの勉強を毎日することであり、ほとんどのクラススケジュールは、エマが自分で決めていた。例えば、火曜日は歴史の日と決めて、午前中には読書などの活動をする。そして昼食後に、父親に図書館に連れて行ってもらい、歴史に関係のある本や、午前中に読んだ本に対するアンサーブック（解説書）などを探して読んだという。週に一度は、Co-op というホームスクールグループの仲間と共同で理科の勉強や、音楽や体育などの活動を行い、その後は Theatre troop という演劇グループでの交流を楽しんでいたそうである[21]。ホームスクールの欠点はないと答えたエマは、その利点を以下のように述べた。

> 最大の利点は時間。例えば、夜寝つけなかったときは、次の日に予定している課題を眠くなるまで取り組むことができるし、次の日の朝は寝ていられる。柔軟に使える時間のおかげで、コミュニティ活動にも多く参加することができる。さらに、自分の学習は自由なため、自分で責任を持って取り組める。ホームスクールを始める前は、アメリカの歴史だけを勉強していたけれど、さらに深く勉強したくなり、世界史の勉強を始めることができた。

エマは私立学校にいた 7 年間よりも、ホームスクールをしていた 3 年間の方が、Co-op や Theatre troop を通してより多くの友人ができたという。質問 10[親になったときに子どもをホームスクールで育てたいか、またその理由]に対しては、以下のように答えた。

> ひとつの選択肢として、ホームスクールを子どもに提示してあげたい。私はホームスクールをすることを望んだし、好きだからしたけれども、もし私がしたくなくなったら、両親はホームスクールをやめることにして、私を支えてくれたと思う。だから、両親がして

[20] このアンケート調査は筆者が卒業論文のために 2016 年に行ったものである。アンケートはメールで送付し、回収した。なお、名前はすべて仮名である。
[21] エマによると、Co-op も Theatre troop もホームスクーラーのためのグループであるが、Co-op は学年別に分かれて活動をするため、学校に近い形態であり、Theatre troop は学年に関係なく活動を行うグループであるという。

くれたように、自分の子どもにも自由と機会を与えたい。

質問 11[ホームスクールについて何でも教えてください]に対しては「ホームスクールは人生で最高の 3 年間だった。たくさんの友人に出会い、今でも彼ら彼女らと繋がっている。今の私があるのは、両親が自由を与えてくれたから」だと振り返った。エマの回答からは、新たな友人との出会い、そして自由な時間を与えてくれた両親への感謝が見られる。また、その自由な時間を計画的に遊びや学びに使っている様子が伺える。

回答者 2：オリビア(資料 2 参照)

オリビアはグレード 3 からグレード 4 の間は公立の小学校へ通っていたが、その期間以外はホームスクールで育った。オリビアには弟がおり、彼も同様にホームスクーラーである。ホームスクールを行うことは、母親が決めた。母親は、「自分の子どもたちは、同年代の子どもたちよりも既に多くのことを知っているため、学校で退屈な時間を過ごしてほしくない」と思い、ホームスクールを始めたという。しかし、学校に行く経験と、もっと社会的な交流をしてほしいという母親の希望により、彼女と弟は一度公立の小学校へ通った。引っ越しなどの事情により約 1 年で学校通学を終えたが、最終的には、母親が学校のシステムに疑問を感じてホームスクールを続けることに決めた。オリビアの近所の学校は、生徒の間での喧嘩や薬物使用といった問題を多く抱えており、このことがホームスクールを続けた理由のひとつとなっている。なお、オリビアの家族はキリスト教徒ではない。オリビアは、彼女の家族は特定の既存の信仰を持っていないだけであり、(日本をよく知るオリビアは：筆者加筆)一般的な日本人のように一神教徒ではなく、多様な信仰や世界観から影響を受けていると話していた。

母親は教育に関する特別な知識や経験を有していたわけではなかったが、ほとんど毎日、数学などの問題用紙を作成していた。オリビアが自発的にピアノの練習や読書をしたり、絵を描いたりしていたため、音楽やリーディング、美術の時間は特別に設定されなかった。また、彼女は 14 歳から日本に興味を持ち、日本語の勉強を始めた。ホームスクールの利点は以下のように述べた。

> ホームスクールは学校にいるという感じがしなくてとてもリラックスできる。だけど、遊んでいるわけではなくて、自分たちの学びたいことを多く学べる。だから、美術や音楽、日本語も学べた。それに、いつも一緒にいた弟とはとても仲が良い。

ホームスクールに関して心配は抱かなかったと述べたオリビアだが、ホームスクールの欠点を挙げた。それは、社会的な交流の欠如だ。彼女自身はガールスカウトや、公園での友人との交流を通して十分な社会的な交流の機会を持てたが、彼女の弟は上手く交流を持てていないという。質問 11[ホームスクールについて何でも教えてください]に対して、オリビアは以下のように答えた。

> ホームスクールは一部の人びとには良いことだと思う。それは、子どもの性格と、親がどれだけ熱心であるかによる。ホームスクールはとても良いアイディアだと思うし、もっと多くの人びとにホームスクールを考えてみてほしい。

また、質問 10[親になったときに子どもをホームスクールで育てたいか、またその理由]に対しては以下のように語った。

> もしも子どもを育てることになったら、ホームスクールをすると思う。小学校には行かせるけれど、中学校には行かせたくない。なぜなら、中学校はとても大変で、多くの中学生はいじわるだと聞いたから。子どもには、彼ら彼女ら自身が幸せになるための勉強をする自由と時間を与えたい。

エマと同様に、自由に時間が使えることや興味関心に沿って学べることは、オリビアにとっても利点であった。また、「学校にいるという感じがしなくてとてもリラックスできる」と述べていることから、学校で受けるストレスから解放されることも利点として挙げられる。ホームスクールで社会性を身につけることができるかどうかは、子どもの性格によると主張してはいるが、ホームスクールは良い教育形態であるとし、ホームスクールを肯定的に捉えていると判断できる。オリビアの回答で特徴的であるのは、学校に対する不信感を顕著に表している点だ。ただし、その不信感は自らの経験によるものというよりは、周囲の人びとから植えつけられたもののように思われる。

回答者 3：ソフィア(資料 3 参照)

ソフィアは生まれてから高校を卒業する年齢である 18 歳までの間、ホームスクールで育った。両親が厳格なキリスト教徒であり、宗教的理由からホームスクールを行っていた。主に母親が教科を教えていたが、それはファシリテーターとしてであったという。つまり、母親は教材を与えはするけれど、子どもたち自身が責任を持って進めていくように教育した。クラススケジュールは何を勉強したいかや、何が達成できるかを考慮しながら、日によって変えていたが、多くの時間は読書や学びたい教科の勉強に充てた。

ホームスクールの最大の利点は、自分のペースで自由に学べることだという。完璧主義者でプレッシャーに弱かったソフィアにとって、自分のペースで学べること、そしてそのペースを母親が見守ってくれていたことが良かったという。また、勉強に対するモチベーションを持ち続けることや、課題を達成する能力や自分のペースで対人関係を築く力は、学校では伸ばすことができない力だと振り返った。

ホームスクールの欠点として、ホームスクールをしているために間違った認識や判断を受ける可能性があることを挙げた。ホームスクールでは社会性が育たないという批判が蔓延しているが、社会性は個人の性格と密接に関わっているものであり、ソフィアにとっては従来の学校環境の方がプレッシャーやストレスを受けやすい環境であるという考えを示した。彼女は Co-op や教会で友人を作っていたそうだ。

質問 10[親になったときに子どもをホームスクールで育てたいか、またその理由]に対しては以下のように答えた。

> 絶対にホームスクールで子どもを育てたい。なぜなら、学校に通わせるよりも子どもの教育に従事できるのだから。また、子どもには、自由に自分たちのペースで学ばせてあげ

たいから。母親がそうだったように、良いファシリテーターになれるような気がする。もし子どもたちが私に似るのなら、彼らは従来の学校環境が合わないと思うし、学校にある様々なプレッシャーを与えたくない。

ソフィアがエマとオリビアと異なる点は、ホームスクールを宗教的理由で始めた点と、一度も学校教育を受けたことがない点だ。学校に対してはオリビアと同様に、否定的な感情を抱いている。また、母親のことをティーチャーではなく、ファシリテーターと表現していることから、教えてもらうのではなく、自ら学ぶ姿勢が身についていることが伺える。

3 人は兄弟姉妹がいるということと、いわゆる白人であること以外は、それぞれ違う特徴を持っている。しかしながら、彼女たちの話からはいくつかの共通点が見られた。

1 つめは、「自由な時間を持つことができ、興味のあることに時間を費やすことができた」という点だ。このことはホームスクールを行う利点としてしばしば挙げられるが、今回調査に協力してくれた 3 人のホームスクーラーにとっても大きな利点となっていた。また、親や兄弟姉妹と密接な関係を築くことができることも、ホームスクールを行う利点のひとつである。今回調査した彼女たちの回答からも、親への尊敬の念や感謝の言葉が見られ、親や兄弟姉妹との密接な関係が築けているといえる。ホームスクールの実施は親の意思によって決められることが多いと前述したが、ホームスクーラー自身とホームスクール実践者との間にホームスクールの利点に対する齟齬は見られず、ホームスクールに対する満足度の高さが伺えた。

2 つめは、「中間集団[22]に属して社会性を身に付けている」点だ。エマとソフィアは教会や Co-op、Theatre troop に、オリビアはガールスカウトといった中間集団に所属していた。オリビアとソフィアが言及していたように、ホームスクールで社会性が身に付けられるのかということは議論され続けている問題であるが、その習得は主に中間集団を通じてなされていることが明らかになった。アメリカではキリスト教徒が多いため、教会などの中間集団が多く存在している。これはアメリカのホームスクールの広まりを支えている基盤である。

3 つめは「反学校の精神を少なからず持っている」点だ。例えば、オリビアは中学校や中学生に対する、偏見とも思われる可能性があるほどの批判的意見を持っている。そしてそれは彼女の経験に基づくと言うよりも、他者(主に親)からの影響が大きい。佐々木(2009)の調査対象であった母親のマリアや、メイベリー他(1995)の調査対象者の親たちの話からも、公教育への批判や自らの経験に基づいた反学校の精神が目立っている。

これまで、アメリカのホームスクールはホームスクール運動が示すように「オルタナティヴな教育を求める人びと」と「キリスト教保守派」という二項対立の概念を用いて語られてきた。しかし、彼女たちの話から見えてきたことは、その 2 つの枠には収まりきらない多様性があるということだ。ソフィアは典型的なキリスト教保守派であり、宗教的理由でホームスクールを行っていた。エマはキリスト教徒であるが、そのことがホームスクールを始めた理由ではなく、

[22] 中間集団とは、伝統的には家族、町内会、地域コミュニティなどをさすが、最近では、ボランティア団体、NPO(非営利組織)、NGO(非政府組織)が新たに台頭している。(佐々木ほか 2002、p.ii)

学校生活を楽しめなかったことを理由に挙げた。また、オリビアは特別な宗教心は持っておらず、より良い教育の追求と母親の反学校精神、付近の学校の環境などがホームスクールを行う理由であった。アメリカのホームスクール経験者へのアンケート調査を通して、ホームスクールの実践にはさまざまな理由が絡み合っていることが明らかになった。

2.5　アメリカのホームスクールの社会的及び制度的特徴

以上の節のまとめとして、アメリカのホームスクールの特徴 5 点を以下に示す。

特徴 1　アメリカのホームスクールは法律で認められた教育形態である(制度的保障)。

特徴 2　アメリカには宗教教育を目的にホームスクールを選択している人びとが多くいる(宗教的理由)。

特徴 3　アメリカでオルタナティヴな教育を求める背景には、アメリカの公教育に格差などのさまざまな問題がある(公教育の問題)。

特徴 4　アメリカには、ホームスクールの発展を支える全国的組織、地域ごとの教会、そしてホームスクールグループなどのさまざまな中間集団がある(全国的組織や中間集団の存在)。

特徴 5　多くのホームスクールが親の意思によって選択されている(親の意思の重要性)。

このように、アメリカのホームスクールは、独自の歴史的・社会的背景から生まれて、今日まで発展し、制度的特徴を持つに至った。したがって、その様な歴史的、社会的、制度的な背景や特徴を十分に考慮せずに、日本とアメリカのホームスクールの現状や課題を単純に比較検討することは、妥当性に欠ける結論につながるおそれがあるのである。これまでの先行研究では、不登校児童生徒の問題を抱えている日本に、教育は家庭でも可能であるという、アメリカのホームスクールの知見をそのまま適用しようとする姿勢が、意図せずとも見られた。しかしそれらの議論には、アメリカのホームスクールが上記のような特徴を持っているという前提の理解が抜け落ちていたように思われる。本論文では、アメリカのホームスクールの背景や特徴を踏まえた上での比較の視点から、日本のホームスクールの現状と課題を明らかにする。

3.　日本のホームスクール

3.1　日本のホームスクールの動き

日本のメディアで、ホームスクールという用語が使われ始めたのは 1995 年以降である[23]。それ以前も「ホームスクール」という用語が使われることはあったが、学校に通わず主に家庭で学ぶという現在の意味合いを持って使われるようになったのは、1995 年以降である[24]。不登校児童生徒数が激増していた当時の日本では、関心を寄せた多くの親にとって主に「家庭」で学ぶというアメリカのホームスクールが魅力的に映ったと思われる。当時、ホームスクール実践者は増えていくだろうと予想されていたが、実際どれほどのホームスクーラーがいたのか、また現在でもどのくらいの該当者がいるのかを明らかにした正式な統計は存在しない[25]。その理由としては、不登校児童生徒とホームスクーラーは外からみたら見分けがつかないうえに、ホームスクールを実践していることを公表しない家庭や、ホームスクールを実践しているにもかかわらず、そうとは自覚していない家庭も存在するためだ。「ホームスクール」という用語の認知度もいまだに低く、学校教員でさえ聞いたことがなかったり、不登校との違いがわかっていなかったりするケースは多い。

しかしながら、近年インターネット上では、ホームスクール関連団体の動きに変化が見えてきた。日本ホームスクール支援協会(Homeschool Support Association of Japan 以下、HoSA)は、2017 年にホームスクール実践者が理事に加わり、ホームスクールに関する情報提供などの活動を積極的に行っている。2018 年の春にはホームスクール実践者により、ホームスクーラーやホームスクール関連団体がどこにいるのか分かる「ホームスクーラーマップ」が作成され、すでに 110 人のホームスクーラーが登録している(2018 年 12 月 23 日時点)[26]。Facebook やブログを通じての交流も盛んになっており、ホームスクール実践者・ホームスクーラー同士の交流会の開催も増えてきている。また NHK E テレで放送された「ウワサの保護者会　シリーズ不登校～学校に行かない学び方～(2018 年 1 月 27 日放送)」では、学校以外の学び場のひとつとして、家庭を中心に学ぶホームエデュケーションが紹介されている。このように、メディアにも取り上げられるようになってきており、ホームスクールは確実に広がりを見せている。現在日本にはホームスクールに関する法律はないが、「普通教育機会確保法」が 2016 年に成立したこ

---

[23] 朝日新聞データベースを参考にしている。ただし、ホームシューレの設立は 1985 年であり、1995 年以前にもホームスクールを実践している人びとはいた。

[24] 朝日新聞データベースによると、1986 年 12 月 7 日の朝刊で初めてホームスクールという用語が紙面に表れたが、これは塾の名前に使われたものであった。その後もフリースクールの名前に用いられるなどして、何度かホームスクールという言葉が見られた。1996 年 4 月 22 日の朝刊「不登校児の教育の機会を広げよう　木村恵子（論壇）」でアメリカのホームスクールについて書かれており、朝日新聞では初めて現在の意味合いと同じ「ホームスクール」が紙面に登場した。

[25]奥地圭子氏の推定では 2000 年のホームスクーラーの数は 2～3 千人であり、それは多く見積もっても、全国の不登校者数の 2.3%であった。（吉井 2000、p.59）

[26]ホームスクーラーマップ
https://www.google.com/maps/d/viewer?ll=38.36304542091159%2C139.28946612363666&z=6&mid=1ZHzTXcXchUKOlGvRKp2XNtOguY-CtnM9

とにより、学校外の教育の重要性は高まりを見せ、ホームスクールは日本においても無視できない教育形態になってきている。

3.2　質問紙調査の概要と結果

3.2-1　質問紙調査の概要

日本のホームスクールの全体像の把握を目的に質問紙調査を実施した。以下、質問紙調査について述べる。質問紙調査は 2018 年 2 月から 3 月末日まで、Google Form を通じて行った。その後も、いわゆる雪だるま式サンプリングによって得られたホームスクール実践者を対象に随時質問紙調査を実施した。ホームシューレ、九州ホームスクーリングメーリングリスト、ホームスクールジャパンなどの団体や、ホームスクールに関連する個人ブログ・サイトなどを通じてホームスクール実践者から回答を得た。回収した回答数は 42 家庭であった。地域別の内訳は、北海道 2、関東地域 23、中部地域 3、近畿地域 5、中国地域 1、九州地域 7、海外在住者 1 である。日本におけるホームスクール実践者の全数が不明ではあるが、回答者数が 42 家庭では、十分なサンプル数が得られたとは言えず、日本のホームスクールの一般論を述べることは難しい。また、回答者は、質問紙に回答する意思を持ち実行したということから、比較的ホームスクールの実践に関心が強いであろうと想定できることも念頭に置く必要がある。アンケートでは、子どもの学年やホームスクールを開始した時期といった基本的な事項や、ホームスクールの選択理由、学校との関係、ホームスクール団体への所属について、ホームスクールをしていて良かったこと、悩んでいること、大切にしていることなどを中心に質問した。質問一覧・回答方法と調査結果はそれぞれ表 3 と資料 4 に示したとおりである。なお、問 4[ホームスクール選択理由]の選択肢は西川(2003)を参考に設定している[27]。

3.2-2　質問紙調査の結果

問 1 [子どもは何人いて、そのうち何人ホームスクールをしているか]の回答では、ひとりっ子の子どもが最も多く 16 家庭(38%[28])であった。子どもが 2 人以上いる家庭は 26 家庭で、そのうち 12 家庭が全員の子どもをホームスクールで育てていた(子どもが 2 人以上の家庭の 46%)。問 2[ホームスクーラーの学年]としては、小学生が最も多く 38 人(60%)、次いで中学生が 16 人(25%)、9 人(14%)が義務教育期間外(就学前と高校生以上)であった。問 3 の[ホームスクールを開始した年]の回答では、2015 年以降から開始している人が多く 27 家庭(64%)にのぼった。

西川(2003)の調査結果でも同様であったが、問 4[ホームスクール選択理由]で最も多かった

[27] 西川 (2003) は、[ホームスクール選択理由]に、公教育に対する不満、両親の信条、子どもの不登校、ホームスクーラーの成功例、その他の 5 つの選択肢を設定している。本調査ではそれらと同等の選択肢に加えて「英才教育のため」という選択肢を設けた。
[28] %で表記した数字はすべて有効回答数の割合である。

回答は「子どもが不登校になったため」であり、30 家庭が選択した 。次いで「学校教育に対する不満があったため」が多く、19 家庭が選択した[29]。この問には複数回答が可能であり、23 家庭が複数の選択肢を選んだ。また、自由回答欄を設けたところ、「子ども自身が選択した」と回答した家庭が 5 家庭あった。問 5[ホームスクールを知ったきっかけ]としては、22 人が「インターネット」、15 人が「知人・友人から聞いた」と回答した。

問 6-1[ホームスクールをしながらほかの学校に通っているか]に対しては 14 家庭(33%)が「はい」と回答した。問 6-2[通っているほかの学校]には、公立の学校、フリースクールやデモクラティックスクールなどが挙げられた。問 6-3[どのくらいの頻度でほかの学校に通っているか]は、毎日短い時間から、週に 1～数回、月に 1 回など様々であった。

問 7 -1[ホームスクールを始める前に、公教育以外の学校は検討したか]には、24 家庭(86%)が「はい」を選択している。問 7-2[どのような学校を検討したか]には、フリースクールやサドベリースクール、インターナショナルスクールなどのオルタナティヴスクールが挙げられた。問 7-3[ほかの学校を検討した上で、なぜホームスクールを選択したのか]には、「ホームスクールの方が子どもに合っていると判断したため」が最も多く 15 家庭、次いで「子どもが行きたがらなかったため」が多く 14 家庭が選択している。なお、20 家庭が複数の選択肢を選んだ。

問 8[子どもはホームスクールに満足している様子か]に対しては、39 家庭(93%)が「満足している」と考えていることがわかった。

問 9[学区内の学校はホームスクールを行うことを理解してくれているか]に対し「当てはまる」と回答したのは 24 家庭(60%)であり、問 10-1[学区内の学校はホームスクールを行うことに対して協力的か]に対し「当てはまる」と回答したのは 20 家庭(50%)であった。問 9 と問 10-1 の両方を「当てはまる」と回答したのは 18 家庭(45%)であった。10 家庭(25%)は、学校の理解度よりも協力度合いの方が低いと感じていた。問 10-2[学区内の学校によるサポート]としては、18 家庭が教材の提供、14 家庭が図書館などの学校の施設の利用を挙げた。「特に提供されているサポートはない、または知らない」と回答したのは、10 家庭であった。問 10-3[実際に利用している学区内の学校によるサポート]の回答からは、17 家庭(43%)は、学校からの何らかのサポートを利用していることがわかった。問 10-2 と問 10-3 の回答の問の関係を見てみると、サポートの提供をされているが利用していない家庭は 26 家庭中 9 家庭であった。

問 11-1[ホームスクールの団体に所属しているか]では、32 家庭(76%)がなんらかのホームスクール団体に所属していると回答した。問 11-2[どのホームスクール団体に所属しているか]には、ホームシューレ、アロマスプーン、九州ホームスクーリングネットワークなどが挙げられた。問 11-3[ホームスクール団体によるサポート]としては、28 家庭が「情報提供」26 家庭が「会員同士の交流の場の提供」を選択した。なお、問 11-4[ホームスクール団体に所属しない

[29] 西川（2003）の調査では、当時日本においてホームスクールを選択したきっかけとして、「子どもの不登校」に次いで「両親の信条」が多くなっている。この「信条」が何を意味するか記載はなかったが、文脈から宗教的理由であると推測できる。今回の調査ではホームスクールをしている宗教団体の協力が得られなかったため、宗教的理由を選択した者がいなかったが、宗教的理由でホームスクールを実践する者は存在する。

理由]としては「団体の必要性を感じない」が最も多く 10 家庭中 7 家庭が選択した。

問 12[ホームスクール実践者の最終学歴]によると、20 人(48%)が大卒、11 人(26%)が短大・専門学校卒、5 人(12%)が高卒、4 人(9%)が大学院卒、2 人(5%)が中卒であった。

問 13[ホームスクールをしていて良かったこと]に対しては、「学びに対して能動的・主体的になった」という回答が 12 で最多であった。次に「それぞれの子どもにあったペースで成長できる」と「時間の自由」に関するものが 10 ずつ、「子どもが心身ともに安心して健康に過ごせる」と「子どもの成長をそばで見守れる」が 6 ずつ、そして「子どもが元気になった」「子どもの個性を伸ばせる」「世間体を気にせず、子ども自身を見つめられるようになった」「平日の空いている時間に施設が利用できる」がそれぞれ 3〜4 ずつ挙がっている。

問 14[ホームスクールを行う上で悩んでいることや困っていること]に対しては、近所に同年代で平日昼間に遊べる仲間がいないといった「友人関係」が最多で 14、「自分の時間が持てない/仕事ができない」「周囲の無理解」が 7 ずつ、「費用がかかる」が 5、「将来への不安」が 4 挙がった。

問 15[ホームスクールを行う上で大事にしていることや心がけていること]に対しては、記述の方法はさまざまであるが[30]共通して「子どもの意思を尊重する」に通じる答えが 28 と最も多かった。「周囲や子どもとのコミュニケーションを大切にする」が 6、「子どもにとってよい環境を作る」が 4、「人と比べない」と「楽しく毎日を過ごす」が 3 ずつであった。

3.3　質問紙調査の結果と考察

3.3-1　ホームスクールの定義について再考

既に二度にわたり記したが本論文では、「ホームスクールとは、親や地域の大人が、家庭や地域を拠点に、学校教育を含む様々な教育資源を活用して、子どもの自己選択を尊重しながら、子どもの教育に積極的にかかわる」という吉井(2000、p.55)の定義を採用している。今回の質問紙調査の結果は、この定義の妥当性を裏付けていた。

まず問 6-1[ホームスクールをしながらほかの学校に通っているか]と問 10-3[実際に利用している学区内の学校によるサポート]の回答が、定義の最初の部分である「親や地域の大人が、家庭や地域を拠点に、学校教育を含む様々な教育資源を活用して」という具体例を示す結果となっている。問 6-1 では、ホームスクールだけでなく、公立学校やフリースクールなどのオルタナティヴスクールを活用している家庭が 33%いることがわかった。家庭を拠点にしていることはもちろんであるが、地域のさまざまな教育資源を活用している家庭が一定数いるということである。また、問 10-3 より、43%の家庭が学区内の学校からの何らかのサポートを利用していることが明らかになっている。ホームスクールの性質上、親の関わりはもちろんであるが、地域の教育資源を利用することによって、自然に地域の大人が関わってくることになる。

[30] 口出ししない、子どもと対等な立場でいる、子どもの自主性を尊重するなどの表記があった。

なお、2002 年発行の HoSA ニュースには「ホームスクールを選択しても学校の施設を利用したり、授業に参加したりすることは可能であるが、実際はホームスクーラーが学校を利用するケースはほとんどない(西川 2003、p.61))」と述べられていた。しかし、問 10-3[実際に利用している学区内の学校によるサポート]の結果より、2002 年の時点からホームスクーラーと学校の関係は変化していることがわかる。また、問 10-1[学区内の学校はホームスクールを行うことに対して協力的か]と問 10-3 の回答の間の関係を見てみると、学校がホームスクールの実践に協力的であり、学校からの何らかのサポートを利用している家庭の割合は 45%であった。つまり、学校からの何らかのサポートを利用するかどうかは、学校の協力姿勢の程度に関係があまりないといえる。

次に定義の中程の「子どもの自己選択を尊重しながら」という部分であるが、これは問 15[ホームスクールを行う上で大事にしていることや心がけていること]の結果と一致している。この問に対して、ほとんどのホームスクール実践者は「子どもの意思を尊重する」ことを挙げている。また、問 1[子どもは何人いて、そのうち何人ホームスクールをしているか]の結果より、子どもが 2 人以上いる場合であっても、全員をホームスクールしている家庭はその半数以下であることから、親の教育方針でホームスクールをしているというよりも、それぞれの子どもの特性に合わせた教育としてホームスクールを選択しているといえる。このことからも、親の意思よりも子どもの意思を尊重しているといえる。

定義の最後の部分である「子どもの教育に積極的にかかわる」に関しては、問 8[子どもはホームスクールに満足している様子か]と問 13[ホームスクールをしていて良かったこと]、問 15[ホームスクールを行う上で大事にしていることや心がけていること]の回答がこの定義部分の妥当性を示している。問 8 では 93%のホームスクール実践者が、子どもはホームスクールに満足していると考え、問 13 ではホームスクールをしていて良かったこととして主に子どもの良い変化を挙げた。問 15 は、「子どもの意思を尊重する」、「子どもとのコミュニケーションを大切にする」、「子どもにとってよい環境を作る」など、子どもを思いやった回答がほとんどであった。これらの回答は、ホームスクール実践者が、日々の生活で子どもをよく観察し、子どもの教育に真摯に向き合っていることの反映である。

吉井(2000)が事例として取り上げたのはホームスクール 1 家庭のみであり、定義の信頼性に欠けると思われたが、本調査の結果では、吉井の定義の妥当性が認められた。

3.3-2　不登校とホームスクール

今回の調査で得られたホームスクールの特徴として、日本において親がホームスクールを選択するきっかけは子どもの不登校が多いということが分かった。西川(2003)の調査に引き続き、今回の調査でも問 4[ホームスクール選択理由]より、同様の結果が得られたのである。文部科学省が公表した 2017 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、小・中学校の不登校児童生徒数は 14 万 4031 人に上っており過去最多となった。上

述したように、ホームスクーラー人口の統計は取れていないが、ホームスクール選択理由として子どもの不登校がきっかけという回答が多いのは、不登校児童生徒数が増加している日本ならではの結果といえるだろう。ちなみに、日本のホームスクールを牽引してきた東京シューレ[31]が、2006 年に出版している本のタイトルが「子どもは家庭でじゅうぶん育つ　不登校、ホームエデュケーションと出会う」ということからも、日本においてはホームスクールと不登校の結びつきが強いことが伺える。

なお、全児童生徒数のうち不登校児童生徒数の割合は、小学生は 3 万 5032 人(0.54%)、中学生は 10 万 8999 人(3.25%)であり、約 75%を中学生が占めている。この結果から単純に考えると、中学生ホームスクーラーの方が多いのではないかと予想される。しかしながら、本調査では小学生のホームスクーラーが 60%を占めており、さらに問 2[ホームスクーラーの学年]と問 3 の[ホームスクールを開始した年]の関連性を見てみると、現在中学生以上のホームスクーラーの 80%以上が小学生の頃にホームスクールを始めていることがわかる[32]。つまり、ホームスクールを始める年齢としては小学生以下が多いといえる。その理由としては、年齢が上がるにつれて学校信仰からの脱却が難しくなることや、一般的に中学校に上がると進路や将来のことを考える時期にさしかかるために、それらをサポートする学習塾などが優先的に検討されることなどが考えられる[33]。

3.3-3　学校教育への視点

西川(2003)の調査によると、ホームスクールの選択理由として「学校教育に対する不満があったため」は関西で 21%、関東で 14%であった。本調査でこの選択肢を選んだ人は、「子どもが不登校になったため」に続いて多い結果で、19 家庭（回答者数の 45%）が選択しており、西川の調査時より増加している[34]。どのような不満であるかは本調査では具体的に尋ねていないが、問 13[ホームスクールをしていて良かったこと]への回答からは、ホームスクールでは得られ、学校では得られなかったものが見えてくる。最も多かったのは「学びに対して能動的・主体的になった」という回答であった。裏を返せば、学校にいたときは、子どもたちの学びに対する能動性や主体性が失われていたことを意味する。つまり、イリッチの指摘する教育の「学校化」に対する不満である、と捉えることができる。

---

[31]東京シューレは、不登校を経験している子どもを中心に、子ども・若者の学びや成長を「フリースクール」「新しいタイプの私立中学校」「ホームエデュケーション」「親・保護者への活動」といった多様な事業を通して、総合的に支援している NPO 法人である。
[32] ただし、問 3 は複数子どもがいる場合は、最初にホームスクールを始めた子どもについて聞いているため、おおよその結果である。
[33] 例として、野村（2014）は、『カナリアたちの警鐘』の中で、中学 2 年生で不登校になった娘との日々を振り返っている。「進路を決める時期」が差し迫りなんとか高校進学をさせてあげようともがく姿や、親自身が「高校くらい出なければ世の中通用しない」といった世間体やしがらみに縛られてしまう姿が描かれている。
[34] ただし、西川（2003）の調査にはサンプル数が記載されていないため、単純比較はできない。

3.4　インタビュー調査の概要

質問紙調査の結果からは見えてこない、実際のホームスクールの実践の詳細な現状と個々の具体的な課題の把握を目的に、インタビュー調査を実施したので以下に説明する。インタビュー調査は 2018 年 7 月から 9 月の間に実施した。質問紙調査協力者、また雪だるま式サンプリングで協力者を募った。インタビューは直接対面で行ったものもあれば、LINE や skype、Facebook などのインターネット通話・ビデオ通話・メッセージ機能を用いて実施したものもある。インタビュー回答者数は 26 名であった。回答者の居住地は、北は北海道、南は沖縄県であり、さらには韓国でホームスクールをしている日本人も含む。インタビュー時間は短い場合で 30 分、長い場合で 3～5 時間であった。主に質問紙調査票をもとにした半構造化インタビューで、どのような経緯でホームスクールを選択するに至ったのか、学校とのやり取り、日々の過ごし方や、ホームスクールに変えてからの心身の変化などを中心に質問した。調査と対象家庭に関する概要は表 4 に示すとおりである。また、ホームスクーラーと実践者たちが集まる「ホームスクーラーお出かけ会」に 2 回(2018 年 8 月 23 日と 10 月 4 日)参加し、そのときの会話も参考にした。

3.5　インタビュー調査の結果と考察

3.5－1　ホームスクールを始めた理由とその経緯

ホームスクールをはじめた経緯から、そのきっかけは大きく分けて 3 つのケースがあることが分かった。ケース 1 は「子どもが不登校になった」、ケース 2 は「親が多様な教育に興味関心が強かった」、そしてケース 3 は「子ども自身が選択した」である。

ケース 1「子どもが不登校になった」は質問紙調査の問 4[ホームスクール選択理由]からも明らかになっている。インタビュー調査によって、不登校の理由は主に、一斉授業や集団行動が合わないといった学校のカリキュラムと子どもの個性の不一致・人間関係での悩み・いじめなどから心身に不調が出たことであるとわかった。きっかけとして不登校を挙げた人は 26 名中 20 名にのぼった。

> A さん：幼稚園に行っている時から学校が合わないなって分かってはいたけど、楽しいかもしれないし友達もできるかもって思って小学校に入れたのね…一週間二週間くらいしたら夜泣きを始めて、性格もぴりぴりし出して、食欲もなくなった。

> T さん：入学して半年位したら、行きたくないって言い始めたの。いじめに遭っていて、先生の対応も不十分で、すっかり学校不信になっちゃった。それと、もとから教科学習が得意だったから、知っていることばかりの一斉授業に飽き飽きしていたの。…毎日歯ぎしりをするようになって、仲が良かったのに兄弟喧嘩もたくさんするようになった。

学校の環境とは関係なく、体調を崩したために通うことができなくなったというケースもある[35]。

[35] 文部科学省は、不登校の児童生徒を「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため年間 30 日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義しているため、H さんのようなケースは、本来は不登校には当てはまらない。

H さん：娘はホルモンバランスが崩れて、成長期だったので治療も受けられなくて、身体の調子が悪くなったから行けなくなってしまったの。

こうした身体症状が現れると、心理的な「行きたくない」が現実的に「行くことができない」に変わる。それを機に、それまでは無理やりにでも子どもを学校に連れて行っていた人も諦め始めたり、学校に通わせることに疑問を持ち始めたりする。

V さん:それまでは無理やり学校に連れて行っちゃえば、楽しんで帰って来ていたから、行っちゃえば大丈夫って思っていたけど、その日は腹痛を強く訴えて、どうしても行けなかった。

S さん:嫌な予感はずっとしていたので、行き渋りが始まったときはとうとう来たかな、という感じで…身体症状が出たときは、本当に辛かったんだなってこっちも思って、そこから不登校の勉強を始めました。

ケース２の「親が多様な教育に興味関心が強かった」は、質問紙調査の問 4[ホームスクール選択理由]で２番目に回答の多かった「学校教育に対する不満があったため」と関係がある。

C さん：大学を卒業するころに、日本の教育はおかしいという記事を読んだのにとても共感したのね…子どもが生まれたときに教育をどうしようって思ったんですよね。公立の学校以外のことを考えたいなって思って…まだ子どもが１歳にもならないのにホームスクールの資料を全部集めたの。

L さん：大学の授業を受けて、ホームスクーリング[36]のことは知っていたんですよね。…その先生は遊びと学びの境界線はないってことを教えてくださって、それにすごく衝撃を受けた感じです。

ケース１の「子どもが不登校になった」は、一見すると「消極的選択」モデルに当てはまると考えられる。しかしながら「選択肢がホームスクールしかなかった」と明言した人は３名であり、同じようなニュアンスの意見を入れても「消極的選択」モデルに当てはまる人は多くても６名しかいなかった。つまり、子どもの不登校がきっかけで始めた親の７割が、「消極的選択」モデルと「積極的選択」モデルが混在したタイプであり、選択の積極性の程度は単純ではなく、グラデーションがあることが確かめられた。

ケース２の「親が多様な教育に興味関心が強かった」と明言した人は４名であったが、子どもの不登校がきっかけで始めた親の７割以上が、ケース２の親と同様に不登校になった早い段階でホームスクールへと意識を切り替えていた。つまり、「積極的選択」モデルの意識へと近づく、または切り替えが行われたと考えられる。Y さんはその切り替えを比較的早い段階で行った者の一人である。

Y さん：子どもが不登校になったあと、すぐにイギリスのホームエデュケーションに関する本を見つけて読んで、もうこれでいいじゃん！ハッピーでいこう！と私はすぐに気持ちを切り替えたんです。

一方で、意識を切り替えるのに時間がかかった親もいる。学校に通うことを当たり前とする

[36] インタビュー内で「ホームスクーリング」「ホームエデュケーション」といった名称が用いられていた場合はそのまま表記する。

「既存の価値観」を手放せない、または手放せない人びとの意見に捕らわれてしまっていたと思われる。

> F さん：先生や学校からの、学校に来ないと大変なことになるよっていう圧力がすごくて、親として子どもは学校に行かせなきゃいけないんだっていう気持ちと、デモクラティックスクールやフリースクールについても知っていたから、行かせなくてもいいんじゃないかっていう気持ちで揺れ動いていた。…学校に行く必要はないって発信している人たちの言葉に触れて、そういう世界を知ってだんだんと気持ちが変わっていった。

> U さん：学校は行くものだと思っていたんだけど、子ども同士のギスギスした関係とかは気になっていて…学校を選択していない人の方がはるかに楽しそうで、豊かな人生を送っているって思ったの。そういった方に実際お会いして話して、完全にホームスクール側に心が傾いた。

親の意識の切り替えと、子どもの意識の切り替えは同時に起こるものではない。不登校になった子どもたちの中には学校での経験により、深い傷を受け、自分を認めることに相当の時間を要したという子もいる。

> B さん：不登校っていうのはすごく衝撃で、子どもにとっても親にとってもすごく衝撃で…そこを抜けるっていうのにしばらく時間もエネルギーもかかりました。…笑顔に繋がるまでも相当大変だった。…まずは健康の回復からだったので。

自身の気持ちの切り替えはすぐにできた Y さんだったが、子どもはそうではなかったという。

> Y さん：子どもは自己否定や、学校に行っていない罪悪感、劣等感が強かった。日本の不登校って、子どもをどん底に落とすの。どうしたって気持ちが落ちちゃう。そこから本人が、私は私でいいんだ、学校に行っていなくて、こういう学び方があっていいんだって思うまでには 3 年半くらいかかっていたな。

以上のように、ホームスクールへと意識を切り替えるまでの経緯は家庭によって異なる。ここで、ホームスクールへと「意識を切り替える」と表現したのは、インタビューに応じたすべての親が「ホームスクールを実践している」という明確な意識を持っている訳ではないためである。

> W さん：長年家で過ごしていたけど、ホームエデュケーションしているっていう意識はそんなになかったです。ただ、学校に行っていない子どもを認められるようになっていったんです。
> X さん：そうそう、私もその意識はしてなかった。大枠ではホームエデュケーションなんだけれども[37]。

東京シューレ代表の奥地は、ホームエデュケーションは「家庭」が、教育実践活動の軸を担っている概念であり、家庭を子どもの成長の場として位置づけて、肯定的にとらえていく教育の在り方であるとしている。一方、不登校は「登校」が軸にあり、学校復帰を願い、不登校の状態に対し否定的な感情を持っているとし、その意識の差がホームスクールと不登校の違いであると述べている(NPO 法人東京シューレ編 2006、p.24)。つまり、ホームスクールへと意識を

[37] W さんと X さんは同時にインタビューしているため、この引用部分は二人の会話によるものである。

切り替えることができず、不登校の状態を否定的に捉えている場合は、ホームスクールを実践しているとはいえない。上記のインタビューからもわかるように、学校に行っていない子どもの受容ができているか、さらに学校に通わせなくてはいけないという「既存の価値観」を捨て、消極的に「家でもいい」、または積極的に「家がいい」と思えているかどうかが、ホームスクールと不登校を分けるものとなっている。さらに、子ども自身が「学校に行っていない自分を受容」できていることも、ホームスクールの実践においては大事なことである。

ケース 3 は、質問紙調査の問 4[ホームスクール選択理由]でも 5 名が回答していた「子ども自身が選択した」である。「ホームスクールお出かけ会」(2018 年 10 月 4 日開催)に参加していた小学生の男の子も自ら学校をやめる選択をした。

> 学校は知っていることばっかりやる。お友達は好きだけど、学校はダメ。ホームスクールは公園に行ったり、本を読んだり、好きなことができる。勉強もだけど。学校でも勉強はできたけど、みんなが終わるのを待っていなきゃいけないんだ。

また Z さんの就学前の子どもは自分で幼稚園をやめると選択し、退園したという。親は子どもの声を聞いて、学校に通うことが当たり前という「既存の価値観」を疑い始める。

改めてまとめると、ホームスクールの選択のきっかけは大きく分けて 3 つのケースがある。ケース 1「子どもが不登校になった」、ケース 2「親が多様な教育に興味関心が強かった」、そしてケース 3「子ども自身が選択した」である。ケース 1 と 3 からわかるように、日本のホームスクールの特徴として、「子ども発」ホームスクールが多いことがいえよう。第 2 章でも見てきたように、アメリカでは親の信条や想いなどからホームスクールを始める「親発」のホームスクールが一般的であるが、日本では子どもが不登校になったり、子ども自身が学校に疑問を持ったりするなど、子ども自身の言動が発端となりホームスクールが検討される「子ども発」のケースが多い。さらに、ケース 2 のような親の興味関心からホームスクールを選択した家庭のほとんどが「もし子どもが学校に行きたいと言うのならば行かせる」という方針をとっているうえ、実際に行かせたことがあるという家庭もある。「親発」か「子ども発」かに関係なく、質問紙調査の問 15[ホームスクールを行う上で大事にしていることや心がけていること]で明らかになった共通意識「子どもの意思を尊重する」がここでも見られている。

3.5-2　学校との関わり方

ホームスクールを実践している子どもたちは、義務教育期間は地域の公立学校に「籍」を置いている。日本のホームスクーラーは、ほとんどの場合クラス変えのたびに親が担任教師や校長、教頭と話し合いホームスクールの実践を理解してもらう必要があるが(西川 2003、p. 60)、それは現在も変わっていない[38]。

[38] 2018 年 12 月 11 日、浜松市教育委員会に電話で確認済み。浜松市教育委員会にホームスクールを実施したいという連絡があった場合は、地域の学校長の判断に任せるという対応をとるそうだ。

文部科学省は、不登校児童生徒に対する基本的な在り方として「1.将来の社会的自立に向けた支援の視点 2.連携ネットワークによる支援 3.将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割 4.働きかけることや関わりを持つことの重要性 5.保護者の役割と家庭への支援 」を提示している。ここからわかるように、不登校は支援の対象と考えられている。不登校と同視される傾向にあるホームスクーラーは、不登校児童生徒と同じような扱いを受けやすい。しかしながら、ホームスクールへと意識を切り替えた親の中には「支援は不要」「そっとしておいてほしい」と考えている者もいる。そういった両者の意識の違いはときに軋轢を生む。

質問紙調査の問 9[学区内の学校はホームスクールを行うことを理解してくれているか]の結果によると、学校がホームスクールの実施への理解があるかは 60%が「当てはまる」を選択し、40%が「どちらでもない」または「当てはまらない」を選択した。問 10-1[学区内の学校はホームスクールを行うことに対して協力的か]の結果によると、学校がホームスクールの実施に対して協力的かどうかは、理解度を少し下回り、50%が「当てはまる」を選択し、50%が「どちらでもない」または「当てはまらない」を選択した。インタビュー調査では、学校とどのようなやり取りをしてホームスクールを実施しているのかを質問した。実際にインタビュー協力者の約半数が学校との対立を経験していた。特に学校への行き渋りや不登校の気配が見えたころから、学校との関わり方に苦戦したという声は多く聞かれた。

> D さん：障害のため体調を崩していた子どもは友だちに会いたくて、最初は学校に行こうと好きな授業だけ行っていた時もあったけど、そうすると「こうやって来られるんだからちゃんと来なさい」って言われたりして…本人はものすごくがんばって行っているのに、がんばりを認めてくれないので、心のシャッターが下りちゃった。何か対応をお願いしても、みんな一緒じゃなきゃダメって風潮で…健康に過ごすことのほうが大事なのに。それなら学校に適さない子は外に居場所を見つけたほうがいい。
>
> M さん：最初の先生は家まで迎えに来て圧力をかけてきました。当時まだ 1 年生だったので、甘えじゃないかっていう風に見られてしまって、お母さんも甘すぎますって言われたし。それがすごく苦しかったですね。
>
> L さん：学校は、子どもが怠けている、お母さんがちゃんとしていないから子どももそうなんだっていうような圧力をすごく受けます。…見た目にしんどいっていうのが表れている子だったらいいのかっていうのも、違うなって思うんですよね。

学校の先生や学校関係者にとって「ホームスクール」はまだ一般的ではなく、馴染みのある用語ではない[39]。「学校においで」という登校圧力をかけられることや、子どもは健康であるのに学校に来させないのは、親のエゴだという風に捉えられてしまうことは多く、簡単に理解を得られたケースは少ない。学校とのやり取りを進めていく中で徐々に理解を得たり、ホームスクールをしているとはあえて伝えずに、不登校として認識させておいたりする家庭もある。E さんもそのうちの一人である。

[39] 韓国でホームスクールをしている O さんは、子どもに日本の学校体験をさせようと教育委員会に電話をかけ「学校には行っておらず、ホームスクールをしている。」と伝えたところ、沈黙の後「自分が思ってもいないような、バットで殴られたような衝撃を受けた」と担当者に言われたという。

E さん：学校は協力的ではあるんだけれど、ホームスクールとかは知らない。認めてくれているのは子どもがフリースクールに行っているから、それを出席扱いにしてもらっているから。ちゃんと話せば認めてくれるかもしれないけど、言いづらくてまだ話していない。

学校とうまく関わっていると答えた家庭は、学校の立場を理解し、コミュニケーションを取ることが大切だと口を揃えて言っていた。つまり、学校は不登校児童生徒をサポートするべきであるという考えのもとに、先生たちが対応をしていることや、ホームスクールは日本ではまだ一般的ではないことを理解したうえで、家庭で教育をしたいという自分たちの想いを伝えるべきだと言う。

P さん：学校はホームスクールを許可する権限はないけど、それをこっちから求めてしまうと責任が学校にいってしまうので、先生の立場を考えてお話をすればうまくいく。

N さん：先生たちは学校教育現場にいる人なのでホームスクールという言葉の知識はなかなか持っていない。自分たちのしたいこと、してほしくないことをきちんと伝えれば、学校側が無理やり来させるようなことは想像しにくい。

また、学校に行っていないために虐待を疑われるケースもある。そのため、子どもが籍を置いている学校や市の教育委員会はもちろん、近隣の警察署やよく利用する公共施設の職員などにあらかじめ説明しておくことや、子どもたちが健康に過ごしているということを実際に見て知ってもらうことが必要である。

K さん：学校から理解を得るまでには時間はかかったけど、やりとりは続けていたので…学校側の対応は引き継がれていくものがあって、放置してくれるようになったというか。ときどき家庭訪問してもらって子どもが元気で過ごしていることを見てもらって、それで落ちついているみたいです。

文部科学省が学校に求める不登校児童生徒への対応を考慮すれば、学校側の対応にも納得がいく。ホームスクールの実践場所は主に家庭という外からは見えない場所であるため、虐待や育児放棄を疑われてしまう可能性がある。それゆえに学校とホームスクール実践者は、お互いの立場や考え方を理解するために話し合うことが、ホームスクールを円滑に開始し、実践するために必要不可欠となっている。

3.5-3　学校への感情

本調査のインタビュー協力者たちは学校を全否定しているわけではなく、「学校が合う子どももいるし、学校は必要である」ということは前提として受け入れている。しかし、質問紙調査の問 4[ホームスクール選択理由]としては「学校教育に対する不満があったため」が 2 番目に多い結果となった。インタビューを進める中で、それが具体的にどのような不満なのかが聞こえてきた。

N さん：学校は、先生の言うことを素直にきく子がいい子で、自分で正しいか正しくないか考えられなくなってしまうところ。みんな一緒が大事。…朝顔の観察なんかでも、なんでも評価されてしまうのは悪影響な気がします。

また実践者自身が学校経験を振り返る中でも、学校に対する否定感情が見いだされた。

> C さん：自分自身、真面目な子だった。大学も出たんだけれど、言われたことやマルバツ式のことしかできなくて、想像力が全然ないってことに気付いた。

> E さん：自分の子どものころとか思い出してみても、学校行って結局勉強嫌いになっちゃったなぁとか、自分のやりたいこととかわからなくなっちゃったなぁっていうのがあって。洗脳されちゃうんだよね。

これらのインタビューは、イリッチの指摘した教育の「学校化」を描き出している。「学校化」とは、「先生の言うことを素直にきく子」は学校で良い評価を得られ、子どもたちがその評価を得ようとすることで、自分たちの個性を失っていくことである。そして、「やりたいことがわからなく」なってしまい、先生の言うことをきく「真面目な子」は、いつの間にか「想像力」を失っていく。親たちは「学校化」によって子どもたちから奪われた、学びの自主性や個性、想像力の重要さを理解しているからこそ、ホームスクールの実践を選んだのである。

インタビューからは「隠れたカリキュラム」の影響が、さらなる学校の問題点として浮かび上がる。「隠れたカリキュラム」とは、学校教育において明示されていない、暗黙のうちに教授・学習されるカリキュラムである(刈谷ほか 2010、p. 294)。N さんが、子どもは学校で「なんでも評価されてしまう」と発言をしたように、子どもたちは学校で、テストや授業態度から成績をつけられる。成績が子どもたちに与える影響は両義的であるが、その評価を基準に自分や他者を判断し、自信を失ったりするようになる可能性もあるのである。つまり、子どもたちは無意識のうちに人を評価する物差しとして、成績を利用する傾向があるということだ。また、評価を良くするためだけに努力をしたとすると、結果的に「学校化」の思考に陥るのである。

韓国でホームスクールを実践している 0 さんは日本の小学校についてこう語っていた。

> 0 さん：学校では、社会性や集団行動も身につけられるかもしれない。でも、社会に出たら、年齢がみんな違うのは当たり前だよね。学校で学ぶ集団行動って、軍隊みたいだし。…学校で学ぶ子どもを日本の小学校に体験入学させたことがあって「楽しかった」って言っていた。だけどね、日本の学校はスケジュールがタイトすぎて、遊べない。子どもはくたくたになってしまった。

「学校に行かないと社会性が身につかない」と心配されるホームスクーラーは多いが、0 さんの指摘のように、社会に出たら年齢が違う人と交流することが当然となる。ホームスクール実践者たちは、同年代としか交流を持てない環境よりも、さまざまな年代の人と交流を持てるホームスクールの方が社会性を育むことができると考えている。また、このように「学校に行かないと〇〇を身につけられない」という考えが一般的になっていることは、学校に教育の独占的特権が与えられていることを示している。

質問紙調査の問 13[ホームスクールをしていて良かったこと]で「時間の自由」がホームスクールの利点として挙がったのは、「学校のタイトすぎるスケジュール」という背景があるだろう。また、学校の小刻みな時間割によって区切られている授業は、子どもの学びの意欲を分断するものであるという意見も多く聞かれた。

3.5-4　家庭での過ごし方

ホームスクーラーは学校に行かない時間をどのように使っているのか。それは子どもの年齢や性格、ホームスクールを始めたきっかけとも関わってくるものであるが、ゲームや動画視聴、ものづくりなどの創作活動、料理や家事の手伝いをしているという声が多く上がった。

> G さん：興味のむくままに過ごしています。最近は木を切ることにはまっていて、積み木を作ったり、やすりでやすったりしてね。前は鳥を追いかけたり、植物図鑑を手に持っていたり、そのときやりたいことをやっている感じ。

勉強に関しては、「学校でやるような教科勉強はあまりしていない/まったくしていない」と答えた人が多かった。筆者が参加したホームスクールお出かけ会(2018/8/23 開催)で出会った母親たちも同様なことを語っていた。

> ホームスクールしている、とは言えないの。だって勉強なんて全然していないからさ。どちらかというと、アンスクーリングしているって感じ。

「アンスクーリング」とは、子ども主体の学びに価値を置く教育の手法である。親は、子どもの興味関心に寄り添い、その学びの環境を整えるといった手助けをするというものだ(Brumund2018)[40]。実際に今回の調査では、アンスクーリングの考えのように、子どもの気持ちが向いたときに勉強を始めさせるというケースが多かった。

> Y さん：不登校がきっかけだったから、最初のころは学校への抵抗感があって教科学習はできなかったの。落ち着いてくると本人のやる気がでてきてやるようになったし、私としては生活する中で学んでいけばいいと思っているから。

不登校がきっかけでホームスクールを始めた場合、Y さんのように、学校の勉強を一時的に遠ざけて、学校で受けた精神的なダメージを回復する時間が必要となる。「学校に行かないのだから、その分家で勉強しなくてはならない」という考え方は、不登校になったことを否定的にしか捉えていないことになる。

興味の伴わない勉強に懐疑的な見方を持ち、アンスクーリングを行う家庭が多いのは、教育の「学校化」に対する批判的な思いがあるためだ。

> I さん：今は簿記をとりたいというので、期限までにとれるようにカリキュラムを組んで提示、本人が納得したら、それを毎日、としています。

I さんの家庭のように教科学習を含む勉強をしているホームスクーラーもいるが、その学びは親による強制ではなく子どもが望んでいるという面からみれば、今回のインタビュー協力者の多くがアンスクーリングであるといえる。

---

[40] アンスクーリングとは、ホルトが作った言葉であるといわれている。ホルトによって創刊され、1977 年から 2001 年まで出版されていたホームスクールのためのニュースレター“ Growing Without Schooling”には、ホルトのアンスクーリングの哲学が記述されていた。(Farenga ほか編 2016)

3.5-5　将来への思い

本調査への協力者の多くがアンスクーリングの考えを持っていることがわかったが、子どもの将来についてはどのように考えているのだろうか。アンスクーリングは子どもの自発的な興味関心から学びが始まるということを考えると、勉強をしないまま大人になってしまうことなど、周囲は不安を抱くと思われる。

> A さん：学校は行きたくなったら行けばいい。それがみんなと同じ年じゃなくても行けばいいし。好きなことをとことん突き詰めてやって欲しい…今の子どもの状態がのびのびしていて穏やかでいいから、それを見て安心しているし、やりたいことに進んでいって、なにかものをつくったり、すごい集中力を見せたりっていうのを見ているから、学習のことになってもやるんだろうなって。大きくなって結果見てみなきゃわからないけど、通過点でいる今はそんなふうに感じているかな。楽しんで知りたい気持ちが芽生えて、楽しんで学んで欲しいなって。

A さんのように、子どもがまだ教科学習を始めていない家庭でも「何かに集中する力を家庭で見ているからこそ、学習になっても力を発揮するだろう」と考えている家庭は多い。また、将来に対しては「学校に行きたいのなら行けばいいし、社会に出たいのなら出ればいい」と、あくまで選択権は子どもにあるという姿勢が見られた。Q さんも同様の姿勢であった。

> Q さん：将来は、食べていければそれでいい。大学に行けば元のルートに戻れるよねっていうのは、結局同じルートの枠から出ていない。その考えは親である自分のためでしかない。そこに行く良さを知ってもらいつつ、全然違うルートがあると教えたい。本人が向いている道に行ってほしい。それが何かを知る機会を与えたい。

山田（2000）によると、多くの不登校を経験した家族が有する「物語[41]」は、①子どもの受苦②家族の苦悩③子どもが理解/受容できない④落ち着く子ども⑤価値観の変化/子どもの受容へ⑥子ども受容を実践する/落ち着く家族⑦動き出す―回復し、自立への道を歩き出す、という７つの共通パターンに類型化できる(山田 2000、pp.49－51)。また、不登校の変化は概して「子どもの受苦・家族の苦悩→価値観の変化/子どもの受容→子どもや家族の回復」という物語の筋が見出される。そして、「⑦動き出す―回復し、自立への道を歩き出す」の特徴は以下のように書かれている。

> フリースクールに行く、元の学校に戻る・転校する、進学や資格を取得するために別の学校に通う、アルバイトを始める・就職するなど、家の外に所属する場所を見つけることが、家族にとって、子どもの自立を示す出来事として捉えられている点(山田 2000、p.50)

不登校経験をしたホームスクールの家庭も、山田(2000)の示した物語と同様の物語が見られている。しかし、ホームスクールの特徴は、家庭を拠点に学ぶことが「⑦動き出す」と同等であるといえ、家の外の集団への所属は必須ではない。家の外への所属を求めることは「既存の価値観」を未だに持っていることとなる。ホームスクール実践者たちからは、Q さんのように親としての願いは子どもの願いとは別物と考え、子どもにとっての幸せを追求して考える姿勢

[41] 山田（2000）は「物語」という概念を使い、不登校経験をした家族による感情的な語りの集積を類型化して説明している。

が伺えた。

ホームスクールの場合は、上記の物語に加えて、「⑧家庭を拠点とした教育の選択」が加わっている。また、選択の積極性にグラデーションがみられたことから「②家族の苦悩」がそれほどなく、「①子どもの受苦」の後に「⑤価値観の変化/子どもの受容」がすぐに来ているパターンが多いのも特徴である。

3.5-6　ホームスクールを始めてからの変化

質問紙調査の問 13[ホームスクールをしていて良かったこと]では子どもが身体的に元気を取り戻したり、精神的に安定したりという心身の変化についての記述が多く見られた。心身の健康を取り戻したことによって、子どもが学びに対して前向きになったことや、個性を伸ばせるようになった、といった回答も目立った。インタビュー調査においては、このような子どもの変化だけでなく、実践者自身の変化も多く語られた。最も多かったのが「怒らなくなった」というものだった。

> S さん：もう寝る時間でしょ、いつまで寝ているの、早く起きなさい、毎日そんな感じで、今思えば、なんて荒んだ生活をしていたんだろうって思うんですけどね。怒らなくていいところで怒ったりだとか、余計なエネルギーを使って生活していたんですよね。

子どもが学校に行くことを当然とみなす「既存の価値観」を持っているときは、子どもは学校の時間に合わせて生活しなくてはならない。そして親は、学校に合わせて子どもの起床時間、帰宅時間や就寝時間などを気にかける必要がある。

> S さん：学校にいるときは学校がすべてだし、先生の言うことが一番大事って言い続けてたんですよ。出された課題はちゃんとしなきゃとか…でも自分の中に疑問はあったんですよね。でもそこから外れられないっていうか。…不登校になることで自分が考える時間ができて、頭を整理できたことはすごくよかったなって思っています。

自由な時間を持つことができることは、ホームスクールの利点としてしばしば挙げられる。この自由な時間とは、子どもにとってはもちろんのこと、親にとっての利点でもある。学校の生活時間を気にかけない自由な時間を過ごす中で、「既存の価値観」を考え直す機会を得ることができるのである。

> B さん：子どものことをきっかけに、良い学校に行って、良い仕事を見つけてっていうのをもう一度自分の価値観を棚卸して、洗いなおして、優先順位をはっきりさせたうえでまた再スタートした。

学校信仰を持っている間には気づけなかった、学校に行かないことを認める「新しい価値観」を見出す。そして、さらに「新しい価値観」を選択する(下線部筆者強調)。特に「消極的選択」モデルには、このような「学校信仰からの解放」を経験している者が多く見られた。

吉井(2000)はホームスクールを「自己を起点とした生き方の追及(吉井 2000、p.70)」であると述べているが、これはホームスクーラー自身だけでなく、実践者の親にとっても当てはまる。

日本におけるホームスクールは家庭を拠点にした教育形態のひとつであり、生き方のひとつでもあるのだ。V さんはホームスクールの日々を振り返って、その選択の意義を見出している。そしてそれは、子どもが学校に通い続けていたら得られなかったものだったと語る。

> V さん：ホームエデュケーションは最後の手段だった。…学校に行っていたら、子どもが何が好きかも分からなかったし、本当の性格も閉じ込めたままだったかもしれない。…ホームスクールにして良かったって思えるまでは時間がかかったけど。友だちと仲良く、わいわい笑っているのを聞いたときは、泣きそうなくらい嬉しかった。

3.5-7　ホームスクールの多様性

最後に、ホームスクールの多様性について論じる。ホームスクールは家庭を拠点とした教育であるが、家庭に籠りきっているわけではない。質問紙調査の問 6-1[ホームスクールをしながらほかの学校に通っているか]と問 6-2[通っているほかの学校]からも明らかであったように、ホームスクール実践者たちは、フリースクールなどのオルタナティヴスクール、公立の学校や地域の図書館など家庭外の資源を活用しながら学びの環境を整えている。また、「子ども発」ホームスクールが多い日本のホームスクール実践者は、ホームスクールだけにこだわらず、子どもに合った教育を柔軟に選択している。

> L さん：うちは一番上の子だけホームスクールなんですけど、下の子たちは家に居ていいなとかは全く言ったことがないですね。学校行きたい子は行っている。それぞれお互いの自由を認めているんです。みんなそれぞれ好きなことをしているような感じです。

> R さん：(子ども 3 人のうち 1 人だけホームスクール：筆者加筆)親の意思でホームエデュケーションやっているから、学校に行かせないっていうよりも、子どもにとって最善なことをしていきたいっていうスタンスです。

ホームスクーラーは公立の学校の制度や環境に馴染むことができなかったケースが多い。しかしそれは、そのような子どもたちすべてにとって、ホームスクールが最適の教育方法ということを意味しているのではない。ホームスクールが適している子どもも、そうでない子どももいる。L さんや R さんのように、ホームスクールが合う子どもだけをホームスクールで育て、他の子どもたちは別の教育方法で育てている家庭もある。そして、ホームスクールを楽しめる親もいれば、そうでない親もいる。長年ホームスクールをしている K さんは下記のように語った。

> K さん：ホームスクールは不登校の救世主でも特効薬でもない。そんなものはない。その親と子どもにとって良いスタイルがあるはずだから、それを模索すればいいだけ。自分が選んだんだったら、何を決めてもいい。何を選んでも困難はどこにでもある。別に正しい答えはないだろうし、逆に世界は広がっていく。

また、教育関係の仕事に携わる J さんは広い視野でホームスクールを見ていた。

> J さん：ホームスクールは多様な教育の中のひとつの手法。子どもたちが学んでいくのに一番いい手法を選択できればいい。多様な教育があればいい。公教育が合う子は行けばいい。学校に行きたくなくてやめたり、何かきっかけがあって行きだしたり、やっぱりホームスクールにしたり。それを否定はしない、選択のひとつだから。そういう人たちが増

えれば増えるほど、子どもたちは生きやすくなるんじゃないのかな。ワクワクするんじゃないのかな。あくまで生きていくのは自分自身だから。

先にも述べた通り、ホームスクールは家庭の数だけ教育方針や実践スタイルがある。インタビュー調査協力者の中にはホームスクールを始めて数か月の家庭もあれば、10 年以上という家庭もある。既に自分たちらしいホームスクールを実践している家庭もあれば、それを模索中の家庭もある。日本におけるホームスクールは、現時点では法律で決められたスタイルがある訳ではない。型が決まっていない教育形態であるからこそ、多様であり、子どもたちの世界を広げていく可能性を持っているといえる。

また、本調査の調査協力者の中には、宗教的教育や英才教育を第一の目的としてホームスクールを実践している人はいなかったため、アンスクーリングの側面に焦点を当てることとなった。しかしながら、すべてのホームスクール実践者がアンスクーリングの考えを持っているわけではなく、ホームスクールを実践する家庭の数だけ、教育の目的も数多く存在すると言えるのである。

4.　日本のホームスクールの特徴

4.1　日米のホームスクールの比較

本節では、第2章5節で提示したアメリカのホームスクールの5つの特徴を日本と対比して比較する。

特徴1は、制度的保障についてである。アメリカのホームスクールは、法律で認められている教育形態であるため、アメリカはホームスクールを行う基盤が整っているといえる。それに対し、日本にはホームスクールに関する法律はない。文部科学省はホームページに「各国におけるフリースクール・ホームスクールと義務教育との関係」を表にまとめているが、「フリースクール、ホームスクーリングと教育義務・就学義務との関係」という項目の日本の欄には、ホームスクールに関する記載は一切ない(表5参照)。それだけでなく、「義務教育を学校以外で行うことは認められていない」という、ホームスクールを認めない旨が記載されている。しかし、日本の義務教育の義務とは子どもが学校に通う義務ではなく、おとなが子どもの学ぶ権利を保障する義務であるため、ホームスクールは憲法に違反していないという見解もある(NPO法人東京シューレ編 2006、p.50)。ホームスクール実践者はこの見解に沿って、ホームスクールを実践しているが、現状では法的な裏付けを欠いた環境のもとでの実施に留まっている。

特徴2の宗教的理由であるが、アメリカでは、宗教教育を目的に、特にキリスト教保守派の人びとがホームスクールを選択している。日本にも宗教的理由からホームスクールを実践している人は存在しているが、キリスト教徒の割合は日本の総人口の約1%しかいない[42]。日本のホームスクール人口のうち何割が宗教的理由から行っているかは定かではないが、日本におけるキリスト教徒の割合から考えても、多くはないと考えられる。今後は、本調査に協力してくれた実践者たちのインタビュー結果が示すように、日本のホームスクール実践者には、ホルトやイリッチと同様な思想を持つ人びとが増加すると考えられる。

特徴3は、公教育の問題についてである。アメリカでホームスクールなどのオルタナティヴな教育を求める背景には、公教育に格差などのさまざまな問題があることを示した。それらの問題は、多民族国家ゆえの人種差別問題や、校内暴力や薬物の使用問題、また営利企業が公教育に参入するといった市場化によってもたらされた公教育の格差拡大の問題などに基づいている。日本においても公教育への不満がホームスクール実践理由として多く見られたが、アメリカとは問題の内容が異なる。日本においては、「空気を読む」といった言葉に表されるような学校での人間関係の息苦しさや、教育の「学校化」による子どもの個性や主体性の喪失が主な問題の原因として考えられる。

特徴 4 は、全国的組織や集団の存在についてである。アメリカでは前述のような HSLDA や

[42] 2016年12月31日時点の日本のキリスト教信者の数は191万4196人であった。(文化庁による2017年度版の宗教統計調査 http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu/index.html　最終閲覧日2018年12月23日)

NHERI といった全国的組織が存在しており、州ごとの法律のもとでのホームスクールの実践に関することなど、ホームスクールの実践に関するサポートが行き渡っている。また、各地の教会やホームスクールグループなどが中間集団の役割を果たし、ホームスクール家庭同士を繋いでいる。日本には HSLDA や NHERI のような強力な全国的組織はまだないが、HoSA やホームシューレなどの全国的な NPO 団体が存在し、徐々に影響力を強めている。また、ホームスクーラーマップやホームスクールに関するブログ、メーリングリストなどを運営する個人も存在しており、ホームスクールは SNS を活用し、地域または全国において着実に広がりを見せている。

特徴 5 は、親の意思の重要性についてである。アメリカでは、宗教的理由や公教育への不満から、親がホームスクールを選択して実践している場合が多く、親の意思によって選択される傾向が強い。それに対して日本では、親の興味関心といった理由よりも、子どもの不登校がきっかけであったり、子ども自らが選択したりと「子ども発」のホームスクールが多いことが明らかになった。親の興味関心からホームスクールを始めた場合であっても、子どもが学校に行きたいと言えば学校に通わせるなど、親に子どもの意思を尊重する姿勢が強く見られる。繰り返しになるが、本論文では、日本のホームスクールの定義として吉井(2000、p.55)の「ホームスクールとは、親や地域の大人が、家庭や地域を拠点に、学校教育を含む様々な教育資源を活用して、子どもの自己選択を尊重しながら、子どもの教育に積極的にかかわる」を採用しているが、この定義はアメリカのホームスクールにも当てはまる。しかし、この定義についても、日本とアメリカのホームスクールの違いがあると思われる。つまり、「子ども発」が多い日本のホームスクール実践者の「子どもの自己選択を尊重」する度合いは、アメリカの実践者よりも強いということだ。ただし、このことは反面、日本のホームスクール実践者の主体性がアメリカに比べて弱いともいえる。

以上のように、アメリカと日本のホームスクール実施における社会的、制度的な特徴を比べてみると、このようにさまざまな違いがあることが分かった。

加えてもう一点、日本のホームスクールの特徴を述べる。アメリカでは、一般的に州で決められた義務教育期間の中でホームスクールを実施していることを述べた。しかし、日本においては、質問紙調査の問 2 で[ホームスクーラーの学年]を尋ねたところ、義務教育期間外(就学前と高校生以上)の子どもが 9 名いた。このことは、日本のホームスクールの 2 つの特徴と関わりがある。1 つめは、前述した特徴 1 であるが、日本にはホームスクールに関する法律はなく、実施に関する規則がないために、ホームスクールの期間が決まっていないということだ。そして 2 つめは、日本のホームスクールはアンスクーリングの考えを持つ実践者が多いということである。アンスクーリングでは子どもの興味関心が発端となり学びが始まるため、学校のように学年や年齢で学ぶものが決まっていない。子どもによって、その興味関心が起こる年齢や対象は異なる。さらに時間の自由があるホームスクールでは学校のような時間割は存在せず、学校のようにチャイムが鳴ることにより学びを止める必要はない。アンスクーリングの考えを持ったホームスクール実践者が多いために、義務教育期間という枠を越えて、日本にはさまざま

な年代のホームスクーラーが存在しているのである。

4.2　日本のホームスクールとフリースクール・オルタナティヴスクールの比較

本論文の研究課題 2 に、ホームスクール実践者は、なぜ「学校[43]」ではなくホームスクールを選択したのかを設定した。子どもが不登校になった後の選択肢は、公教育の学校以外にもフリースクールなどのオルタナティヴスクールが存在するが、なぜ「学校」ではなくホームスクールを選択したのかを解明したかったからである。

そのために、まずはホームスクールと「学校」の違いを理解する必要がある。ホームスクールと「学校」の根本的に異なるところは、詰まるところ「責任の所在」であるといえる。フリースクールなどのオルタナティヴスクールも、公教育では実現し難い、より個に焦点をあて、時間や学びが自由な教育を目指しており、その点はホームスクールと共通しているといえる。しかし、登校する「学校」という場所があり、また子どもを見守る親以外の監督者としての大人がそこに存在する。ホームスクールは「家」を拠点とし、基本的には、誰かに任せるのではなく親自身が子どもを見守る。ホームスクールの場合「責任の所在」は明らかに実践者である親にあるのだ。

ではなぜ、責任の重さが増大するホームスクールを選択したのか。質問紙調査の問 7-3[ほかの学校を検討した上で、なぜホームスクールを選択したのか]にはその理由として、「ホームスクールの方が子どもに合っていると判断したため」が回答として最も多く、次いで「子どもが行きたがらなかったため」が挙がった。この問には、「金銭的に厳しかったため」と「検討した学校が、通うには遠い場所にあったため」という、子どもの意思とは結びつきが弱い選択肢がある。この選択肢のどちらか、または両方のみを選択した者は 24 名中 3 名であった。21 名は子ども自身がホームスクールの方が良い、または親がそう判断したことになる。なお、この結果からは、3 名は「学校」が立地的にも金銭的にも利用しやすければ利用しており、ホームスクールの実践の姿勢が消極的であると想像できるが、3 名とも質問紙調査の問 8[子どもはホームスクールに満足している様子か]では、満足している様子であると回答しており、ホームスクールを肯定的に捉えている様子が伺える。そもそも、ホームスクールを続けるということは、ホームスクールに価値を見出し続けていなければできないことである。つまり、ホームスクール実践者は、ホームスクールの方が「学校」よりも価値があるという判断をし続けているのである。

その価値にあたるものは、質問紙調査の問 13[ホームスクールをしていて良かったこと]の回答から得られているように、「学びに対して能動的・主体的になった」ことや、「時間の自由がある」、「子どもが心身ともに安心して健康に過ごせる」、「子どもの成長をそばで見守れる」といったことである。

---

[43] この節でいう「学校」は、公教育の学校やホームスクールなどのオルタナティヴスクールを指す。

A さん：子どもに手をかけるわけじゃないんだけど、一人で過ごすっていうことがないね。自分のペースで完璧にはできない。でも、だからって、学校に預けることはできない。その価値はない。そこまでしてやりたいことはない。そこまでして自分の時間を作っても、楽しくないの。

言い換えると、A さんの語るように、「学校」には上述した価値を見いだせないために、ホームスクールを選択しているということだ。また、A さんのインタビューからわかるように、ホームスクールの実施は教育だけではなく、家庭生活に大きく関係する。すなわち、ホームスクールを選択するということは、教育方法の選択であると同時に、またはそれ以上に生き方の選択でもある。

日本においてフリースクールは、不登校児童生徒の受け入れをする民間施設という側面が強調される傾向にあり、吉井(1999)は他国のフリースクールとの比較の中で「日本版フリースクール」と呼んでいる。フリースクールに通っているホームスクーラーもいくらかいるが、中にはフリースクールに対して否定的な感情を見せるホームスクール実践者もいた。それは例えホームスクール実践者が「消極的」にホームスクールを選択したのであっても同様の反応が見られた。なぜなら、「消極的選択」として始めたホームスクールが、実践を通す中で「積極的選択」に徐々に変化していったためだ。「やりたくてホームスクールを始めたわけではない」と語り始めた U さんもその一人であった。

U さん：不登校を克服した人や不登校の集まりとかも行ってみたけど、全然克服していなくって…最後まで聞くことができなかった。うちの子は自分らしくいたいから、学校に行けないんだ(下線部筆者強調)って分かっていたから。

「不登校」という言葉は否定的なイメージを伴う。インタビューの中でもホームスクールをしていると「可哀想な子だと思われる」、「困っている人でいないといけないみたい」、「元気でいちゃいけないみたい」といった声が聞こえた。そういった言葉からは、「ホームスクーラーは(一般的なイメージの)不登校ではない」という想いがにじみ出ている。「不登校」を乗り越え、菊池(2009)の提示した「新しい価値観」を認めるだけではなく、選択したことの表れといえる。

ただし、フリースクールによってもそれぞれの理念は異なるため、一概にすべてが不登校児童生徒のための民間施設とはいえるわけではない[44]。また、ホームスクールの父であるホルトによれば、ホームスクールもフリースクールも基本的に同じであるという。

フリースクールも「家庭に拠点を置いた教育」も、既存の学校制度から脱け出て、子どもたちの自由を守っていこうという点では全く同じなのである。…比喩的に言えば、フリースクールは「自由の教育」(フリー・エデュケーション)の「核」であり、ホーム・スクーラーの家庭は「点」であるということになるだろう(大沼 1982、p. 152)

ホームスクール実践者のインタビューからも、現在の日本においてフリースクールは「日本

[44] 例えば、フリースクール地球小屋の 5 つの理念は①心の癒し、②仲間づくり、③喜びある学びと体験、④生き方の創造、⑤個の尊重と共生であり、ホームスクール実践者から語られるホームスクールの良いところと大きく違いはない。(吉井 1999、pp. 92-94)

版フリースクール」の意味合いを強く感じられるが、「既存の学校教育から脱け出て、子どもたちの自由を守っていこう」とする姿勢はホルトの示すフリースクールと同じである。しかし、日本社会ではまだ「日本版フリースクール」のイメージが強くあり、ホームスクール実践者自身はホームスクールとフリースクールを切り離して考えたいという傾向にあるのが現状だ。

4.3　研究仮説の検証

最後に、第 1 章で設定した研究課題 1～3 への考察を通し、研究仮説の検証を行う。ここで再度、前述の課題 1 から 3 について示す。

課題 1　学校に行かず、家庭で教育をすると決断するまでに、どのような経緯があったのか

課題 2　なぜ「学校」ではなくホームスクールを選択したのか

課題 3　ホームスクールならではの教育観はあるのか

インタビュー調査の考察で記述したように、ホームスクールを選択したきっかけは大きく分けて 3 つのケースがあった。１つめは「子どもが不登校になった」、2 つめは「親が多様な教育に興味関心が強かった」、そして 3 つめが「子ども自身が選択した」である。それぞれ仮説の図 1 においてスタート地点は、ケース 1 は第二象限グループ B または第三象限グループ C、ケース 2 が第一象限グループ A または第四象限グループ D、ケース 3 はホームスクール実践者の積極性はすべての象限に当てはまると考えられる(子どもの積極性は第一象限グループ A または第四象限グループ D)。

「ホームスクールしか選択肢が残されていなかった」故の選択として「消極的選択」モデル、「ホームスクールを実践したい」と考えた主体的選択を「積極的選択」モデルと設定したが、本調査では、第 3 章 5 節 1 項で示したとおり、「消極的選択」から「積極的選択」の間にグラデーションが見られている。子どもの不登校がきっかけとなりホームスクールを始めた人であっても、「ホームスクールが最後の選択肢だった」と明言した人は少数であり、「とりあえず家で様子を見よう」と始めた人や、前向きな表現で「ホームスクールでもいいじゃん」と「積極的選択」であった人もいる。また、「家で生活をしていたら、ホームスクールに分類されていた」というような無意識的に「積極的選択」に当てはまっていた人もいる。そして、ホームスクールの選択のきっかけが何であれ、手探りでホームスクールを実施しているうちに「積極的選択」モデルのように、ホームスクールを肯定的に捉えていく変化が見えた。それは、質問紙調査で、子どもはホームスクールに満足していると回答した親が 89%いたことや、インタビュー調査において、ホームスクールの選択を後悔した声が聞かれなかったことにも表れている。

なぜこのようにほとんどのホームスクール実践者がホームスクールを肯定的に捉えているのか、という問の答えの 1 つとして、実践者たちが「子どもの意思を尊重する」という想いを大切にしているからだと考えられる。ホームスクールを実践していく中で、子どもの良い変化や、のびのびと安心して生活している姿を目の当たりにすることで、家庭で教育をするという選択は間違いでないと実感するのであろう。

仮説では、ホームスクールの選択と姿勢における積極性の度合いにより、ホームスクール実践の意義も異なるとし、グループ A～D まで 4 つのケースを提示した。結論としては、図 3 に示したとおり、ホームスクール実践の姿勢における積極性は、実践を通して高まっていく傾向が強いことが明らかになった。そのため、第三象限グループ C から、第一象限グループ A や第二象限グループ B への移行が見られたこととなる。今回の調査では第四象限グループ D に当てはまる者はいなかったが、ホームスクールをやめることを検討している家庭の場合は、進んで調査に協力しようという気持ちにならないためだと考えられる。

ホームスクールを始めたきっかけとして子どもの不登校が多い現状から考えると、日本のホームスクールが休養の場や不登校の受け皿であるという側面を持っていることは確かであるが、ホームスクールを実践していく間にその側面は次第に薄れていく。多くのホームスクール実践者にとって、ホームスクールは「教育の選択肢のひとつ」そして、「生き方のひとつ」になってきているといえる。

5.　結論と考察

5.1　結論―日本のホームスクールの現状と課題

日本でホームスクールが行われるきっかけの多くは「子ども発」であり、アンスクーリングの考えを持つ家庭が多いことが分かった。家庭によっては学区の公立学校や、フリースクールなどのオルタナティヴスクールを利用するなど、その教育スタイルはさまざまである。ホームスクールを始めるきっかけが「消極的選択」モデルであれ「積極的選択」モデルであれ、実践を積み重ねる中でその姿勢は積極的なものへと変わっていく傾向にある。それゆえに、「消極的選択」からのスタートであっても、ホームスクールを肯定的に捉えている実践者が多く見受けられた。日本のホームスクールは、フリースクール同様、不登校の受け皿と捉えられることもあるが、実践者自身にとっては「教育の選択肢のひとつ」であった。それは、社会的にホームスクールが受け入れられて、法制度が整っているアメリカと同様の考え方である。また、日本のホームスクール実践者の多くは、イヴァン・イリッチの提唱した教育の「学校化」を危惧しており、そのことが実践を続ける理由になっている。それゆえに、学びへの自主性や個性を重んじ「子どもの意思を尊重する」ことを大切に考えている。つまり、多くのホームスクール実践者は、ホルトやイリッチのような志向を持っていることが明らかになった。

日本のホームスクールの課題としては、「ホームスクールの認知度の向上」と「情報共有の活性化」が挙げられる。質問紙調査の問 14[ホームスクールを行う上で悩んでいることや困っていること]の回答には、「周囲の無理解」や「将来への不安」がいくつか挙がっていた。学校とのやり取りにおいても、ホームスクールへの理解の無さから苦労したという話が聞かれた。このことからも認知度の向上にもつながる「情報共有の活性化」が重要であろう。既にホームスクール実践者たちの中には個人のブログやネットワークを立ち上げ、繋がりを生み出している者もいるが、今後更なる情報共有がホームスクールの発展にとっては有効であると思われる。

5.2　考察

ホームスクールはさまざまな学校の問題を解決する可能性のある教育形態の 1 つである反面、ホームスクールで教育される子どもたちや社会全体に対して負の影響をもたらす可能性も持ち合わせている。山野上(2016)とアップル(2008)の指摘を基に、発生するおそれのある影響について論じる。そして最後に、ホームスクールが社会に投げかけている問いについて述べる。

まずは、学校によるホームスクールの取り扱いについてである。2016 年 12 月に普通教育機会確保法が制定されたことにより、ホームスクールの実践は以前より認められやすくなったと考えられる。しかしながらこの法律に基づいて、学校側がホームスクールを勧めていいという訳ではない。たしかに、ホームスクール実践者にとって、学校は「一律にその場に留まることを強制することで、ありうべき多様な学びや子どもたちの多様なニーズへの想像力を封じ込め、抑圧的な作用をもたらすもの(山野上 2016、p.58)」であり、学校側の干渉を嫌う傾向が強い。

しかし、ホームスクールを容易に認めてしまうことは、「学校が退出を促し命じる自由、より端的に言えば学校からの排除への道につながる(山野上 2016、p.58)」。経済的に厳しい状況や、保護者が家庭にいられない状況でホームスクールを行うことは容易ではない。ホームスクールは、誰もができる教育とは言い切れない。それゆえに、学校側のホームスクールの取り扱いには注意が必要である。

次に、ホームスクールの「繭化」についてである。アメリカの教育学者であるマイケル・アップルは、ホームスクールを問題として捉えている者の一人だ。アップル(2008)は、ホームスクール実践者たちの教育に対する熱心な姿勢を賞賛する一方で、ホームスクールが社会的不平等を引き起こす要因であると述べている。アメリカのホームスクール実践者の多くは、保守派のキリスト教徒であり、彼らは、公教育は子どもに悪影響をもたらすものであると考え、家庭での教育を行っている。アップルは主に保守派のキリスト教徒を危険視しており、その理由は4つにわけられる。1つめは、公教育を離れることで人びとが「繭化」していくことだ。「繭化」とは、「都会」(危険と不均質のメタファー)の問題から逃げ場を求めているようなものであり、結果として彼らは自らの(安全な)コミュニティだけで交流するようになる。これは予想以上に多くのコミュニティが恐ろしいほど弱められてしまっているうえに、地域のコミュニティを掘り崩してしまうことになるとアップルは指摘する。2 つめは階級や人種のヒエラルキーの再生産が起こること、3つめは公教育を受けていないがために税金支払いの拒否すること、4つめは公費が公平性を失う教育に使われてしまうことである。

アップルは多くのアメリカの公立学校の不十分さを認めつつも、公立学校は「私たちの多言語的、ますます多文化的になってきている社会において、ある種の社会的統合、共通文化を参照する場(reference point)(アップル 2008、p.233)」であるとし、この共通文化を参照する場がホームスクーラーによって拒否されていることを危惧している。

これらのアップルの指摘は、「子ども発」ホームスクーラーが多い日本であっても考慮する必要がある。ホームスクーラー人口が少なく、比較的に宗教や人種の問題が表面化していない日本では、人種や階級のヒエラルキーの再生産の可能性は低い。しかしながら、「繭化」を 1つのコミュニティに属し、他のコミュニティを排することと考えるのならば、十分に起こりうる問題である。インタビュー調査の中でKさんが危惧していたことはまさに「繭化」のことであった。

> K さん：ホームスクールだけの世界っていうのは、世界を狭めちゃうよね。結局自分の価値観を持ってしまって、そこに固執すると閉鎖していっちゃうでしょ。ホームスクールもそう。…学校を否定している人もたくさんいるけど、その否定のところで親同士が繋がってしまうと…その中に子どもがいると思うと複雑。

第2章4節で紹介した、アメリカのホームスクール経験者であるオリビアは、特に中学校と中学生に対して不信感を強く抱いていた。そしてそれは、彼女自身の経験によるものではなく、周囲の人びとから植えつけられたものであった。アップルの言う「繭化」は比較的大きなコミ

ュニティを指しているようだが、オリビアの例のように小さなコミュニティにおいても「繭化」は起こりうる。むしろ頻発している可能性もあるのだ。「自由」や「多様性」を求めて実践されているホームスクールであるが、ホームスクールのコミュニティだけに留まることは、本来の「自由」や「多様性」とは逆行することとなる。

最後に、ホームスクール実践者とホームスクーラーの存在が投げかけている問いについて考察する。ホームスクール実践者がしばしば尋ねられることは「なぜホームスクールをしているのか」である。この問いの背景には、日本社会には、学校に行くことを当然とみなす「既存の価値観」が深く根付いているためであると考えられる。しかし、ホームスクール実践者からすると「なぜ学校に行くのか」という問いそのものについて考える必要があると答えるだろう。

日本には 14 万人以上（2017 年度時点）の不登校児童生徒がいることは既に述べたが、「学校へ行くのが嫌になる」という感情を共通基盤として、遅刻や早退をする子どもや、我慢をしながら休まずに登校している子どもなど、不登校までには至っていないグレイゾーンの子どもたちも存在する（森田 1999、p.80）。このようなグレイゾーンに属する子どもたちは「なぜ学校に行くのか」という問い対して、前向きな回答をするだろうか。言い換えると、学校は子どもたちに、学校に行く価値を与えられているのだろうか。本調査に協力してくれたホームスクール実践者の多くは、子どもたちが学校に行くことで、学びの自主性や個性、想像力を失っていく姿を目の当たりにしてきた。そして、子どもを学校に行かせる価値はないという判断をした。つまり、ホームスクール実践者とホームスクーラーとは、学校が通う価値のある場所として機能しているかどうかを問い直す存在なのだ。

5.3　今後の研究課題

本研究では、宗教的理由や英才教育のためにホームスクールを実践している家庭についての調査はできておらず、「子ども発」ホームスクールやアンスクーリングの側面を強調する結果となった。しかし、繰り返しにはなるが、ホームスクールは家庭の数だけ教育方針や実践スタイルが存在するため、アンスクーリングも 1 つの面にすぎない。今後、ホームスクール実践者に加え、ホームスクーラー自身、またはホームスクールを経験した成人を対象とした研究の蓄積が望まれる。また、本研究で明らかになった多様なホームスクールについて、様々な視点から、より多くの研究が行われることが期待される。

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

謝辞

修士論文の執筆にあたり、多くの方々からご指導・ご協力をいただきました。

質問紙調査の配布にあたり、NPO 法人東京シューレを経営母体とする「ホームシューレ」にご協力をいただきました。また、ホームスクール関係の Web サイト運営者様、その他関係者の方々のご協力により、調査を順調に進めることが出来ました。質問紙調査には 42 名、インタビュー調査には 26 名のホームスクール実践者の方々が、お忙しいにもかかわらず、ご快諾してくださいました。

さらに、「ホームスクールお出かけ会」の方々は、私の参加を暖かく受け入れていただきました。質問紙調査やインタビューに応じていただいた皆様の、ホームスクール、そして人生に対する考え方に、何度も感銘を受けました。それらの考え方を、これからの人生の道しるべにしたいと思っています。本当にありがとうございます。

主指導の森俊太先生には、学部生時代から数年間ゼミで優しく、粘り強くご指導していただきました。副指導の田中啓先生、文化政策研究科の先生方には、講義や学内の発表会で多くのご指導・ご助言をいただきました。また、2 年間の苦楽を共に過ごした大学院の仲間たち、私の進む道を常に応援してくれる家族や友人の皆さまにも心より感謝申し上げます。

引用文献

Apple, Michael W. (2006) *Educating the Right Way: Markets, Standards, God, and Inequality*. Routledge. (大田直子訳(2008)『右派の/正しい教育　市場、水準、神、そして不平等』、世織書房.)

Bozek, Christopher. (2015) *Exploring Home Education in Japan*,『人間科學研究(Studies of human science)』、11、pp.1-10.

Brumund, Eileen. (2018) *UNSCHOOLING: A Practical Guide*, [Kindle DX version]. Retrieved from Amazon Services International, Inc.

Farenga, Patrick L, and Carlo Ricci. eds.(2016) *Growing Without Schooling: The Complete Collection, Volume 1.* Holtgws LLC.

フリースクール全国ネットワーク・多様な学び保障法を実現する会編(2017)『教育機会確保法の誕生　子どもが安心して学び育つ』、東京シューレ出版.

Gaither, Milton. (2008) *Homeschool An American History*. Palgrave Macmillan.

原清治・山内乾史・杉本均編著 (2016)『比較教育社会学へのイマージュ』、学文社.

秦明夫(1999)「ホームスクールの意味と問題性(上)」、『学校経営』、44(10)、pp.87-91.

―　(2000)「ホームスクールと学校制度―ホームスクールが問いかけるもの」、『埼玉工業大学教養紀要』、(18)、pp.1-20.

Holt, John. (1982) *how children fail*. Merloyd Lawrence.(大沼安史訳 (1987)『教室の戦略：子どもたちはどうして落ちこぼれるか』、一光社.)

Illich, Ivan. (1971) *Deschooling Society*. Harper & Row. (東洋・小澤周三訳 (1977)『脱学校の社会』、東京創元社.)

苅谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井朗著 (2010)『教育の社会学　〈常識〉の問い方、見直し方』、有斐閣アルマ.

菊池千夏(2009)「不登校経験者の母親にみられるアンビヴァレンスの変容に関する一考察　―学校に行く / 行かないをめぐる相克に着目して―」、『子ども社会研究』、15 号、pp.193-204.

今野喜清・新井郁男・児島邦宏編 (2014)『学校教育辞典第 3 版』、教育出版

Mayberry, Maralee, J.Gary Knowles, Brian Ray, and Stacey Marlow. (1995) *Home Schooling: Parents as Educators*. Sage Publications. (泰明夫・山田達雄監訳 (1997)『ホームスクールの時代　学校に行かない選択：アメリカの実践』、東信堂.)

文部科学省 (2009)『諸外国の教育動向 2008 年度版』、明石書店.

森田 洋司 (1991)「私事化社会の不登校問題--プライベ-ト・スペ-ス理論の構築に向けて」、教育社会学研究 、(49)、 p79-93.

長嶺宏作(2003)「アメリカにおけるホームスクーリング運動の成長と変容-ホームスクール支援団体の理念と活動分析を中心として」、『比較教育学研究』、29、pp.114-132.

二宮皓(2013)「学校制度(学制)―諸外国との比較」、教育再生実行会議資料.

西川由里子(2003)「日米におけるホームスクールの現状を考える」、『文化研究』、 9、pp.47-75.

野村俊幸 (2014)『カナリアたちの警鐘　不登校・ひきこもり・いじめ・体罰へはどのように対処したらよいか』、文芸社.

NPO 法人東京シューレ編(2006)『子どもは家庭でじゅうぶん育つ　不登校、ホームエデュケーションと出会う』、東京シューレ出版.

大沼安史 (1982)『教育に強制はいらない　欧米フリースクール取材の旅』、一光社.

Ray, Brian D. (2018) *Research facts on homeschooling*. National Home Education Research Institute.

Redford, Jeremy, Danielle Battle, Stacey Bielick, and Sarah Grady. (2016)*Homeschooling in the UnitedStates: 2012*. National Center for Education Statistics.

佐々木毅・金泰昌(2002)『公共哲学７　中間集団が開く公共性』、東京大学出版会.

佐々木司(2009)「学校に通うホームスクーラー:ホームスクールと非ホームスクールとの間」、『研究論叢』、第 3 部、 芸術・体育・教育・心理 59、pp.85-97.

鈴木匡(2015)「米国におけるオルタナティブ・スクールの分類と効果に関して」、『神奈川大学心理・教育研究論集』、38、pp.37-42.

鈴木大裕(2016)『崩壊するアメリカの公教育　日本への警告』、岩波書店.

八木谷涼子(2012)『なんでもわかるキリスト教大事典』、朝日新聞出版.

山田哲也(2000)「不登校の子どもを持つ家庭の物語にみられるアンビヴァレンスー家族-学校関係の深層における現代的変化を読む」、『〈教育と社会〉研究』、(10)、pp.47-55.

山野上麻衣(2016)「学びたい場で学ぶ自由をいかに支えるか：外国人の子どもの公立学校・外国人学校の選択をめぐって」、『〈教育と社会〉研究』、(26)、pp.49-61.

吉井健治(1999)「不登校を対象とするフリースクールの役割と意義」、『社会関係研究』、5(1/2)、pp.83-104.

―　　(2000)「日本におけるホームスクールの可能性と課題：ホームスクールの一事例を通じて」、『社会関係研究』、6 (1/2)、pp.55-76.

Web サイト（いずれも最終閲覧日 2018 年 12 月 23 日）

朝日新聞記事データベース　聞蔵Ⅱ　HP
https://database.asahi.com/index.shtml

A2Z Home’s Cool HP
https://a2zhomeschooling.com/

文化庁　HP
http://www.bunka.go.jp/

Christian Today　HP
https://www.christiantoday.co.jp/

e-Stat 政府統計の総合窓口　HP

https://www.e-stat.go.jp/

Homeschooler　Map　（ホームスクーラーマップ）

https://www.google.com/maps/d/viewer?ll=26.290443859982208%2C-177.01442829999996&z=-1&mid=1ZHzTXcXchUKOlGvRKp2XNtOguY-CtnM9

Homeschool　Japan　（ホームスクールジャパン）　HP

https://medium.com/homeschooljp

ホームスクーリングセンターホームスクールファミリーの庭園 木陰～こかげ～HP

https://homeschool905.wixsite.com/kokage

Home School Legal Defense Association (HSLDA)　HP

https://www.hslda.org/

Home　Shure　HP

http://www.homeshure.jp/index.html

Lighthouse ロサンゼルス　HP

https://www.us-lighthouse.com/

文部科学省　HP

http://www.mext.go.jp/

National Center for Education Statistics (NCES)　HP

https://nces.ed.gov/

National Home Education Research Institute (NHERI)　HP

https://www.nheri.org/

日本ホームスクール支援協会 (HoSA)　HP

http://homeschool.ne.jp/

東京シューレ　総合 HP

http://www.tokyoshure.jp/

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

図表

第一章

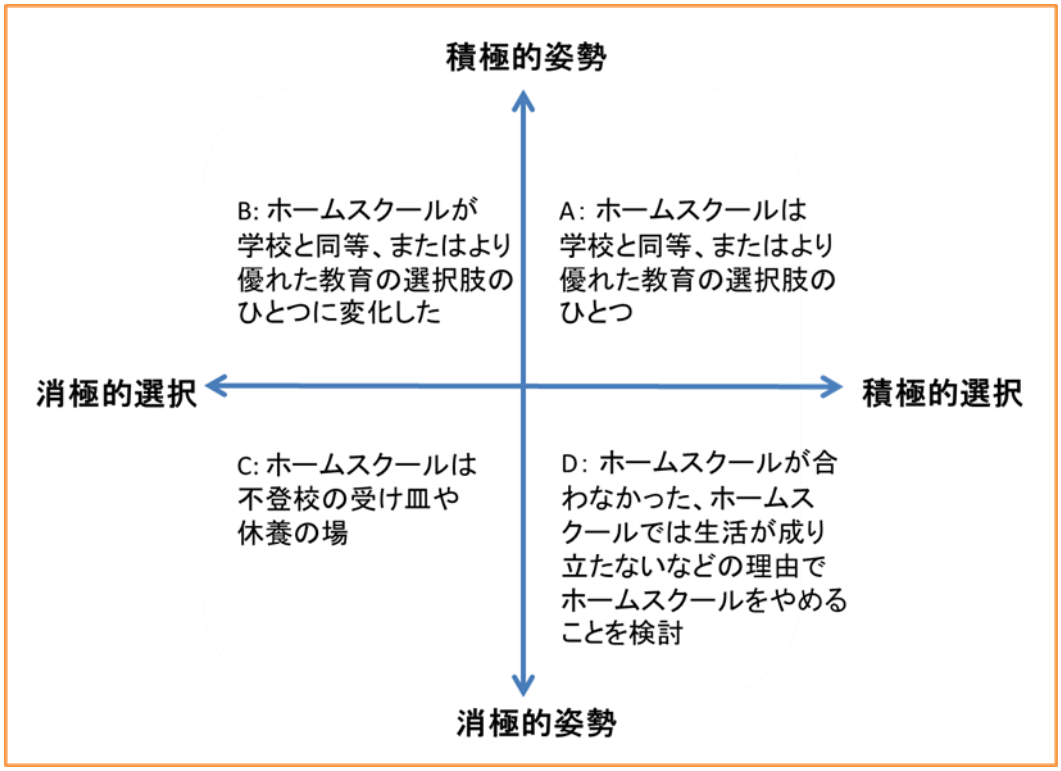


図１　ホームスクールの選択と実践の姿勢に関する積極性とその意義の仮説（筆者作成）

横軸はホームスクールの選択の積極性、縦軸はホームスクール実践の姿勢の積極性を表し、それぞれの象限にはホームスクール実践の意義を示している。

第二章

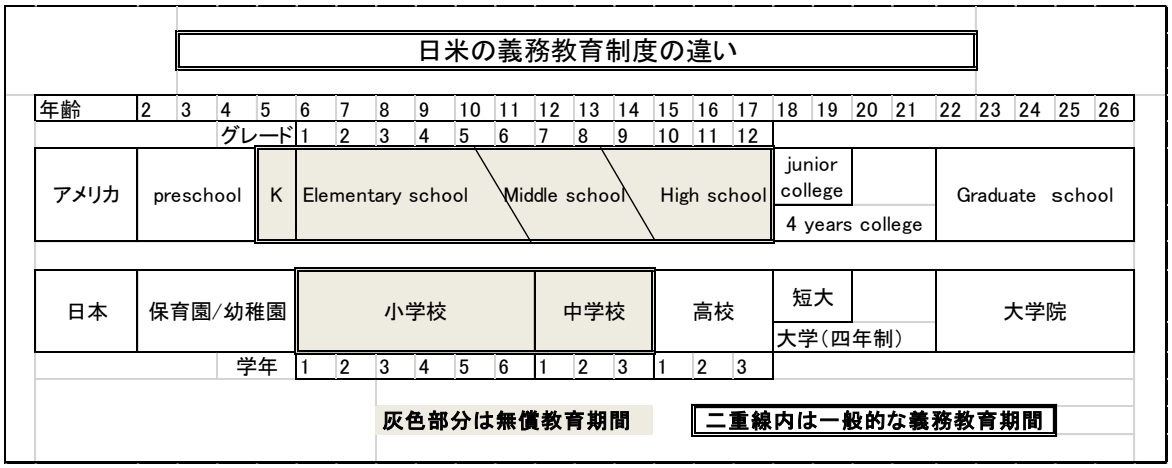


図２　日米の教育制度の違い

（ウェブサイト「Lighthouse ロサンゼルス」と二宮(2013)の資料を参考に筆者作成）

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

表１　ホームスクール法の例
(Home School Legal Defense Association の分類を用い筆者作成)

法律のレベル	high regulation	mederate regulation
州(例)	ペンシルバニア州	オハイオ州
親に求められること	最低でも高校卒業証書、またはそれと同等の教授資格を持っていること。	高校卒業証書またはそれと同程度であることを証明する共通テストのスコアが必要。それらを持っていない場合、学士号を持つものから指導を受けること。この指導は、子どもがテストで適度な習熟を証明できるまで必要とされる。
提出すべきもの	ホームスクールを始める新しい学年の8月1日までに公認の宣誓供述書を学区の教育長に提出すること。それ以降毎年提出が必要となる。記載することは以下の7点である。 1.　親や教育者の名前、子どもの名前と年齢、住所、電話番号 2.　英語で教えるという証明書 3.　授業のアウトライン 4.　ワクチン接種の証拠 5.　法律によって定められている健康、医療サービスについての証拠 6.　ホームスクールを24 P.S. §13-1327.1に従って行うという証明書 7.　教育者、家に住むすべての大人、または子どもを保護する者が、五年以内に有罪判決を受けていないという証明	就学義務を免除してもらうために、毎年ホームスクールを行うという通知を提出する必要がある。以下のことを証明し、記載すること。 1. 通知をするときの学年 2. 親の名前と住所、子どものフルネームと誕生日 3. 親以外が教える場合に限り、先生の名前と住所 4. 必修科目を含む指導を行う保障 5. 簡単なカリキュラム 6. 使用する教材のリスト 7. 時間と必要条件を満たす保障
教育日数と時間	小学校レベルでは、180日または900時間。中学校レベルで180日990時間	学年度ごとに少なくとも900時間を確保すること。
必修科目	〈小学校レベル　K-6th grade〉英語(スペリング、リーディング、ライティング)、算数、公民、アメリカ合衆国とペンシルバニア州の歴史、保健と生理学、体育、音楽、美術、地理、理科、安全教育 〈中学校レベル　7th-12th　grade〉英語(言語、文学、スピーチ、作文)、数学(一般的な数学、代数、幾何学)、社会科(公民、アメリカ合衆国とペンシルバニアの歴史、世界史)、保健、体育、音楽、美術、地理、安全教育 〈高校レベル〉英語4単位、数学3単位、理科3単位、社会科目3単位、美術や人文学2単位	言語、リーディング、スペリング、ライティング、地理、アメリカとオハイオの歴史、政治、数学、理科、保険、体育、美術(音楽を含む)、応急処置、安全、防災
評価について	以下の資料を含むポートフォリオを保管しておくこと 1.　記録 2.　Student work samples:　ライティングやワークシート、ワークブックや創造的なもの。 3.　テスト:グレード3・5・8のときにペンシルバニア州が認めたテストを受けなくてはならない。数学とリーディング、言語の結果を報告すること。 ポートフォリオは毎年、資格のある心理言語学者、2年間の指導経験のある州の認定を受けた教師、過去10年間の間に二年以上の指導経験のある公立でない学校の教師、担当者に評価してもらい、提出しなくてはならない。 その評価は子どものインタビューとポートフォリオに基づいて行われ、それは、「適切な教育が行われているかどうか」を証明するものとなる。	親は子どもの学問的な習熟度を毎年評価することが求められる。以下の3つの評価方法から1つを選択する。 1.　子どもに全国学力テストを受けさせる。テストの合計点数を教育長に通知し、またその点数が最低でも25パーセンタイルを上回ること証明すること。 2.　子どもの作品のポートフォリオが資格のある人によってレビューされ、その年の子どもの学問の進度が能力に合っていることを示す文章を提出すること。 3.　上記以外の評価方法で、親と教育長が認めるもの。

法律のレベル	low regulation	requiring no notice
州（例）	ネバダ州	インディアナ州
親に求められること	特になし	インディアナ州の法律に従う ホームスクールは非認定私立校と見なされているため、インディアナ州の私立学校法に従うこと。 1．私立学校は、英語で教えること、また、公立学校と同等の指導をすること。しかし、教育委員会は「同等の指導」の定義をする権限や、ホームスクールプログラムを承認する権限は与えられていない。そのため、必修科目やプログラムはない。 2．居住地区の公立学校と同じ日数ホームスクールを行うこと。一般的には180日である。 3．出席日数を記録しておくこと。 4．インディアナ州公立学校は頻繁に教育委員会のウェブサイトへの登録をホームスクーラーに求める。これは義務ではなく、任意である。登録しておくと、いくつかの場面で、役立つだろう。教育長によって要求された場合は、ホームスクールで教えている子どもの数、学年を伝えなくてはならない。
提出すべきもの	ホームスクールを行うということを学区の教育長に、一度届け出る必要がある。名前や住所が変わらない限りは再提出の必要はないが、もしも変更があった場合には、30日以内に学区の教育長に届けを出すこと。 ・届け出には以下のことを記載すること。 1．子どもの名前、性別 2．親の名前、住所 3．親が子どもを管理し、権威を持ち、教育を合法に行い、HSを行う間、子どもの教育に責任を持つということを示したサインと日付を書いた証明書 4．親が教えるつもりである必修科目を示した教育プラン 5．該当する場合、子どもが最近通っていたネバダ州の学校の名前 6．届け出の中の情報の流出を禁じる任意の証明書	
教育日数と時間	特になし	
必修科目	英語（リーディング、ライティング、作文）、数学、理科、社会科目（歴史、地理、経済、政治）	
評価について	特になし	

表 2　アメリカのホームスクール経験者への質問一覧(筆者作成)

質問一覧
質問1. いつホームスクールをはじめ、いつ終えましたか。
質問2. なぜ学校に行く代わりにホームスクールをすることを選んだのですか。
質問3. 誰があなたにホームスクールを勧めましたか。
質問4. 誰が教科を教えてくれましたか。また、その人は教育や教えることに関する知識を持っていますか。
質問5. 覚えている限りのクラススケジュールを教えてください。
質問6. 一番お気に入りの授業は何でしたか。またそれはなぜですか。
質問7. あなたにとってホームスクールの利点は何ですか。
質問8. あなたにとってホームスクールの欠点は何ですか。
質問9. ホームスクールをはじめてから、新たに友人はできましたか。その友人はどこで出会いましたか。また、その友人もホームスクーラーでしたか。
質問10. 親になったとき、子どもにホームスクールをしてあげたいですか。それは、なぜですか。
質問11. ホームスクールについて、なんでも教えてください。

第三章

表 3　日本のホームスクール実践者への質問一覧と回答方法(筆者作成)

質問内容	回答方法
問1：お子さんは何人いて、そのうち何人ホームスクールをしていますか。（回答例：3人中2人、1人中1人）	記述式
問2：ホームスクールで教育を受けているお子さんは、2018（平成30）年4月時点で何年生にあたりますか。（回答例：1人の場合：小学４年生、複数いる場合：１人目中学2年生、2人目小学３年生）	記述式
問3：最初にホームスクールを始めたのはいつですか。（複数お子さんがいる場合は、最初に始めたお子さんを想定してください。）（回答例：2015年4月、2017年11月）	記述式
問4：なぜホームスクールを選択しましたか。	（複数回答可）子どもが不登校になったため/学校教育に対する不満があったため/保護者の宗教的信条のため/ホームスクーラーの成功例を知ったため/英才教育のため/その他（自由記述）
問5：どのようにしてホームスクールを知りましたか。	（複数回答可）テレビや雑誌、新聞で知った/インターネットで知った/友人・知人から聞いた/海外経験から知った/その他（自由記述）
問6-1：ホームスクールをしながら他の学校（公立学校、フリースクール、オルタナティヴスクールなど）に通っていますか。（パートタイムでホームスクールを行っていますか。）	はい/いいえ
問6-2：問6-1で「はい」を選択した方のみお答えください。どの学校に通っていますか。	（複数回答可）学区内の公立学校/フリースクール/その他（自由記述）
問6-3：問6-1で「はい」を選択した方のみお答えください。どのくらいの頻度でその学校に通っていますか。（回答例：週2日通っている、週1日体育の授業のみ参加している）	記述式
問7-1：問6-1で「いいえ」を選択した方（フルタイムでホームスクールをしている方）のみお答えください。ホームスクールを始める前に、公教育以外の学校（フリースクールやインターナショナルスクールなど）は検討しましたか。	はい/いいえ

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

質問内容	回答方法
問7-2：問７－１で「はい」を選択したかたのみお答えください。どのような学校を検討しましたか。できるだけ具体的な名称をお答えください。	記述式
問７－3：問７－１で「はい」を選択したかたのみお答えください。ほかの学校も検討したうえで、なぜホームスクールを選択したのですか。	（複数回答可）子どもが行きたがらなかったため/金銭的に厳しかったため/検討した学校が、通うには遠い場所にあったため/ホームスクールの方が子どもにあっていると判断したため/体験してみた（または通ってみた）けれど、子どもに合わなかったため/その他（自由記述）
問8：お子さんは、ホームスクールを受けていて、どのような様子ですか。（複数お子さんがいる場合は、最初に始めたお子さんを想定してください。）	満足している・・・大いに当てはまる/ある程度当てはまる/どちらでもない/あまり当てはまらない/ほとんど当てはまらない
問9：学区内の学校はホームスクールを行うことを理解してくれていますか。	大いに当てはまる/ある程度当てはまる/どちらでもない/あまり当てはまらない/ほとんど当てはまらない
問10-1：学区内の学校はホームスクールを行うことに対して協力的ですか。	大いに当てはまる/ある程度当てはまる/どちらでもない/あまり当てはまらない/ほとんど当てはまらない
問10-2：学区内の学校はどのようなサポートを提供してくれていますか。	（複数回答可）勉強に関する情報提供/授業へのパートタイムの参加/教材の提供/進路サポート/テストの受講/学校の施設（図書館など）の利用/勉強などの個別指導/特に提供されているサポートはない（あるいは知らない）/その他（自由記述）
問10-3：学区内の学校から提供されているサポートで実際に利用しているものはありますか。	（複数回答可）勉強に関する情報提供/授業へのパートタイムの参加/教材の提供/進路サポート/テストの受講/学校の施設（図書館など）の利用/勉強などの個別指導/何も利用していない/その他（自由記述）
問11-1：ホームスクールのサポートや情報提供をしている団体・グループに所属していますか	はい/いいえ
問11-2：問１１－１で「はい」を選択した方のみお答えください。どの団体・グループに加入していますか。（複数ある場合にはすべて書いて下さい。）	記述式
問11-3：問１１－１で「はい」を選択した方のみお答えください。ホームスクールサポート団体・グループから、どのようなサポートを受けていますか。（複数回答可）	情報提供/学習サポート/進路サポート/会員同士の交流の場の提供
問11-4：問１１－１で「いいえ」を選択した方のみお答えください。なぜ団体・グループに参加しないのですか。（複数回答可）	団体の存在を知らなかった/団体の必要性を感じない/年会費が高い/その他（自由記述）
問12：ホームスクールを実践している保護者の最終学歴は何ですか。（回答しているご自身についてお答えください）	中卒/高卒/短大・専門学校卒/大卒/大学院修了/その他（記述式）
問13：ホームスクールをしていて良かったことを教えてください。	記述式
問14：ホームスクールを行う上での悩んでいることや、困っていることなどがありましたら教えてください。	記述式
問15：ホームスクールを行う上で、大事にしていることや心がけていることがあれば教えてください。	記述式
問16：お住まいの都道府県はどこですか。	記述式

表 4　インタビュー調査協力者の概要(筆者作成)

名称	月・日	場所・手段	協力者	名称	月・日	場所・手段	協力者
A	7・25	協力者宅	母	N	8・4	LINE通話	母
B	7・26	レストラン	母	O	8・9	skype通話	母
C	7・30	電話	母	P	8・9	skype通話	母
D	7・30	LINE通話	母	Q	8・10	FB通話	母
E	7・30	LINE通話	母	R	8・15	FB通話	母
F	7・31	FB通話	母	S	8・15	FB通話	母
G	7・31	FB通話	母	T	8・20	FB通話	母
H	7・31	skype通話	母	U	8・24	レストラン	母
I	7・31	LINE文面	母	V	8・26	レストラン	母
J	8・1	ZOOM通話	父	W	9・6	レストラン	母
K	8・1	FB通話	母	X	9・6	レストラン	母
L	8・2	FB通話	母	Y	9・20	カフェ	母
M	8・2	FB通話	母	Z	7・31-9・1	FBメッセンジャー	母

第四章

表 5　各国におけるフリースクール・ホームスクールと義務教育との関係

（文部科学省のホームページを参考に筆者作成）

	日本	アメリカ
義務教育の定め（就学義務の有無）	◇就学義務あり。	◇就学義務あり（各州法により規定）。
義務教育年限	◇6～15歳の9年間。	◇6～16歳の10年間または7～16歳の9年間とする州が多い。最も長いのは5～18歳の13年（ニューメキシコ州等）。
義務不履行に対する罰則	◇督促を受けてなお履行しない者は10万円以下の罰金を課される。	◇各州法により規定。
フリースクールの位置付け	◇各種学校、特定非営利法人、任意団体等。	◇私立学校（private school）、独立学校（independent school）、非営利団体等。
	◇正規学校の教育課程の弾力化により、不登校児童生徒を対象とした学校の設置も可能に。	
フリースクール、ホームスクーリングと教育義務・就学義務との関係	◇義務教育を学校以外で行うことは認められていない。 ◇正規学校に籍をおきつつ、フリースクールにおいて相談・指導を受けた日数を指導要録上出席扱いとすることができる。	◇ホームスクーリングはすべての州で就学義務の免除として認められている。 ◇ホームスクールの教員資格を規定している州は少ないが、多くの州では州が指定したテストを決められた学年で受けることを課している。 ◇学習時間等の記録を学区に定期的に提出することが求められている場合が多い。
上級学校への入学資格	◇正規学校に在籍していれば卒業を認めるケースが多い。	◇ホームスクーリングの子どもが公立学校へ転入する場合は学区がテストを行うことができる。
	◇正規学校に在籍しない場合には、「中学校卒業程度認定試験」に合格する必要がある。	

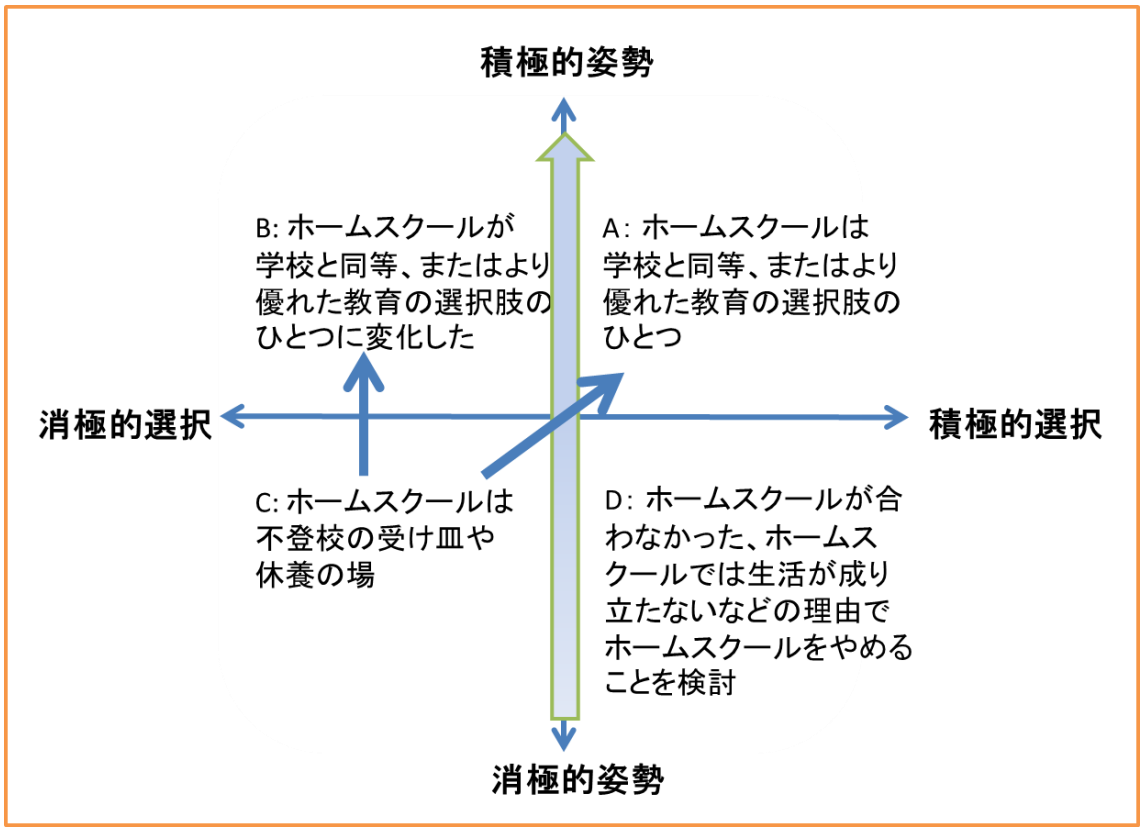


図 3　ホームスクールの選択と実践の姿勢に関する積極性とその意義の結果（筆者作成）
ホームスクール実践の姿勢は、矢印のように実践を通して積極的に変化をしていく。

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
鈴木　七海　Nanami SUZUKI

資料

第二章

資料１　エマの回答

1. When did you start homeschooling and until when did you finish it? (how old)
I started when I was 12 years old and stopped when I was 14.

2. Why did you choose homeschooling instead of going to a public school?
My parents did not like some of the decisions that the school was going to make and I was not enjoying the social situation I was in

3. Who recommended homeschooling to you?
A few family friends homeschooled their children so we looked into the option. No one really recommended it to us. It was an option available and we liked it

4. Who teaches the subjects? And does that person have experience with teaching education?
My dad taught most of the subject and my mom taught me math. My dad has a degree in education and was principal before he homeschooled me and my mom is an accountant.

5. Please tell me as much of your class schedule from what you remember.
I got to choose my schedule myself. The only part that my parents decided was that I had to have math and spelling every day. Usually I picked a subject for each day and did all of that subject's work for the week on that day. For example, Tuesday's were History day. I would do my reading and activities in the morning and after lunch my dad would take me to the library where I could look up relevant books and answer reading questions. Friday's I had a science co-op with other homeschool families in town. We met once a week in the morning for science classes and extra ciriculars like music and gym. In the afternoon there was a homeschool theatre troop that met. A lot of the students from the co-op also attended the theatre troop.

6. What was your favorite class? And why?
History was my favorite class. I loved to read and I found a really good curriculum that I loved. I was most independent for this subject as well which was really nice.

7. What are the advantages of homeschooling for you?
Time was a big advantage. For example, if I couldn't get to sleep at night, I could work on the next day's school work until I wanted to go to bed and then sleep in that much the next day. I could also be more involved in my community since I had a very flexible schedule. I also had a lot of freedom and independence in my studies. For example, before I became homeschooled I had only studied American history. I wanted to learn more than just the history of my own country, so I chose to study world history while I was homeschooled.

8. What are the disadvantages of homeschooling for you?
To me, there were no disadvantages of homeschooling.

9. Were you able to make new friends after starting homeschooling? If you say "yes", where and how did you meet them? Are they also homeschoolers?
Yes. I made more friends in three years of homeschooling than I had in seven years at my private school. I was very involved in theatre and met many friends there working on plays. I also met friends while at the co-op and homeschool theatre troop.

10. Do you want to homeschool your children when you will become a parent? Why?
I want to give my children the option of homeschooling. I chose to be homeschooled and I loved it, but at any point if I did not want to do it any more, my parents would have supported me and changed. I want to give my kids the same freedom and choice that my parents gave me.

11. Please tell me anything else about your homeschooling experience!
Homeschooling was the best three years of my life. I met a lot of friends, many of whom I am still in contact with today. I am the person I am today because my parents allowed me that freedom.

資料２　オリビアの回答

1. When did you start homeschooling and until when did you finish it? (how old)
I was homeschooled until I was about 9 years old, and then I went to a public elementary school for 3rd grade and 4th grade – and after that, I was homeschooled for the rest of my life until 2015 when I entered college.

2. Why did you choose homeschooling instead of going to a public school?
My mother chose to homeschool me as a child because, she says that she thought my brother and I actually knew more things than most kids did, and didn't want us to be bored in school learning things we already knew. (For example: If I went to 1st grade, they would be teaching us how to read simple books like, "This is spot. See spot run." But I was already reading higher level books than that.)
After a while, we went to public school anyway for a few years, but we stopped and went back to homeschooling because my mother was having problems with the school system.

3. Who recommended homeschooling to you?
My mother made the choice on her own, I think.

4. Who teaches the subjects? And does that person have experience with teaching education?
My mother would teach us things. She does not have any formal education of teaching, but she would teach us anyway.

5. Please tell me as much of your class schedule from what you remember.
We didn't have much of a schedule. My mother would tell us that maybe every day we had some simple math worksheets to do or something, and we could do them whenever we wanted that day and give them back to her, or something. My mother didn't need to include music class for me, because I already practiced piano every day by myself. She didn't need to include an art class, because I already drew all the time. For science, my brother actually played a game he loves, which is all based on physics. I wrote a paper all about fireflies. And we never had reading class, because my brother and I already liked reading books, and had a high reading level. It was very relaxing, and it didn't feel like we were really in school – but we learned a lot because we could study whatever we wanted. So I studied art, music, and Japanese, while my brother studied some physics and computer coding. We had more time to focus on learning about things we were interested in.

6. What was your favorite class? And why?
My favorite class subjects were art, music, and writing. I loved those things growing up. Then from the age of 14 or so, I also loved studying Japanese.

7. What are the advantages of homeschooling for you?
It was very relaxing, and it didn't feel like we were really in school – but we learned a lot because we could study whatever we wanted. So I studied art, music, and Japanese, while my brother studied some physics and computer coding. We had more time to focus on learning about things we were interested in, and also, my brother and I grew closer together because we always were around each other instead of being separated. Also, the school in my area was not a good school, because it had many fights and drugs and other bad things. Because I was homeschooled, I never needed to worry about those things.

8. What are the disadvantages of homeschooling for you?
I think the disadvantage of homeschooling is lack of social interaction. My mother always took me out to the park to play with friends, and I was in girl scouts, so I had social interaction – but

my brother did not. However, I think if parents take their children to clubs and other activities, they can have social interaction, too.

9. Were you able to make new friends after starting homeschooling? If you say "yes", where and how did you meet them? Are they also homeschoolers?
Yes, I made friends with girls I met in girl scouts. Also, I met friends going to the park, or I met my mom's friends' kids and made friends with them. Some people I met were homeschoolers, but that was very rare.

10. Do you want to homeschool your children when you will become a parent? Why?
I don't want to have kids. However, if I did raise kids, I think I would homeschool them. Maybe I would put them in elementary school, and keep them homeschooled through middle school – because I heard middle school is very hard, and many kids are very mean in middle school. Also, I would want my child to have freedom and time to study what makes them happy.

11. Please tell me anything else about your homeschooling experience!
I think homeschooling is a good thing for some people, and not for others. It all depends on the personality of the child. Also, it depends on how dedicated the parents are. Either way, I really like the idea of homeschooling and I think more parents should consider it.

資料 3　ソフィアの回答

1. When did you start homeschooling and until when did you finish it? (how old)
I started homeschooling the day I was born, and stopped when I graduated high school at eighteen. I never attended a traditionally-structured school as a student, but since graduating I have been teaching at a local elementary school, so I feel I have a good concept of what traditional schooling is like for the students.

2. Why did you choose homeschooling instead of going to a public school?
When the oldest of my siblings was born, my parents (particularly my father) were rather strict Christians, and decided not to put their children in a traditional school primarily because of the irreligious environment.

3. Who recommended homeschooling to you?
I do not know exactly where my parents first learned of the option of homeschooling. I do know that, at that time, homeschooling was not as widely practiced (and sometimes still being contested legally), so my best guess is that they heard about it from someone else who was homeschooling.

4. Who teaches the subjects? And does that person have experience with teaching education?
My mother was, in a sense, the primary teacher for most of our subjects. However, she always saw herself as a facilitator for our education, rather than a provider. She gave us the learning materials and allowed us to take the action and responsibility for learning on our own. She has a Bachelor's Degree in Managerial Dietetics, but not a teaching degree or any official teaching experience.

5. Please tell me as much of your class schedule from what you remember.
My class schedule changed from day to day depending on what I was willing or able to accomplish that day, or what the rest of the family was doing that day. Most of my school days were simply spent reading whatever books I had from the library, on whatever subjects I wanted to learn more about.

6. What was your favorite class? And why?
My favorite "class" so to speak, was what I now know as English. The reason why is probably because reading to gain a deep understanding of a subject has always been naturally easy for me. When I got to college and people asked me why I chose to be an English major, my answer was, "It's the only thing I'm any good at."

7. What are the advantages of homeschooling for you?

I feel the greatest advantage I had in homeschooling was the freedom to learn at my own pace. I was always significantly better at some subjects than others, and I was always a perfectionist, even as a very young child. Any pressure that was put on me to learn something that I struggled with, faster than I was able to learn it, caused me a great deal of stress, and I would become emotionally unhinged when I felt I was falling short despite my best effort. As a homeschooler, I could receive individual attention from my mother during these times, and she had the authority to say, "We can wait on this until you're ready, since you clearly aren't ready now." I was also not disrupting the functions of a classroom during these struggles and emotional outbursts.
I also gained was the ability to motivate myself to learn and to accomplish tasks, instead of relying on others to tell me what I need to do and when I need to do it. This self-motivation I gained from homeschooling has helped me to overcome the difficulties I naturally have with taking initiative. I was also able to develop my interpersonal skills at my own pace outside of the traditional school environment.

8. What are the disadvantages of homeschooling for you?

Being on the receiving end of misunderstandings and judgment from others is one unpleasant part of homeschooling. There are many other disadvantages that I am aware of, but in my own experience I have not dealt with them. Many critics of homeschooling cite difficulties with socialization as a disadvantage, but I am fairly certain any socialization problems I had in my childhood were due to my own personality and psychology: being in a traditional school environment would have only increased the pressure and stress of socialization for me.

9. Were you able to make new friends after starting homeschooling? If you say "yes", where and how did you meet them? Are they also homeschoolers?

I absolutely had opportunities to make new friends while being homeschooled. Most of the homeschooling families in our area would organize weekly cooperative groups, or "co-ops," to give children an opportunity to socialize (and in the case of older children, take science classes taught by homeschooling parents with more expertise than our own might have had). I was also involved in church activities and other clubs at different times. I personally never had a lot of friends at any given time, but, as I said above, that was more due to my timid, introverted personality than to any lack of opportunities to make friends.

10. Do you want to homeschool your children when you will become a parent? Why?

I will definitely homeschool my children when I am a parent, because I want to be more engaged with my children's education than most parents seem to be whose children attend public school, and I want them to have the freedom to learn at their own paces. I feel capable of being as good of a facilitator to their education as my mother was to mine, and if my children take after me in personality, they will likely not flourish in a traditional schooling environment, so I would rather not put that pressure on them.

11. Please tell me anything else about your homeschooling experience!

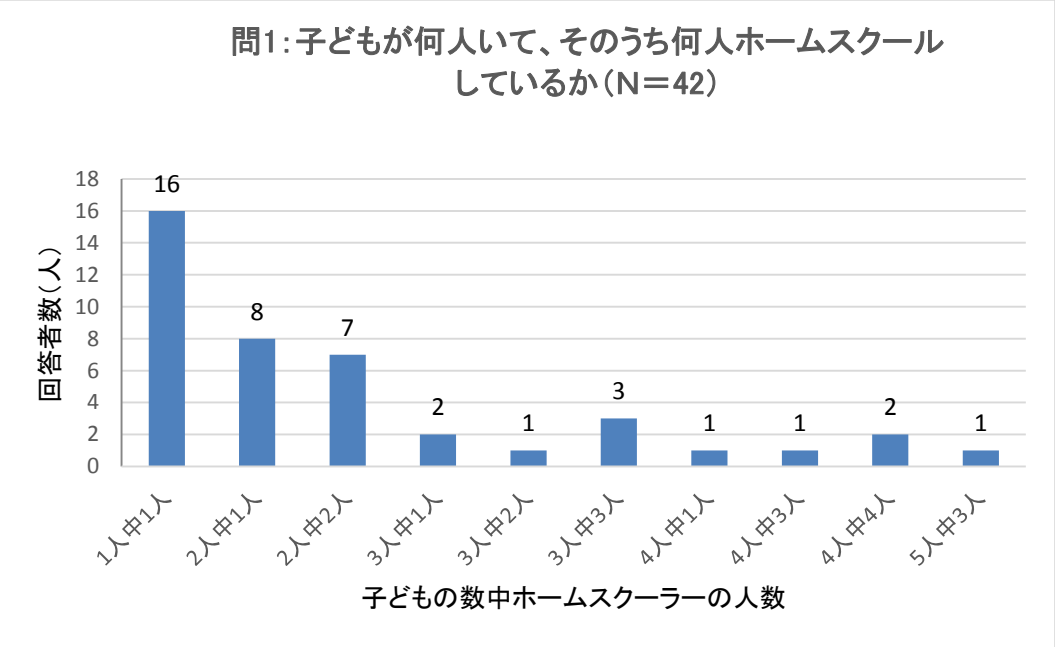
I suppose the only thing I can add is that my experience is totally unique: other homeschooling families that I know structure their school days much as a traditional school would, and that just shows they have vastly different priorities, as well as different experiences. I think these allowances for families to change what homeschooling means to suit their own needs, are homeschooling's greatest strength on the whole.

第三章

資料 4　質問紙調査結果

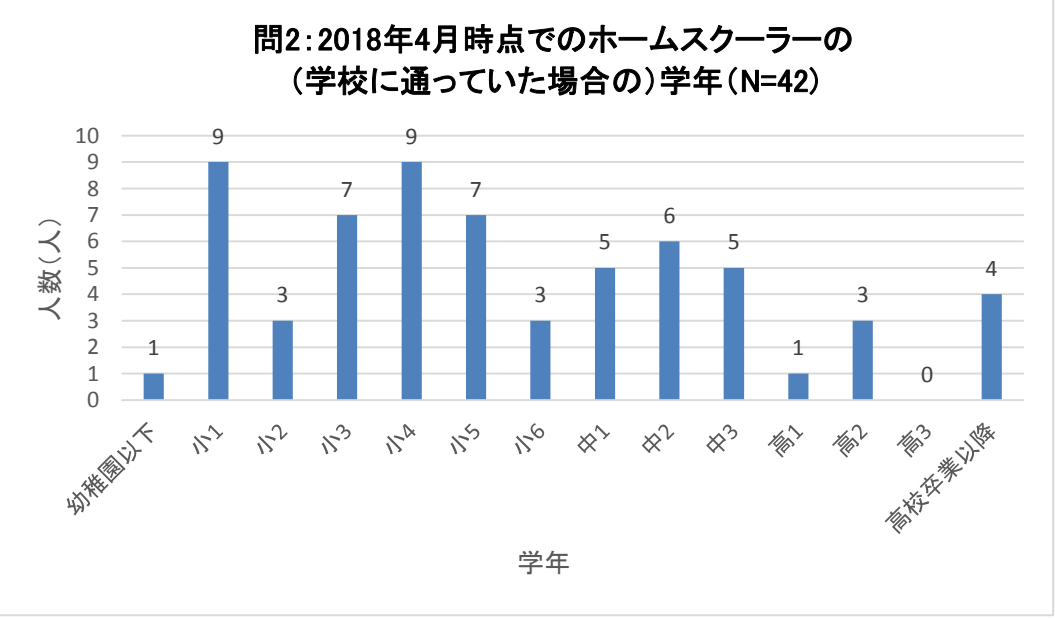
問 1：[お子さんは何人いて、そのうち何人ホームスクールをしていますか。]

有効回答数 42



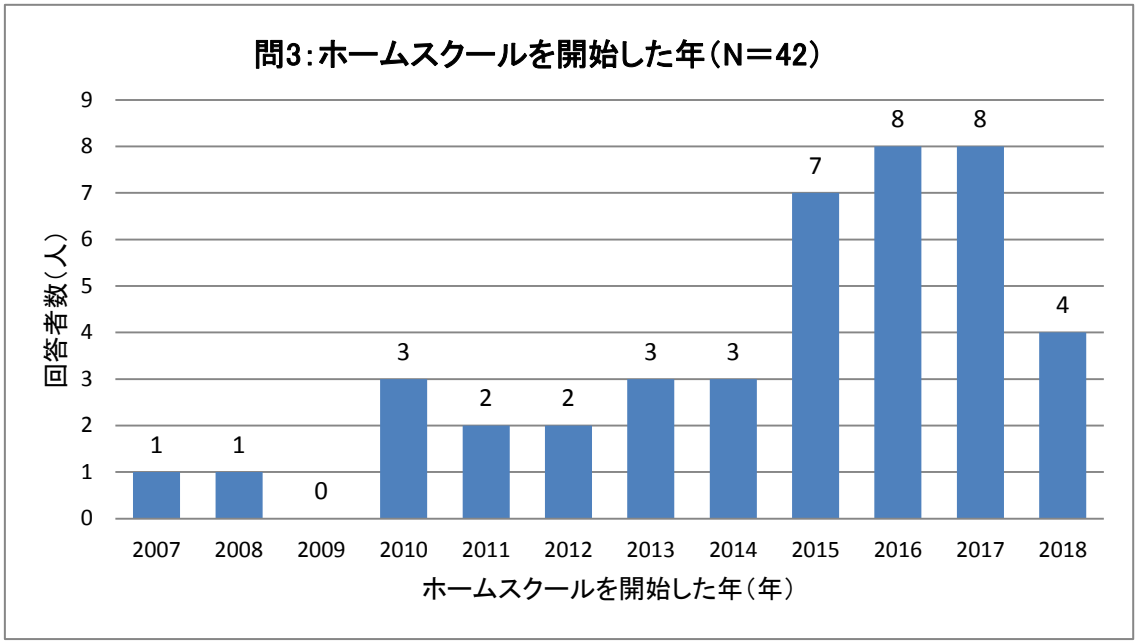
問 2：[ホームスクールで教育を受けているお子さんは、2018(平成 30)年 4 月時点で何年生にあたりますか。]

有効回答数 42



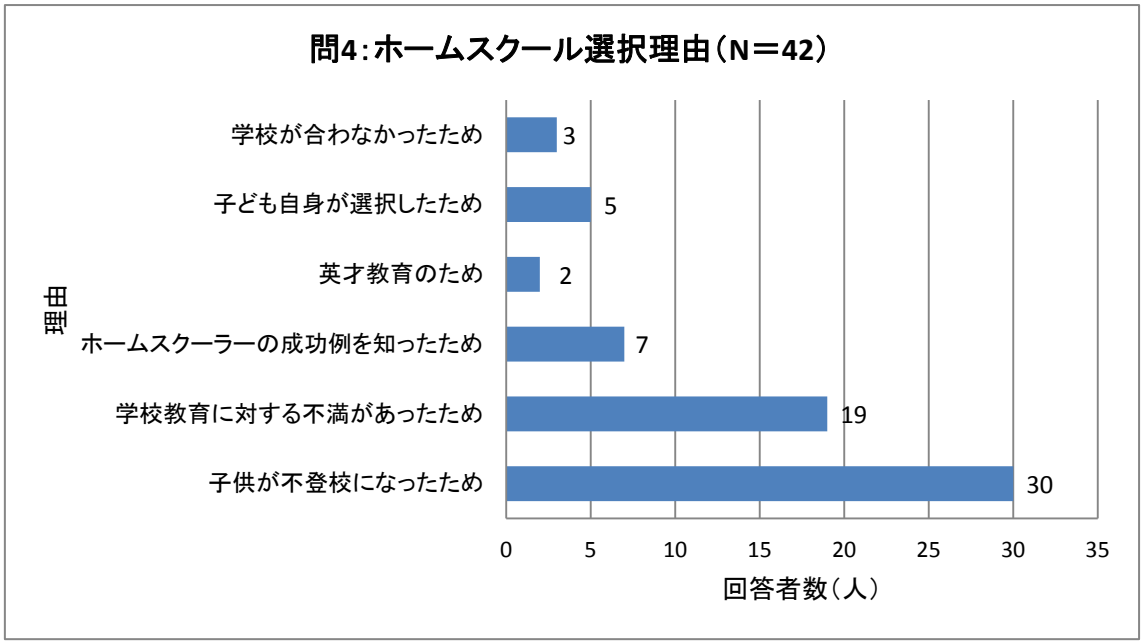
問 3：[最初にホームスクールを始めたのはいつですか。(複数お子さんがいる場合は、最初に始めたお子さんを想定してください。)]

有効回答数 42



問 4：[なぜホームスクールを選択しましたか。(複数回答可)]

有効回答数 42



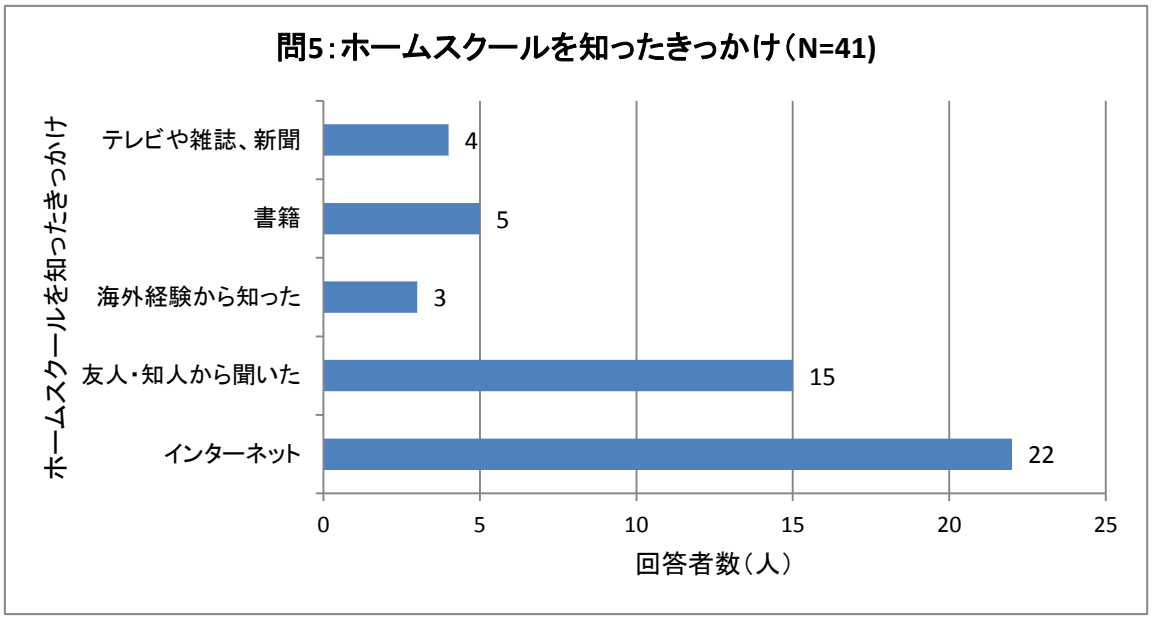
その他の回答(原文のまま抜粋)

- どのように過ごしたいか。そのスタイルがホームスクールというものだった。
- 学校の学び方と子どもの特性が合わなかった為
- 母国語を日本語にするため(韓国在住)

- フリースペースに行かなくなった為
- 子どもの様子を見て、学校復帰は考えられないと判断したため
- 子どもの母語が英語であるため、イギリスのカリキュラムを使って、子どものペースで学ばせたいと考えたからです。オンラインのコースには所属しています。
- 自身のうつ経験により、学校に行かせることにこだわると具合が悪くなったから。
- 学校に行かせる意味がないと思ったから。あるのは悪い意味だけ。

問 5：[どのようにしてホームスクールを知りましたか。(複数回答可)]

有効回答数 41

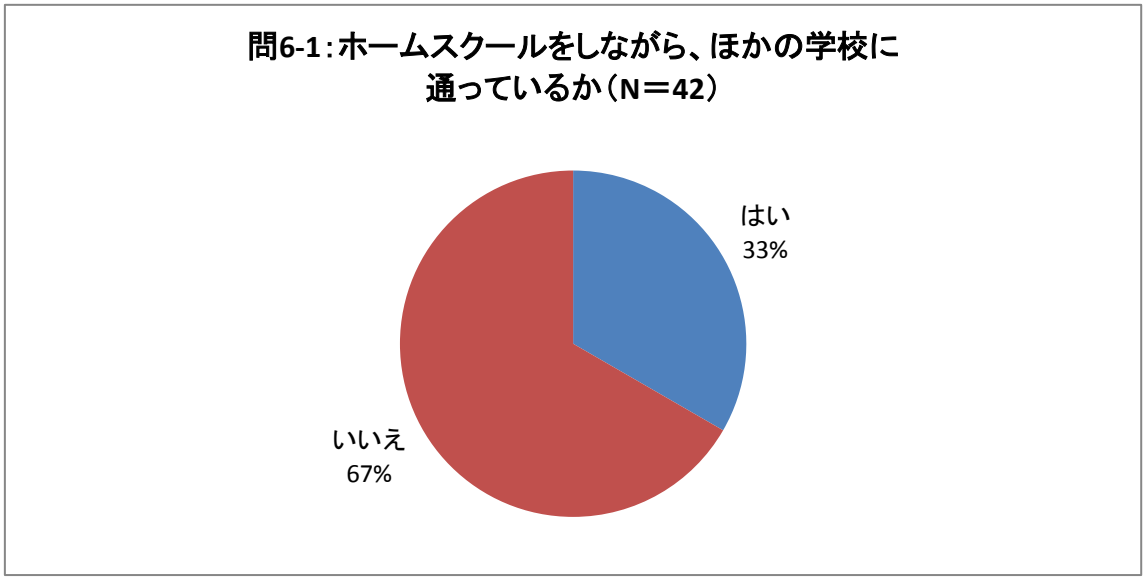


その他の回答(原文のまま抜粋)

- 具体的な情報源は覚えていないが、知識として知っていた。
- 講演を聞いた
- 第一条項へ入学せずに家庭で過ごす(家庭保育の延長？)ことを決めた結果、ホームスクールにカテゴライズされたという感じです。
- ホームスクールを選択していた家族を知っていました
- 最初のうちはホームスクールという意識はあまりなく、『学校に【行けない】から、仕方なく家にいることを認める』というスタンスでした。その後、新聞等で東京シューレを知り、そのなかでホームシューレを知り、そこからようやくホームスクールの意識が少しずつ育っていきました
- 学校のスクールカウンセラーさんから聞いたため
- 勝手に始めた。後に、ホームスクールという名前があるのを知ったのはネット。
- 学生時代に知った。

問 6-1：[ホームスクールをしながら他の学校(公立学校、フリースクール、オルタナティヴスクールなど)に通っていますか。(パートタイムでホームスクールを行っていますか。)]

有効回答数 42



問 6-2：[問 6-1 で「はい」を選択した方のみお答えください。どの学校に通っていますか。(複数回答可)]

有効回答数 14

学校の種類	人数
学区内の公立学校	6
デモクラティックスクール	3
フリースクール	5
登校支援教室	1
オンラインスクール	1

その他の回答(原文のまま抜粋)

・　通っているというか、国内外の学校や団体、個人、グループなどと相互交流をしている。

問 6-3：[問 6-1 で「はい」を選択した方のみお答えください。どのくらいの頻度でその学校に通っていますか。]

有効回答数 14

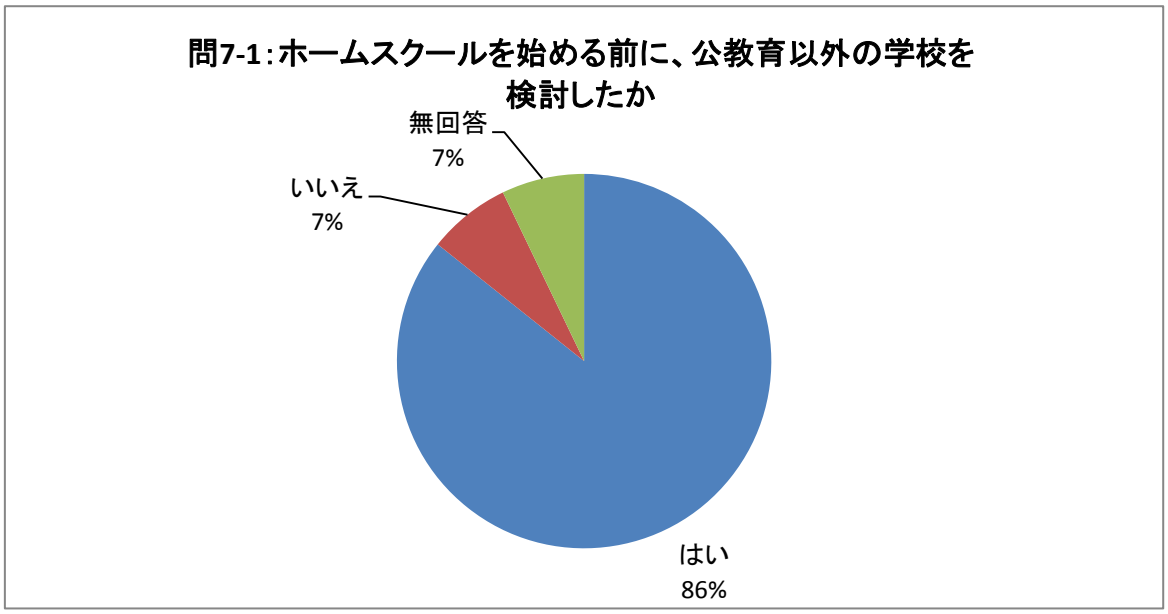
回答(原文のまま抜粋)

・　小 1 の子はほぼ毎日 3 時間目からなど時短で。小 3 の子も時短で半分くらいの登校。小 5 の子は 2、3 ヶ月に 1 度くらい(公立学校)
・　小 3:公立校週 1 夕方登校、サドベリースクール 2 ヶ月に 1 回程度　中 1:公立校月 1 回程度、サドベリースクール 3 ヶ月に 1 回程度
・　平日の午前中(登校支援教室)
・　週 1 ぐらい(フリースクール)
・　週 4 日(オルタナティブスクール)

- 昨年までは週１回、今年はほとんど行っていない(公立学校)
- ２人目は週１～２回、やりたい活動や個別で図工など。３人目は毎日給食、週１で通級、個別で図工など。(公立学校)
- 月１回行きたいときや、健康診断。(公立学校)
- 週１回(フリースクール)

問 7-1：[問 6-1 で「いいえ」を選択した方(フルタイムでホームスクールをしている方)のみお答えください。ホームスクールを始める前に、公教育以外の学校(フリースクールやインターナショナルスクールなど)は検討しましたか。]

「いいえ」選択者数 28、有効回答数 26



問 7-2：[問 7-1 で「はい」を選択したかたのみお答えください。どのような学校を検討しましたか。できるだけ具体的な名称をお答えください。]

有効回答数 23

学校の種類	人数
フリースクール	10
サドベリースクール	7
モンテッソーリ教育を行う学校	2
インターナショナルスクール	2

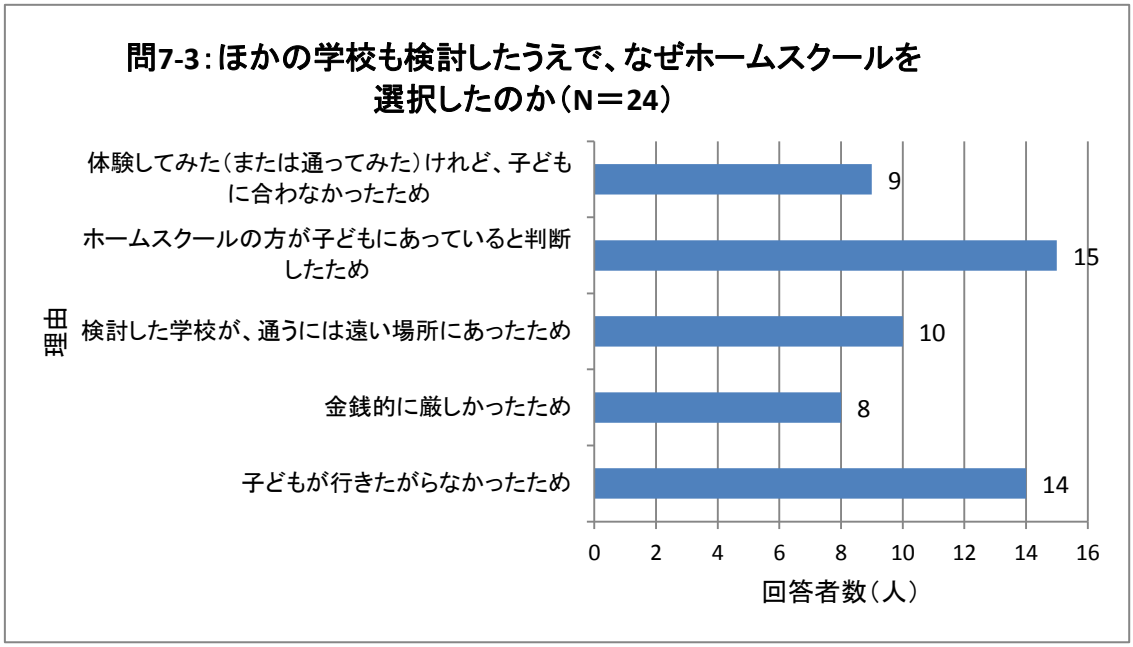
その他の回答(各１つずつの回答があった、原文のまま抜粋)

コミュニティスクール、賢治の学校、在日英国人向け学校、インターナショナルスクール

シュタイナー、デモクラティックスクール、通信制の学校、きのくに子どもの村学園、フリースペース、ちばこどもり学園、千の葉学園、イエナプラン

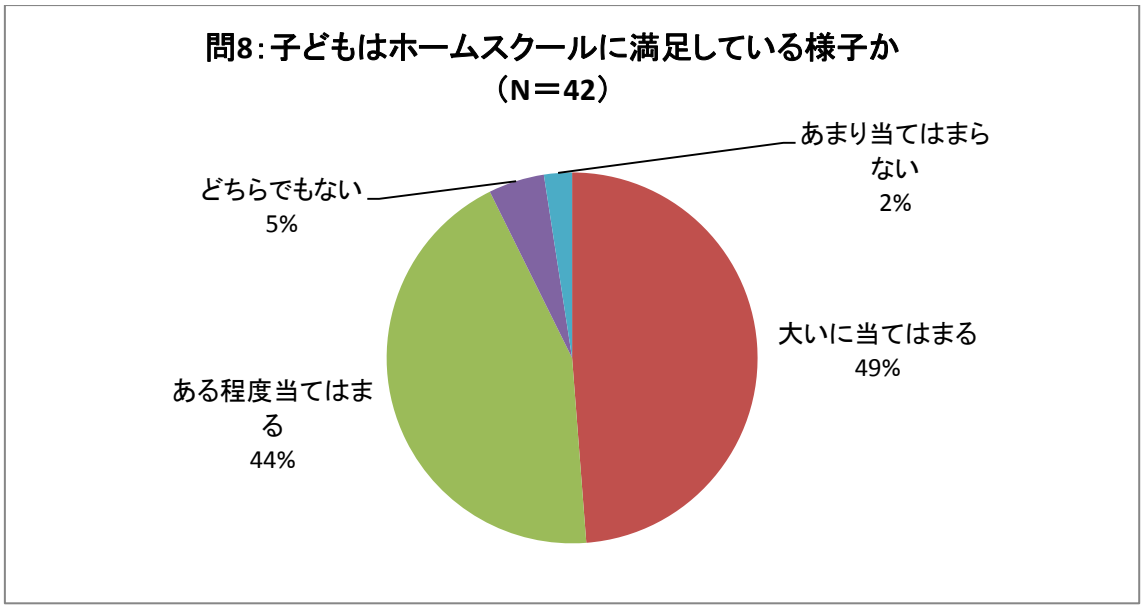
問 7-3：[問 7-1 で「はい」を選択したかたのみお答えください。ほかの学校も検討したうえで、なぜホームスクールを選択したのですか。(複数回答可)]

有効回答数 24



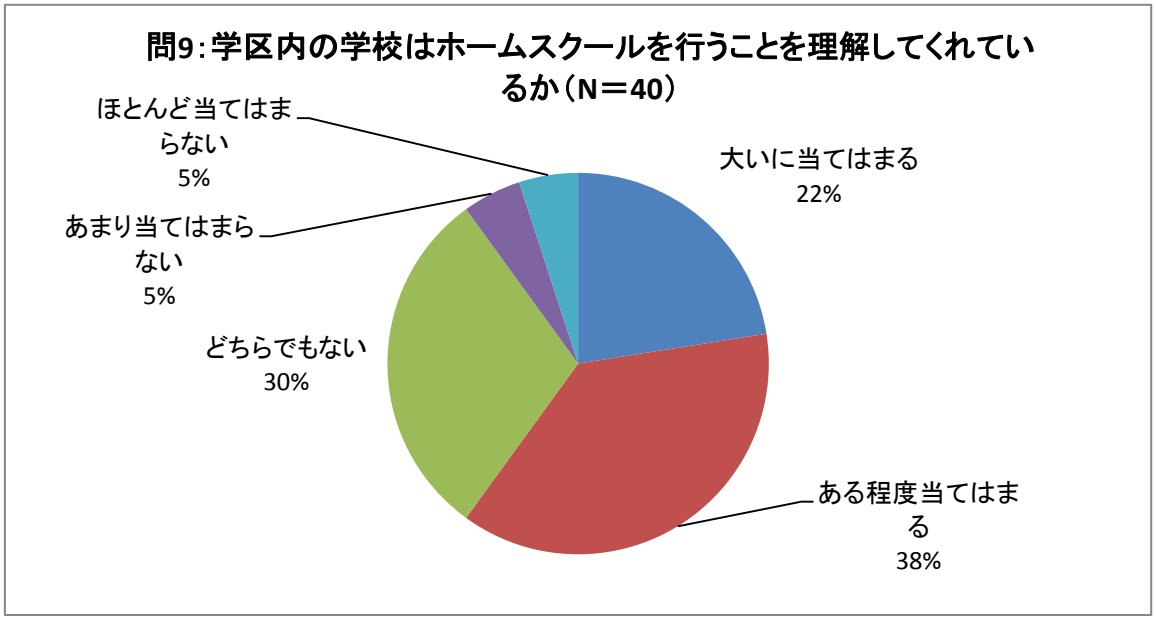
問 8：[お子さんは、ホームスクールを受けていて、どのような様子ですか。(複数お子さんがいる場合は、最初に始めたお子さんを想定してください。）（満足している様子か)]

有効回答数 42



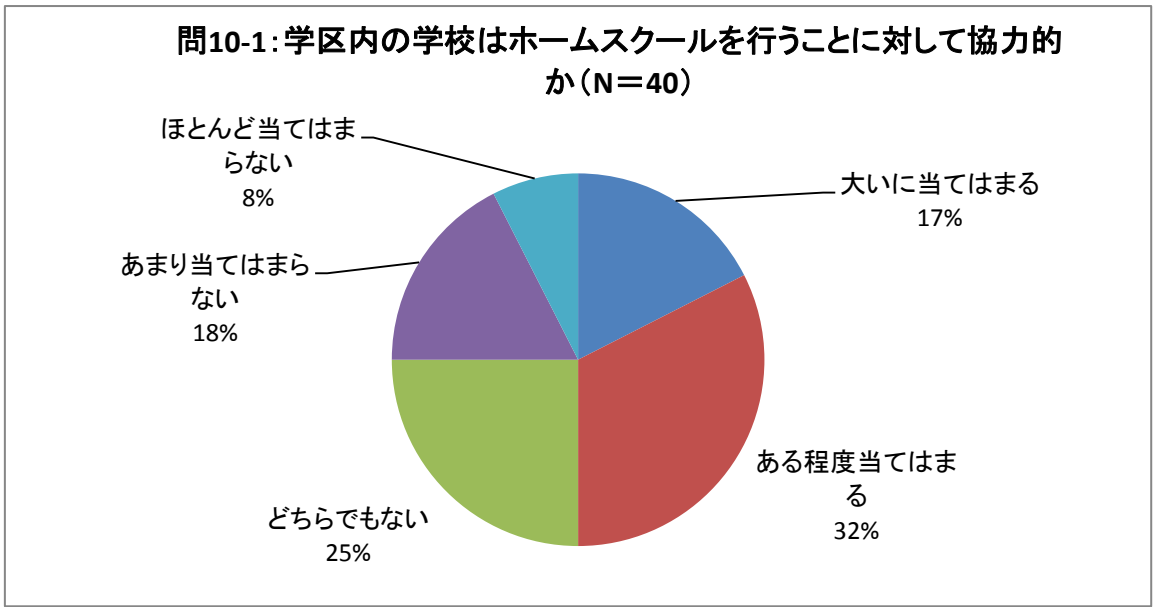
問 9：[学区内の学校はホームスクールを行うことを理解してくれていますか。]

有効回答数 40



問 10-1：[学区内の学校はホームスクールを行うことに対して協力的ですか。]

有効回答数 40



問 10-2：[学区内の学校はどのようなサポートを提供してくれていますか。(複数回答可)]

有効回答数 40

学校から提供されているサポート	回答者数
勉強に関する情報提供	11
授業へのパートタイムの参加	11
教材の提供	18
進路サポート	5
テストの受講	4
学校の施設（図書館など）の利用	14
勉強などの個別指導	9
特に提供されているサポートはない（あるいは知らない）	10

その他の回答(原文のまま抜粋)

- こちらが特に望んでいないので希望交渉していない
- 在籍校では学びスタイルのひとつと認識されていると思っています。転居により在籍校も変わりましたが、ホームスクールをする意思表示をするだけで学校側の支援提供という概念はないため正直ピンときませんでした、ごめんなさい。学校との関係は大変良好で校長以下複数人の教職員と交流はあります。
- 子どもが宿泊行事に参加したいと話したら、クラスメイトにも説明してくれ、ふたりとも楽しく参加できた。
- 放課後に個別に遊んでもらう中で、体験学習のフォローなどをしてくださる予定です
- 逆にこちらの情報を提供している。
- サポートと言うより学校へ好きな科目だけでもいいから来て欲しい様子
- こちらの希望により特にサポートはされていませんが、希望すればサポートしてくれそうな雰囲気ではあります。
- 担任の訪問(ほとんどのサポートを断っている。)担任の訪問も最小限にしてもらっている。
- サポートしようとしてくれているが、子どもが拒否している。

問 10-3：[学区内の学校から提供されているサポートで実際に利用しているものはありますか。(複数回答可)]

有効回答数 40

利用している学校からのサポート	回答者数
勉強に関する情報提供	3
授業へのパートタイムの参加	7
教材の提供	8
進路サポート	0
テストの受講	3
学校の施設（図書館など）の利用	6
勉強などの個別指導	6
何も利用していない	21

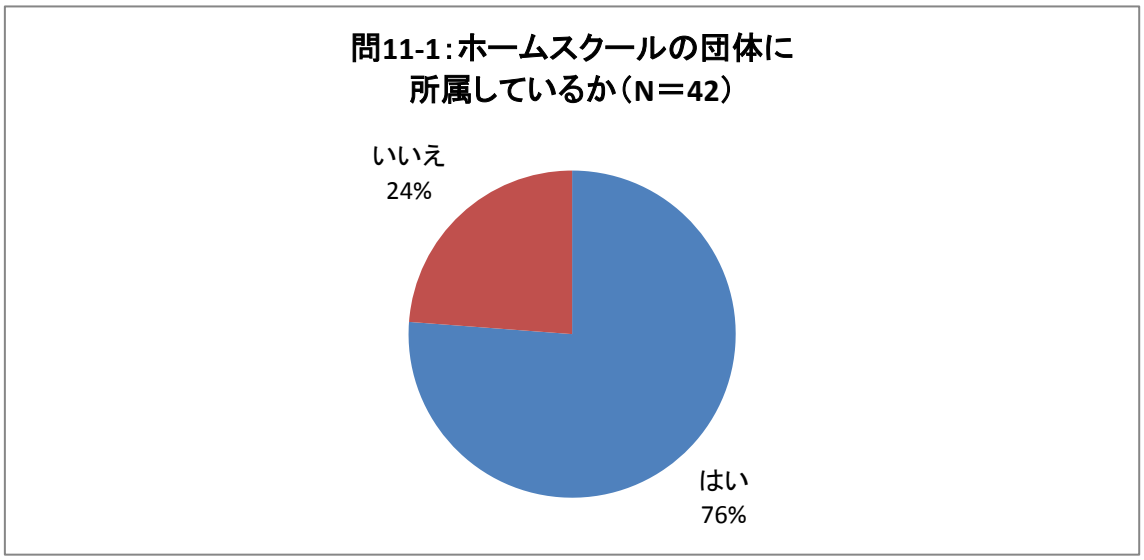
その他の回答(抜粋)

- 利用状況は変化してきた。以前はパートタイム参加しても良い学校もあったが、不可のところもある。
- その時その時の子どもの様子と学校の状況により変化している。
- 給食　昼休みの参加
- 提供して頂けることは有難いが、根本的な考え方が違うので子供も親もあまり関わりたく

ないのが正直な感想です

問 11-1：[ホームスクールのサポートや情報提供をしている団体・グループに所属していますか。]

有効回答数 42



問 11-2：[問 11-1 で「はい」を選択した方のみお答えください。どの団体・グループに加入していますか。(複数ある場合にはすべて書いて下さい。)]

有効回答数 30

参加しているホームスクール団体	回答者数
ホームシューレ	13
アロマスプーン	6
九州ホームスクーリングネットワーク	4
ホームスクール支援協会	2

その他(各 1 つずつの回答があった、原文のまま抜粋)
こんな学校にしたい会、FB 青空ホームスクーリンググループ、多様な学びプロジェクト、教育を選びたい親の会、不登校をグローバルに考える会、おっちー塾、ホームスクーラーマップ、ホームスクーラーとおでかけ、寺小屋てらこ、イクミナル、ホームスクールジャパン

問 11-3：[問 11-1 で「はい」を選択した方のみお答えください。ホームスクールサポート団体・グループから、どのようなサポートを受けていますか。(複数回答可)]

有効回答数 31

ホームスクール団体によるサポート	回答者数
情報提供	28
学習サポート	11
進路サポート	2
会員同士の交流の場の提供	26

その他の回答(抜粋)

- コンサルテーション、イベントの企画など
- サポートを受けているというよりも、会員の皆さんの情報交換の場づくりをしている
- イベントのお知らせ

問 11-4：[問 11-1 で「いいえ」を選択した方のみお答えください。なぜ団体・グループに参加しないのですか。(複数回答可)]

有効回答数 10

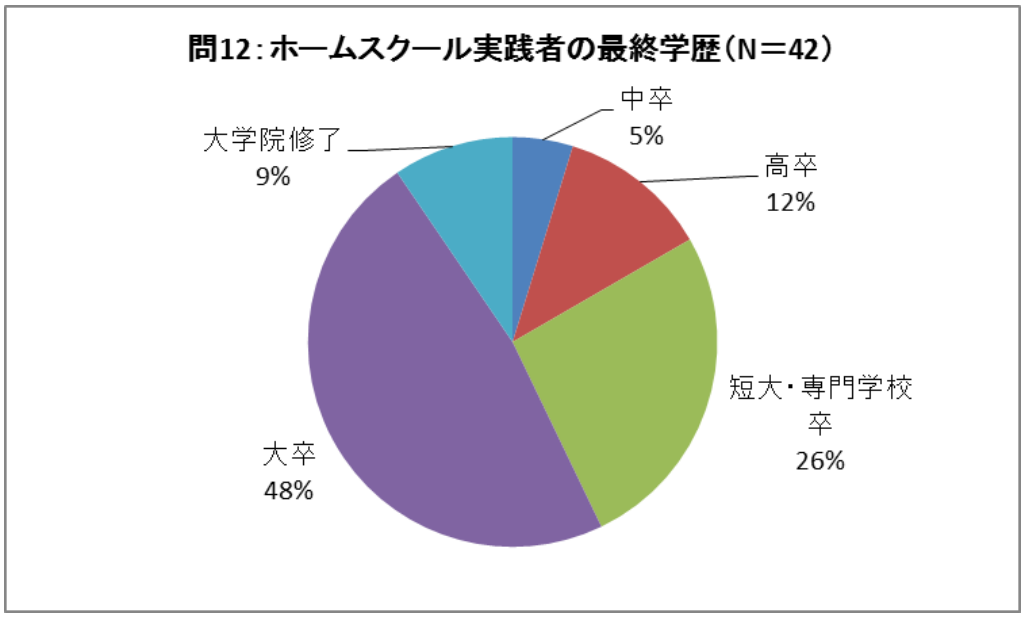
ホームスクール団体に所属しない理由	回答者数
団体の存在を知らなかった	0
団体の必要性を感じない	7
年会費が高い	0

その他の回答(原文のまま抜粋)

- これから入ろうかと考え中です。
- ホームスクールの団体というのがあるのなら何をなさっているのか知りたいとは思います。所属している時点でホームスクーラーなのかどうか疑問は残りますが。
- 団体よりも友達がよいです。友達が団体ならいいですが…団体というか、ホームスクールの集まりがあるメーリングには参加しています
- 近隣に参加したい団体がない

問 12：[ホームスクールを実践している保護者の最終学歴は何ですか。(回答しているご自身についてお答えください)]

有効回答数 42



問 13：[ホームスクールをしていて良かったことを教えてください。]

有効回答数 42 名

(原文のまま記載)

- たくさんありますが、子供たちが望む形で安心して過ごすことができているのが一番大きいです。
- こどもの成長の瞬間を共有できることに尽きる!
- 子供の目が輝いている。良いところを伸ばせる。時間を効率良く使える。
- 子供の成長がよくわかる
- 子ども達の興味関心に沿って学ぶことが出来る。
- 時間の使い方を自分自身で考え、計画を立てることが当たり前となり、学ぶことに関して他人からの「指示待ち」という概念がない。学びに対して能動的になる。
- 好きなことに没頭できる、時間にしばられない、平日でも行きたい場所へ行ける、自分のための時間がたっぷりある、主体的に考える
- 時間の自由
- 個々にあった教育
- 子ども本人が自分で居場所やすることを決めていること
- 子どもの成長とその時に興味がある学習に自主的に取り組める。競争や賞罰制度にとらわれることなく伸び伸び成長できる。個性を伸ばせる。
- ストレスフリー、親子の時間が増えて子どもが精神的に安定している
- 場所や時間的な制約が少なく、自分の責任で行動する経験ができることでしょうか。就学時からホームスクーリング生活なので通学時との比較もできませんが・・・。
- 自分の命の時間を自分で何をするかを決められること。家族が対等でいることの学びを教えてもらえたこと。みんなで家を大事にできること。外を中心に生きるのではなくて、中

(自分の心)を中心に生きることができること。時間を自分で決められるため、体験の幅が広がる。家族と協力が出来ること。コミュニケーションが深まること。
- 子どもが元気になった。
- 学校に行かなくなった子どもを【不登校】【引きこもり】という視点で見ることがなくなった。その子本来の魅力に目を向けて、その力を伸ばしたいと、心から思えるようになったこと。それにともない、子どもの内側から少しずつ自信を取り戻しているのを間近で見ることができていること。子どもの特性を無視して、一般的な『教育』お押し付けずにすんだこと。
- 多様な学び方、育ち方があることを知り、子どもたち自身が自分で考えて、どう生きたいか決めていく力を培うことができています
- 子供が自分で考えて興味を広げていく。強制されず自由。
- 子供のペースで成長していることと、子供を通して私自身が受けたかつた教育をしている。
- それぞれの子どもに合った育ち方ができること。苦しんでいた子どもたちが元気になったこと。
- 子どもとの時間がたくさん取れる
- 子ども自身のペースで学べること
- 子どもがのびのびと明るくなった
- 時間に追われないこと
- 時間を自由に使えることで、子どもの学びのペースを尊重できる
- 本人のペースで過ごせる。学校だと(オルタナティブスクールであっても)、その場にいることを強要される場面があるが、それがないので、本人の選択で過ごせるため、学校に通っていたときよりも気持ち的にも落ち着いてきた感じがします。
- 子どもがよく考えるようになり、自分の意見をもつようになりました
- 現在特になし
- 自分の人生を生きることが出来る
- それぞれの子どものペースで生活し、学ぶことができる。
- 穏やかに楽しく過ごしていること、先生やいろいろな大人との関わりが増えたこと。
- 子どもに笑顔と鼻歌が戻り、毎日楽しそうに過ごしている
- 一緒に過ごすことができる
- 自分もマイペースで生活できる
- 時間に縛られないこと
- 行事がないこと。独自の思想などが伸びる
- こどもが自分ペースでのびのび過ごせている。また、何をするにも常に主体的な選択、行動ができている。
- こどもが元気で楽しそうに学び、真っ直ぐ育ってくれてます。
- 時間に縛られないこと。好きなことを好きなだけできる。平日に施設へ行くと空いている。
- あったものを選びながら学べる
- いつのまにか、学校教育のレールの中でしか子どもを見ることができなくなっていたことに気付かせてくれた。
- 子どもそのもの、子ども自身の成長をベースにした子育てを捉え直すきっかけになった。
- こどもがのびのびしている
- 時間の拘束がないこと(子供のやりたいことを十分に楽しめる時間がある。やりたくないこと興味のないことに無駄に時間を費やさなくていい。)ママ友や教師など、会わない人と無理に付き合わなくていい。すいている時に買い物やレジャー施設が楽しめる。

問 14：[ホームスクールを行う上での悩んでいることや、困っていることなどがありましたら教えてください。]

有効回答数 41

(原文のまま記載)

- なかなか自分の時間を持てない
- ホームスクールについての推測や一面に過ぎないことがあたかもすべてにおいて事実であるかのようにメディアに出ること。特に海外のホームスクール事情から眺めて、日本の学校教育や法律について社会通念のレベルで「こうである」というような記事は教育系サイトに多く、うんざりしている。
- 周囲の無理解。友達を作ること。
- 特にありません
- 子どもが友達をつくりづらい。夫や親戚から理解されない。自分の時間が持ちづらい。
- 特になし
- 教育費がかかる。(学校のように助成がないから。)マイノリティなので、本人が進路選択を考えた時に葛藤する。
- 団体生活、集団活動
- ホーム'スクール'といえるほど何も'教育'はしていないので、ホームスクールを行っているとはあまり言えません。あと、自然な宗教教育ができればベストとは思います。
- 仕事をしづらい。
- 同年代の友達と関わるには、親が率先して団体などに関わって集まりに連れていってあげなければ機会がない。
- 学校に代わる学習や体験にかかる費用がとてもかかる。
- 傾向として家の中で過ごすことが多くなりがち。 一人でじっくり考える環境としては最高だがやはりコミュニケーションを取る機会は積極的にとりに行く必要がある
- 悩みは特にないですが、義務教育期間はどうしても在籍校所属のしばりはあるので、転居や学校長異動の度に経緯や現状を説明しこちらから理解を求めないとうまく付き合っていけないことは気が重く、億劫ではあります。
- 今暮らしているところではホームスクールを選択する家族との出会いがないため、同じ年ごろの子との出会いがないこと
- 勉強をどのくらい頑張ればよいかわからない。
- 進路について、なかなか具体的な先が見えない。
- 進路などメニューの中から選択するわけではなく、子ども１人１人に合ったものを考え、話し合いながらやっていくため、選択肢が多過ぎて選べない
- 今現在、友達を必要としていないこと。
- 親が亡くなったら子供一人残されること。友達がいないこと。
- ホームシューレなど、つながりがあれば困るということはないですが、あえて言えば割とお金がかかります。それぞれの学校、ホームシューレ、パソコン教室、英語、プログラミング教室、ジムにと二人で年間１５０万円以上かかります。
- 実践例が少なく、また法律の枠組みは緒についたばかりで、世の中の理解もこれからであり、迷いながら手探りしながら進んでいること
- 身近に、気軽に交流できる仲間がいないこと
- 子供をみるとこの道がよかったと思うので悩んではいないが、親としては一般的な学歴レールからはずれる事への不安が全くないわけではない。
- 子供が学校に行っている友人からかわいそうと思われること
- 本人も、人と関わるのが大好きなので、そういう場を自分でも主催したり、他のフリースクールと交流したりしていますが、人と一緒でないと実現できないようなこと(例えばスポーツだったり、いろんな企画だったり、ミーティングだったり)をどう実現していくかが、いろいろ考えるところではあります。でも、困っているというほどではないのですが。
- 周りの根拠の無い噂
- 現在特になし
- 世間の理解度(公教育を受けてらっしゃる親御さんの理解)
- 同い学区の子供達と遊ぶ機会がある時にすごく気を使う(学校の生徒への説明が悪く不登校扱いなので)
- たまには誰かに代わってほしい。

- ホームスクーリングという概念が浸透してないことから、心配や助言をいただくこと
- 大きな悩みはないが、いつも考えるテーマは存在する
- フリースクールやワークショップの受講費や出掛ける資金等の補助などあるとありがたいと思う
- 近隣で交流できる気の合うホームスクーラーがいない。
- 友達がいない
- 特にありません。
- ワンオペ(体調が悪い時は困ります)
- 昼に気軽に集える場所がないこと。親以外のサポートが少ないこと。
- 将来、進学留学したいときの資金。
- 仕事ができない
- もっとホームスクーラー同士の交流を活発にしたいが、絶対数が少ないため、日常的な交流までには発展できていないこと
- 私に出来ることに限界を感じる
- 日常的に遊ぶお友達がいない。一日中だらだら過ごし、何をするのも億劫で気分が落ち気味の時がある。

問 15：[ホームスクールを行う上で、大事にしていることや心がけていることがあれば教えてください。]

有効回答数 41

(原文のまま記載)

- なるべく口出しせず、失敗することを含めて経験してもらいたいと思っています。
- こどもの成長の邪魔をしないこと！大人の心配や期待で、未来を決めてかかったり、用意したりしないで、こどもの意思を尊重する。こどもを見上げる姿勢でいること。
- 子供を一人の人間として尊重し、子供の心を一番に考える
- 子ども達がやりたいと言ったことはなるべく実現すること、知識の獲得よりも体験を重視した学びにすること、問いに対して問いで返すこと、家族内のディスカッションを大切にすること、手を使うこと。
- 「みんながそうしているから」「周囲がそう言っているから」等を価値判断基準にして意思決定するのではなく、自分の場合はどうすべきか、自分にとっては何が大切なのか、必要なのかも常に考えた上で行動すること。
- 主体性を発揮する、自分を大切にする、お互いを尊重する、自分が貢献出来ることを考える
- 必ず子どもに聞いてから、全ての事を決めていく。
- 母である私ができることはする。なるべく選択できる環境は作る。
- なるべく外との関わりを持つように心がける。
- 学校や周囲にも何でも話し、理解を深めてもらうように心がける。
- 人と比べない。
- 子供の心を最優先に考えること
- 子ども本人の意思を大事にしながら家庭の一員であることも自覚し、親子それぞれの生活課題には協力したり個別対応したり、その都度摺合せていく。
- 家族が対等でいること。おたがいの心を大事にすること。
- 夢中になっていることはなるべくやらせる。
- 周りと比べないこと。『一般的にこの年ならこう』とか、『他のホームスクールのお子さんが進路を決めた』などの情報に、自分が振り回されない。自分のうちの子の様子に目を凝らし、この子に、必要なことは何かを考えつづける。
- 家族で、ざっくばらんに話し合う
- 親が何かを無理矢理させない。
- 子供の気持ちを大切にしています。子供がやりたいことをさせています。私自身理不尽な

ことを学校で家でさせられてきましたので。頭の中に根付いていた学校信仰がとれて、やっと家庭教育を、うけいれることができました。
- 自分の子どもとは言え、違う生命として子どもを尊重すること。行く行かないなど現象ではなく子どもの中身を見ていること。
- 子どもを見つめ地道に丁寧にやっていくこと。どこかに通ってくれたらいいというわけではない、ということを肝に命じておくこと。
- 親や子、学校の先生方、支えてくれる沢山の人の思いを感じながら、自分たちの心地よい環境を整えること
- 子供が本当にやりたいことをできる環境を整える。教養は日々の生活や会話の中で触れさせる。
- 子どもが生き生きと、そして安全に成長して行くこと
- 日々の暮らしを丁寧にすることを、心がけること。暮らしの中で学べることがたくさんあると思っているので。
- 本人の考え
- 晴れやかで楽しいことを思い描くこと。
- 子供の人生を奪う事なく(コントロールせずに)しっかり前を向いて何事も楽しく毎日過ごすこと
- 大人と子どもは年齢が違うだけ。一人の人としてお互いを尊重しあって、学び合い助け合いながら生活しています。
- 自分で決めること、いろいろな人と関わること
- あくまでも、子どもの意思を尊重し、家庭においては自己肯定感をはぐくむこと
- 子どもが種だとすると親は畑。その子が芽吹き伸びていくことを信じて、見守る。
- コミュニケーション
- 親も一緒に楽しむ
- 体調が良くない時は休む
- 周りのホームスクーラーと比べないこと
- 対等であること。先回りな提供しないこと。
- 子供の興味関心が沸き起こった瞬間を逃さないように、求められれば手助けしたり、一緒に調べたり考えたりする。見守る、寄り添う。口うるさく言わない。
- こどもの自己肯定感が下がらないことと、身体の安全。前向きな自立。楽しいか。こども主体か。
- なるべく自分で考え、選択させたいと思い過ごしています
- 自主性
- 息子のニーズの把握と、自分自身の気持ちに嘘をつかないこと
- こどもの“やりたい”を見守る
- 生活の細かいところまで、なるべく本人が自己決定できるように心がけている。本人のやりたいことをできるだけ実現化できるようにサポートしている。

問 16：[お住いの都道府県はどこですか。]

有効回答数 42

居住地	人数
北海道	2
関東地域	23
中部地域	3
近畿地域	5
中国地域	1
九州地域	7
海外在住者	1
合計	42